
東方転生旅人録

クレトス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方転生旅人録

【Nコード】

N6914T

【作者名】

クレトス

【あらすじ】

何千回、何万回と様々な世界に転生し、悠久とも感じれるほど永い時を旅し続ける男。

しかし、それは《神》によって強制的にさせられる旅。

《神》にとって玩具のような存在である旅人は、どんな苦境でも諦めず、元の世界に帰るために旅を続ける。

大切な、何物にも返られない、とても大切な存在を護るために。

これはその男の永い旅の記録……

ただ今超古代編、外道「アルカトラス」と天災薬師「八意永琳」、
お気楽お転婆桃姉「綿月豊姫」、おつちよこちよい天然妹「綿月依
姫」とその他さまざまな人が描く東方模様。

ブログ的な何か(前書き)

ブログ的な話

次回に東方キャラはでるよ

プロローグ的な何か

……はあ、暇だ。

ふう……ん？ 誰だい？

その顔は――… ああ、なんだ君か。

まあ、此処を知っているのは君ぐらいだからね。

普通に考えて君しかないか。

しかし、驚いたな。 君がこの時期に来るなんて。

ああ、いや別に嫌って意味じゃないさ。

ただ単純に驚いただけさ。 めんどくさな事が嫌いな君が此処に来たことにだよ。

うん、そうさ。 他意は無いよ。

まあ、いいよ。

ささ、座ってくれ。お茶を出して持てなそう。

今暇を持て余してた所でね、正直なところいいタイミングで来てくれたよ。俺の暇つぶしの相手になってくれ。

嫌だ？ まあ、そう言わずにさ？

ね？

うん、そうそう。そこなくなっちゃ。

そうだな……少し話をしよう。

そう、話だよ。俺の話さ。

なあに、話と言ってもただの愚痴みたいな独り言だ。

茶うけだと思って聞き流してくれたって一向にかまわない。

ーおいおい、だからと言って本当に聞き流しすんじゃないぞ。

今のは冗談だと思ってくれ。

さて、そろそろ話そうか。

何年？

何年だったか。

この異世界を旅するのが始まってから何年が過ぎたのだろうか。

百年？ 五百年？ 千年？

もしかしたら、何万年かもしれない。

だけど、もうそんな事さえ覚えていない。

もう最初の頃の記憶なんてかすれてしまったさ。

莫大な月日が流れた。

いや、月日では小さすぎて計れないな。

悠久とも言える年が流れた。

数え切れない程、様々な異世界に行った。

旅した異世界の中では20世紀が一番多かったな。

稀に5世紀もあったけな。

いやあれは紀元前か？

まあ、どうだっていい。

君には縁がないどころか有り得ない話だからな。

？ 何をしに行ったのかつて？

やったことは様々だったな。

只一つ言える事は、決して物見遊山の旅ではなかったよ。

いろんな世界で沢山の職業を体験したさ。

米軍の秘密特殊実験部隊「MAC F O - S U」となって世界各地の戦場を巡った。

実験部隊と言っても身体に何か薬を投与した訳じゃない。ただの
新兵器の実践テストぐらいさ。

……まあ、体を溶かす細菌兵器や的をナノレベルまで分解する銃な
んかもあったけどね。

イギリスの諜報員^{スパイ}「S O E」としてロシアに潜った事もある。

スパイとバレて装甲車やら爆撃用ヘリに追っかけられたのが一番の

思いでだね。

もうあんなバイクレースはゴメンこうむるよ。観客がロケットランチャー無反動砲で武装した重装備兵でレース相手は熱探知型自動追尾ミサイルなんて…泣きながらバイクのハンドル握ったさ。

スパイになる前はギリシャの「聖ヨハネ騎士団」として聖地を守るために武器を振るったね。

エルサレム防衛戦は結果的には負けたけど、俺個人としては勝ったと思っっているよ。なんたって敵指揮官のクビをとったからね。

正真正銘まさに「試合には負けたが勝負には勝った」ってやつだね。

9

時には三國志の放浪人兼武将兼策士として自由気ままに闘ったな。

赤壁の戦いは少し暑苦しかったがとてもいい眺めだったさ。あの時の曹操の慌てっぷりと言ったらもう…ははっ！

おかしいを通り越して可哀想だったよ。火を付けた本人が言うことではないが、今でも同情するよ。

百年戦争は…ホント、参ったよ。確かイングランド王国とフラン

スだったか？

実はね、あそこまで長引くとは思っていなくてね。あの時はフランスに悪いことをしたよ。戦争を仕組んだ当事者として謝らせてほしかったさ。でもそのおかげで俺はかなり儲かったけどね。

後は……そうそう、第3次世界大戦。あれを忘れてはいけないな。凄かった、その一言だよ。

まさか世界の9割の国が参加するなんて夢にも思わなかったからね。俺はドイツ軍歩兵部隊総指揮官として戦争に参加したけど、あの戦場はとても壮観な光景だったさ

海を黒く埋める戦艦、母艦、魚雷の数々。

空は日光さえ届かない程、戦闘機やミサイルなんかが忙しいように飛び回っていたな。

各国が入り乱れ、二つに分裂した大戦さ。

まっ、戦争は結局は各国が戦術核兵器を使用、乱射。そのおかげで

地球は文字通り「灰の星」になったさ。

人間は変わらないよな、何時の時代でも。いや、この場合は世界の方が正しいかな？

……その様子だと、君の世界では起こってないようだね。

まあ、その方がいいけどさ。

軍人をしていた俺が言うのもなんだけれども。

？ 安全な世界には旅したことはないのか？

残念だが、それは俺には分からない。

俺が決めているワケじゃないからね。

でも、世界の中にはいくつもあったよ。君の言うような「安全な世界」とやらはね。

でも、たとえ世界が安全でも俺の身の回りには必ず危険が付きまわっているんだよ。

厄介ことがあちらからやってくるからね。

その旅で沢山の人に出会ったさ。

奴隷、農民、平民、商人、貴族、王族、聖職者、旅人、マフィア、医者、戦人、軍人、多種多様な人々だよ。

色々な生き物を見た。

昆虫、魚類、鳥類、両生類、爬虫類、から連なる生物はなんでもだ。

その中には俺が元居た世界にはいない生態系を持った生き物もいたね。

宇宙外知的生命体とも言え換えられる生物も中にはいたよ。

姿は……気持ち悪い、の一言だ。あまり語りたくないね。思い出すだけで気分が悪くなる。

異世界を旅する中で人も殺した。

当たり前だけど、俺は軍人だったり武人だったりしたからね。仕方ない場合もあったが、時には嬉々としながら殺したこともあったかな？

人だけではないさ。

動物、人間様々な生物をこの手で殺した。

大人だろうが子供だろうが、どんな生物だろうが関係ない。

希なケースは「エイリアン」とも言える生物も殺したね。感想は…さっきと同じだね。

その異世界で様々な戦い方を学んだ。

剣術、刀術、槍術、薙刀術、拳術、斧術、棒術、中国三大流派である少林寺派、武当派、峨嵋派がび、あらゆる武術を習得したね。

暗器術、忍術、隠密、暗殺術、窃盗術、開鍵術、投擲術、変装術、

偽装術、たくさんの殺し屋に必要な技術を叩き込まれた。

拳銃、突撃銃、機関銃、少銃、散弾銃、狙撃銃、手榴弾、地雷、爆発物、無反動砲、罠術、ミサイル、自分が見た全ての火器の扱い方、仕組みを覚えた。

傷や骨折などの総合的医学、火の起こし方、汚水の洗浄方法、交渉術、天気の見方、心理学、サイバー知識、核知識、何でもいから知識を貯め込んだ。

乗馬、車、バイク、電車、装甲車、戦車、飛行機、戦闘機、ヘリコプター、軍用ヘリコプター、潜水艦、小型船、大型船、軍艦、あらゆる乗り物の乗り方を身に付けた。

ありとあらゆる技術を修得した。

生き残れる為に、死なないためには必要ない技術だろうが全て、可能な限り、限界まで、際限なく覚えたさ。

この旅の始まりは、自らを「神」と名乗る奴に殺されてからだった

ね。

それだけはしつかり今でも覚えているよ。

俺は「元居た世界」に帰してもらったため異世界を旅をする事になった。

それが「神」から唯一渡された道だったしね。

以来、俺は「元居た世界」に帰るため旅を続けるんだよ。

大切な、とても大切なモノがあるからね。

その旅は何時も危険が纏わりついて、何回も死にかけて、それでも生き延びて、でも死んで、また違う異世界を旅する。

俺には死ぬのより辛い道だった。

何度も自殺しようとした。

だけど、俺は死なない。

いや、この言い方には誤りがあるな。

死にはするが、その後すぐに「部屋」に戻って、また別の世界が待っているしね。

ホント、馬鹿みたいな話しだろ。

これ以上無いぐらいに辛く、永遠とも思えるぐらいに長く、際限がない険しい旅だった。

しかし、そんな俺の旅は「神」にとっては只の暇つぶしにしか過ぎないようだ。

「神」から見れば俺は意志を持った、自分達を楽しませてくれる最高の人形なのだからね。

簡単に終わってはつまらないから、何回も世界を旅させるんだろうよ。

あいつらは映画を見ているような気分だろうよ。

あいつらの文化に「映画」があるかは分からないが。

まあ、いい。

俺の話はこのぐらいで終わりにしよう。

何万の文字を並べても、何億の言葉を紡いでも現実是不変ならないさ。

こんな事を言っても俺の旅は終わらないからね。

まだ何万何十万もしかしたら何億と世界が俺を待っているかもしれないしな。

何時終わるかは分からないさ。

それでも俺は旅をする。

いや、するしかない。

「元居た世界」に戻るためにはこれしか方法は無いんだよ。

まあ、いい。

俺の話は終わりだ。

すまないね。少し暗い話だったかな？

何？ 少しどころじゃない？

ははっ！ 悪かったね。 全身全霊で立ちながら謝まるよ。

さて………どうやら、そろそろ行く時間のようだな。

ふう、もうちょっとゆっくりしたかったんだが、いかんせんそんな暇はないし、何よりも彼女がひっきりなしに呼んでるからね。

良い男は女を待たせない、ってね。

続きはまた今度話そうか。

なに。心配ないぞ。

俺にはまだたっぷり時間があるのだからね。

どうせすぐ会つかもしれないし。

まっ、またるくでもない世界だしな。

ゆっくり、のんびり旅をするさ。

んじゃ、縁があったらまた会おうぜ。

ん？何呼び止めるんだ？

名前？名前って……俺のか？

あ！そう言えば名乗ってなかったな、名前。

でもな……毎回毎回世界ごとに名前が変わるからな。何を名乗ろうか迷うな。

うん。よし。この名前を名乗ろう。

この名前を名乗るのは君が初めてだ。言つなれば「心の名前」ってやつだ。

幸運だぜ。心して聞けよな。

アルカトラス

そう、アルカトラスだよ。

決してアメリカにある監獄の島じゃないからな。

意味？勿論ちゃんと意味だつてあるぞ。「矛盾と対局」つて意味だ。

この意味は俺自ら決めただよ。おい、厨二とか言うな。

決めた理由はな俺を元にして決めたな。

「矛盾」は《俺は死ぬが、死ぬことはない》ってことから決めた。

ほら、俺ってさ世界ごとに死にはするけど、最終的には生き返って「部屋」に帰って、また別の世界を旅するだろ？

そこから取ったのさ

《対局》はさっきと同じ俺から決めたよ。

時には騎士であり盗賊団。

時には武人であり狙撃者。^{スナイパー}

時には反政府組織^{ゲリラ}であり治安維持軍。

時にはテロリストであり対テロリスト特殊急襲部隊。

各世界ごとに対なる職業に就くから《対局》を選んだのさ。

まあ、人でありながら人とはかけ離れている事も理由だが、これは《矛盾と》とも被るから無しの方向で頼む。

アルカトラス 《矛盾と対局》

ちゃんと覚えてけよ。

覚えたか？ん。よし。

それじゃあそろそろいいか？

大丈夫大丈夫。俺と君の仲だろ。このくらい何ともないぞ。

それじゃあ仕切り直してー

ー縁があつたらまた会おうぜ

プログラムのな何か(後書き)

次は明日か明後日

マイルドな最悪の始まり(前書き)

前半は「部屋」での話

後半は少しだけでも永琳登場

マイルドな最悪の始まり

扉が2つある部屋

その部屋には二人用ソファが1つ、そして大きめの木で出来た事務的机が1つ。それだけ。

いや、むしろそれしかない。

二人用ソファは机と向き合うように配置されており、その机の後ろ側には扉が2つある。

2つとも同じように木で出来た古風な種類で、金色のドアノブがより一層存在感を引き出している。

壁紙は白を基調とした黄色が混ざったスライブがいくつか入っており、床には大理石と思われる石畳が敷かれており、清楚感が感じられる。

しかし、窓などの外の景色を伺えるものは何一つなく、天井から吊り下げられたシャンデリアの灯りのみが、室内を明るく照らしている。

窓がない。

たったそれだけで閉塞感をひしひしと目と体で感じさせる。

それしかない部屋。

「ふあ〜っ、んん」

「欠伸するなら手で口を押さえなさい、もう……」

そこに一組の男女の姿があった。

机に座ってパソコンで作業しているのが女性、そしてソファに寝転がって本を熟読している男性。

さて、

知らない人に説明するが、ソファに寝転がっている男性はタグでご存知のこと本作品の主人公「アルカトラズ」だ。

アルカトラズは今まで熟読していた小説を読み終えたのか、小説を閉じるとソファに寝転がったまま女性に話しかける。

「なあ、まだかよ？」

「……少し待っててね。ちょっと時間がかかるのよ」

今の会話から夜の営みなんかを想像した超上級者もいるかもしれないが、生憎さまそうゆう関係じゃない。

「ふーん。 てか、俺がこの部屋に来てからだいたい……そうだな、体感時間で1時間かかってんぞ。 もっと早く送れないのか？」

「無理ね。 人間界に送るならまだしも『別世界』にあなたを送るだけで重労働なんだから」

それに、私には時間なんてあまり気にしないしね。

端的に会話を続けるが、彼女はパソコンから目を離さず作業を続けている。

「なあ、神族でも大変なのか。 こう言った作業は？」

「そうね。 私はただの天使だから」

「……天使つてもっと清楚で「高領の花」イメージがあっただけど、普段のお前を見るとそうは思えない不思議」

「ぶち殺すわよ」

鋭い眼光で睨まれた。

思わず顔をそむける。

なんでだ、今の最大限奈までに気を使う発言のどこが悪かったんだ？

やはり種族が違つと常識も違つのか？

「ふう、種族が違つただけでこんなにも虚しいのか」

まあ、彼女は天界の住人。しかも、天使なのだ。

その証拠に彼女の背中からは白くて清らかな白翼が見られるし、頭の上には輝く円状の光がある。

彼女の名前はアルカトラスは知らないが、どちらにしても、彼のサポートをする天使なのだ。

「なあ、次はどんな世界なんだ？」

「ヒミツよ、ヒミツ」

さっきの発言は気にしてないのか、彼女は書き込む作業を続けながら彼の質問に返事した。

「ヒミツじゃなくていいから言えよ。俺の命に関わる事なんだぞ」

「あら、そんな事したらつまらないじゃない。大丈夫よ、最初は安全な場所に送ってあげるから」

可笑しそうにクスクスと笑う天使。

その反応を見た俺はやれやれと言わんばかりに両腕を振る。

このやりとりを見れば付き合いの長い夫婦みたいに見えるが、さっきも言った通り、全然夫婦なんかの親しい関係ではない。

彼は溜め息を吐き出し、眩い笑顔で、彼女と向き合う。

「前回も同じ事を言ってたよな？」

「そうね。 ええ、同じ事を言ったわよ」

ソファーから立ち上がった彼は、軽い足取りどりで彼女の机まで行くと思いつきし頭を掴み

「じゃあさ、なんで前は『バッキンガム宮殿』なんかに送ったのさ？」

額には青筋が何個も浮かんでいた。

見ての通り、彼は怒っていたのだ。

そう、前回アルカトラスは別世界に送ってもらった際、イギリスにあるバッキンガム宮殿の寝室に直接輸送されたのである。

勿論、彼は何処に送られるかなど知らないし、どんな状況かもわか

らない。

ベッドにいるチャールズ皇太子夫妻とバツチリ目が合い、乾いた笑いをあげたその後、宮殿直属の近衛兵部隊とイギリスを舞台にした46時間にも及ぶ壮絶な鬼ごっこを繰り広げたのだ。

「なあ本当に分かっているのか?! 危うく死亡時間の最速記録を叩き出しそうになったんだぞ!!」

怒声と共に彼女を睨みつける。

ちなみに46時間耐久鬼ごっこの結果は、

偵察ヘリをステインガー連射でなんとか撃ち落とす

SAS（イギリス陸軍）22SAS連隊をA、B、D中隊の殆んどをぶん殴って気絶させ、

極寒の北海に一人で飛び込み、

高速偵察ボート&攻撃ヘリを爆弾とハプーンで撃沈せて、

オランダまで泳いで亡命したアルカトラズの超人的な体力と知力、そして根性ガッツの勝利である。

「もう大丈夫ったら大丈夫よ。」

「……本当だろうな？」

半眼で睨み続ける。

はっきり言つて、もう一度あれを成功させる自信がない。

「ええ、本当よ。実はねあの時の事を少し後悔しているのよ。本当にごめんなさいね」

「……まあ、そこまで反省しているならー」

「本当に後悔してるわ。エリア51に送ったほうがもっとおもしろかったのに、って」

「おいおい！ 絶対反省していないよな！？ 悪化してるじゃん！
！」

アメリカにあるエリア51にはエイリアンがいるらしいが、会う前にネリス空軍基地からムキムキでマッチョなアメリカ海兵隊達わざわざ銃を携えて、俺を抱き締め（物理的にね）に来るだろう。

いくらアルカトラスでもそれから逃げることは出来ないし、先に精神が保たない。

想像してみるといい。

マッチョ兵がムキムキな上腕二頭筋を見せつけ、額の汗を輝かせながら自分の後ろを笑顔で追いかけてくる姿を。

呪われた人種（ゲイ野郎）なら大丈夫だが、生憎さま彼はノーマルな人種だ。

マッチョ兵に追っかけられたら「走って逃げる」というコマンドの前に、「吐く」という行動が出るだろう。

これはアルカトラズの勝手な想像です。アメリカ兵がゲイ野郎かもしれない、という妄想です

「あらやだ、冗談よ。」

「お前が言つと冗談に聞こえないからやめてくれ」

余談だが、18回前の世界で彼は悪魔信仰者（ゲイ野郎）の集団に股間に付いている「パイルバンカー（性釘）」で掘られ掛けた事があるが、それはまた別の時に話そう。

「もう、大丈夫よ。」

「本当か？ 本当にか？」

彼女はいい加減疲れたらしく、話題を切り替える。

「あ、そうそう。今回の世界も彼が来るわよ」

「彼つてーあぁ、またあいつか……」

その人物を思い出し俺は思わずだが顔を歪ませた。

「俺さ、アイツの事が苦手なんだよな。生理的に」

「でも彼はあなたの事を入っているのよ。よかつたじゃない」

「良かないよ。ジープンの下がノーパンゲイ野郎だぞ？ はあ、行く前からテンション下がるな……」

そう言いながらまたため息を付く。

顔色はこれから味会うと思われる疲労感で埋め尽くされていた。

「シャキッとしなさい。準備は終わったわよ」

「ん？ まじか？ よし」

背伸びをし、固まった軽く体をほぐす。

「それじゃあ、そろそろ行くとしますか」

木の扉に近づき、ドアノブに手をかけ捻る。

「ええ、頑張つてね」

彼女の何とも勞いの言葉を受け、ドアノブを引く。

すると、扉の中から眩い光が溢れ出し、アルカトラスを包み込む。

「それでは、良い旅を」

彼女がそう呟くと同時に、光は最高潮に達して、網膜が焼ける程の残光を残し、消える。

アルカトラス 実に232回目の旅が始まる。

気がつくくと、森の中にいた。

それが分かると、俺は周りを見渡し状況を確認する。

「……よし。別段と変な場所ではないな」

うん、さっきのやり取りを実は気にしていたのであった。

彼は案外と小心者なのだ。 繊細なガラス細工のハートの持ち主なのだ。

「森に居るということは、今回は転送パターンか」

ちなみにパターンには三種類あり、憑依パターンと転生パターン、そして今回みたいな転送パターンがある。

憑依パターンは他人の体に乗っ取り、転生パターンは赤子から始まり、転送パターンはそのままの体で世界に送られるのだ。

次に自分の格好を見してみる。

紺色のジーンズに、丈夫で動きやすい黒色の軍用ブーツ。

上は薄い長袖の黒インナーを着用しており、その上から黒のジャケットを被っている。

どこにでも居る、人畜無害な一般人だ。

中身は「歴戦の猛者」だが、そんなのは普通は見えないからよしとする。

「ん！ 格好も異常なし。それじゃ近くの街を目指して張り切って行こー」

「もし、その御方」

「？ ああ？」

いきなり声をかけられたので、間抜けな声をあげながら後ろを振り向く。

「すみません。いきなり呼び止めてしまいました」

「ーん」

そこには女性が1人、自分を笑顔で見つめていた。

髪型は銀色の後ろに三つ編みにしており、服装は赤と青が交互に入り交じったナース服？ 見たいのを着ている。

ナース服？ には何か点と線が付いており、頭には十字架のマークが入った帽子を被っており、随分と個性的な服である、と感じた。

顔つきは美しく、いや、とても綺麗で、絶世の美女と言い換えても何ら謙遜はない程、美しかった。

いい女だ、美人だ。告白しよう。

あ、違う違う。そうじゃない。

「あら？ どうしました？ さっきから黙っていますか……」

「あ！ いえ、何でもありませんよ」

「変な御方ですね……ふふっ」

彼が黙っていたのは、その女性が可愛かったせいで惚けていた訳ではない。

女性から発せられる視線。これだ。

さつきからニコニコと笑みを絶やさない美顔とは裏腹に、彼の心中を覗くような視線が俺を驚愕とさせた。

「ところでこの山には何用で？」

女性が自然そうに言葉を発する。

しかし、この言葉一つ一つに相手を知るための罠があるのが、なんとも嫌らしいところだ。

「ええ、少し薬草を摘みに……」

俺はそう言うと同時にジャケットの中にあるポケットからビニール袋に入った薬草を取り出す。

勿論、ポケットには薬草なんかは無く、これは手をジャケットの中に入れた瞬間に《探求者の秘宝》を展開。その中から取り出した

のである。

「この種類は……」

「ヨモギとナズナです。煎じて飲むと腹痛に効く薬草ですよ」

怪しまれないように笑顔で返す。

この位はプロの殺し屋としてお茶の子さいさいなのだ。

「あら、随分と詳しいんですね。」

「ええ、少しばかり医学を習った事がありましたね。」

「まあ、そうですね。」

すると、女性はわざとらしく手を叩いて、

「あらあら、自己紹介が遅れてしまいましたわね。」

「そういえば、そうですね」

その女性は偽の笑みを張り付けたまま、笑顔で、

「私の名前は八意。八意 永琳と言います。ただの薬師ですよ」
彼に言った。

その時、アルカトラズは

（こんな交渉事が出来る薬師って……、いったい何者だよ）
そう思いながら、

「俺の名前は藤堂 真。ただのしがない旅人ですよ」

とりあえず、偽名を名乗っておくのだった。

嘘笑には偽名。話し合いの基本だよな？

天才VS旅人の化かし合い、勃発

マイルドな最悪の始まり（後書き）

次の投稿は今週には頑張る

称号を獲得しました

〈MAY

BE

I

CAN

FLY〉

（前書

長くてグダグダ

勘弁してね

とある森の開けた場所。

なぜかそこは木が生えて無く、草さえも茂っていない地面向きだしの場所。

人が通る道とは言えない獣道を道なりにしばらく進んだ所に、その場所はあった。

普段なら動物やら妖怪が拠点として使用している場所で、一般人なら近付く事さえもしない場所。

不思議なことに、そこには一組の男女の姿があった。

「あら、藤堂^{とうどう} 真さん^まと言っんですか。 とても良い名前ですね」

「ありがとうございます。 あなたの名前は……永琳さん、でしたっけ？」

「ふふっ、真さんは初対面の女性いきなり下の方の名前で呼ぶのですか？」

「お？ これは失礼なことをしてしまいましたか？」

男性は会話の間ずっと笑顔のままであり、女性の方も人形かと錯覚

するような作り物の笑みを浮かべている。

「まさか、全然。 ですが、これは口説かれてると解釈してもよろしいので?」

「どうぞ、ご自由に」

「あらあら、手厳しいことで」

八意 永琳は不気味な笑顔で攻め、それを藤堂 真は余裕の体で受け流す。
アルカトラス

第三者から見ればただ普通の会話だが、その水面下では激しい化かし合いが行われている。

真はこの女性、八意 永琳が「天才」である事は知らないが、「厄介な女性」としては認識しているようだ。

「ところで、真さん」

「はい何でしょう?」

アルカトラス
真は早くこの会話が終わらないか、この女性は一体何者なのか、と頭の中で冷静に考察しながら会話にあった返事する。

「ここらは都市からも遠く離れ、道と言う道もろくに整備もされておらず。さらには危険な原生生物があたり一帯に生息しています。まさかとは思いますが、この山にはお一人で来たのですか？」

「はい、一人で来ました」

「ふうん……あら、そう」

永琳から発せられる質問がジワジワとだが岩を浸蝕する岩のように彼の現状を暴いていく。

しかも、今の返答が不味かったのか手を顎の当て何やら考え事をしている様子。

しかも最悪な事に、彼はたった今現在この世界に来たばかりである。

故に、ここが何処なのか、どんな種族の生き物が生息しているのかさえ分からない。

だからここでの一般常識ノールが全く持って、分からないのだ。

永琳が話している言葉を見れば日本語に近いため、此処は日本列島のどこか、はたまた日本列島から近い大陸だと推測される。

しかし、それは推測だけで実態は分からない。

もしかしたら、俺の知らない新しい大陸があつて、そこにいるかも

しない。

もしくは、この予想を遙かに上回って「地球」ではない、別の惑星かもしれない。

「……ちっ、厄介だな」

「？ 何か仰いました？」

「いえ、独り言です。 お気にならず」

思わず出してしまった独り言に自らの癖を心の中で叱咤しながら、
今現在のことより未来のことを考える。

先頭せんすは――街だな。

街に行けばその地に住む人間を見て、聞いて、感じ取り、この世界の事や一般常識を学ぶことが出来る。情報を集めるにもこれ以上の場所はないだろう。

彼女の服を見ればわかるが、その造りはかなり凝っておりこの意匠の服造れるだけの文化があるのは間違いないだろう。となれば、いくらかは言動は通じるはず。

だから街を目指すのだ。

永琳に街の場所を聞くのもいいが、この永琳とやら、本性が分からない。そんな人物に物事を尋ねるのはやめた方がいい。

一刻も速く、この現状から抜け出さなければ。

俺はそう思い、話を切り上げようとする。

が、

「では、時間があるのでそろそろこの辺でー」

「あ、その薬草の入った袋、もっと近くで見ても構いませんか？」

「……はい」

なんとも絶妙なタイミングで話題を追加していくのだ。

しかも言葉と同時に近付いて来てるし……、会話の意味が無いじゃん。会話の意味、知ってますか？ と小一時間問いただしたいところだ。

そう考えている間に、永琳は彼の手から薬草の入った袋を取り、吟味するように中身を見る。今、逃げようとしてもかなりの至近距離。簡単に捕まってしまうだろう。

逃げたくても、逃げられない。

これが俺の現状であった。

「この薬草は御自分で使いますの？」

「いえ、友人が少し腹を痛めて……、たぶん食あたりかなんかでしょう」

「そうなんですか。今は季節的には暑い時期ですからね」

「ええ、あれほど口に入れる食品には気をつけると言っていたんですがね」

「そう、ご心配でしょう。……あ！ でしたら、私が見て差し上げましょうか？」

「！ いえ、医者に見せるほどでもありません。自分で何とかできますから……」

何か裏がありそうな態度、だがそれを感じさせない物腰でこちらに近づこうとする永琳を離す。

なんとかして離れられないか？ と考えている途中、思わず顔を手で覆いたくなるような事態が起きた。

「……はあ。」

永琳が近付き話している最中に、俺を見つめる視線永琳以外にも増えた事に気が付いた。しかも1つ2つではなく複数。

間違いない、誰かが俺を監視している。

監視されてる事が解った時点で、厄介ごとが襲いかかってくる現状を嘆くのを止め、周りを観察する事にした。

「このヨモギはあっちの木の近くで、ナズナは少し離れた向こう側の森で採りました」

俺が永琳に薬草を何処で採ったのかを説明するために、後ろに振り返る。他人から見ればそう解釈しただろう。

しかし、これは単なる隠れ蓑かくれみのであり、本当は周りを見渡す事が目的。場所を指差し、ぐるりと一回転しながら周りを見てみる。

そして、自分の身の回りが判明。

（あっちゃー、囲まれてるな。これ）

分かった事は、俺と永琳の周りにはざっと7、8人の人間が囲んでいる。

しかも、近くにある茂みの中からは反射光と思わしき小光が一度だが、はつきり見えた。照準望遠器スコープの反射光だろう。

望遠鏡では？　と思うかも知れないが、俺と監視しているヤツらの距離は10mもない。　距離が近いのに望遠鏡なんかは使わない。　肉眼で十分だ。

ていうか、望遠鏡を使って見ているなんて、変態の覗き野郎だ。　だから、^{スコップ}照準望遠器だと判断。　つまり、^{スナイパー}狙撃手が数人、森に潜んでいる証拠。

しかももしか最悪な事に、今俺が居る場所は森の中でも開けた場所。　つまり、もしかしたら襲ってくるかもしれない弾丸の障害物となるものが、何一つ無いのだ。　一歩間違えれば、風通しのいい省エネボデイになってしまう。

地球環境的には大賛成だが、俺自身がなるなんて事は絶対避けたい。　俺はいつだって自分勝手な性格なのだ。

更に疑問が浮かぶ。

何故、囲まれているか、だ。

マフィアやら正規軍やら様々な集団に何十回も追っかけられたことがあるから、銃を持った人に囲まれるなんか今更だ。　が、今回はケースが違う。

俺はほんの10分前にこの世界に来たのだ、まだ世間を騒がすような事は何もしてない。

する予定ではあるが、まだしていない。

それなのに今、銃を持った人に囲まれている。なんとも奇怪な事だ。まったくもって、原因が解らない。

きつと、眼鏡小僧コナンくんさえ解らず、発狂してゴン太くんを張り倒してしまうだろう。

それほど奇怪な現状であった。

まあ、それは置いといて。

今は、この状況をどうにかしなければならぬのだ。

「んんん……」

「あら、また黙り込んで……」

「ーいえ、何でもありませんよ。大丈夫ですから」

「もう、本当ですか？」

さてさて、実は監視されている以前に俺を悩ませてる問題が1つある。

俺の表情を見て永琳は心配そうにして近づいてくる。

ああっ！ もう！ なんなんだよっ！

「すみませんが、すこし近すぎでは？」

そうなのだ。

さっきもかなり近かった俺と永琳の距離。

しかし、永琳が更に近づいてきたせいで、密着していると言っても過言ではないほどの距離になっている。

普段の俺なら喜んだりするが、流石に周りを囲まれた状態でそんなことは出来ない。

しかも、相手の永琳と言う女性は誰かも解らないー例えるなら配達人不明で時計の刻む音がする箱ー並みの怪しさ満点。

いくら性欲を持て余すビックなボスである俺でも、相手ぐらいは選ぶ。

「ふふっ、そうですか？」

「ええ、そうですよ」

すみません、と一言促してから足を後ろにして一步下がり、永琳と

の距離を取る。

ザッ
ザッ

「ん？」

「ふふふ」

ザザッ
ザザッ

「んん？」

「ふふふっ、っ」

ザザザッ
ザザザザザザッ

後ずさりを止め再度ため息を付く。

「……なんで近づいてくるんですか？」

「さあ、何故でしょうね」

俺が一步下がれば、永琳も一步二歩近付く。

さっきと全く同じな状況になった。

なんとも奇妙な事だ。

「……そんなに密着してしまいますと、間違っただ胸に手がかかって
しまいますよ？」

「どろどろどろぞ」

俺の嫌がらせともセクハラとも本心からの叫びとも取れる発言にも
動揺しない。むしろ両腕で下から寄せ上げるようにして、自身の胸
を強調する。もともと胸は大きい方だった永琳の胸は、強調されて
るせいで上に乗り上げるような形になる。

それが少し、いや、とても扇状的だった。

彼の破廉恥なセクハラ発言にも動揺せず、むしろ乗ってくる永琳。

この永琳が取っている行動は俺の正体を探っているのか、それとも
ただ単に誘惑しているのかよく分からない。

「あら？揉まないんですか？」

ほらほら、と言わんばかりに更に密着する永琳。密着したせいで、彼の体に永琳の胸が当たる。フニユ、と柔らかい感触と先っぽに付いているモノの硬い感触が俺の脳を直接襲う。

その行動と感触に少し気分が高揚して顔が紅潮してしまう。永琳も少し恥ずかしいのか、頬がうつすら紅く染まり瞳が潤んでいるな。

「……………」

「ふふふっ」

でかい大きい柔らかかそついい匂いがするな。さつきから視線が永琳の胸に釘付けになる。

これは男しては仕方ない事だった。人間は本能には逆らえないのだ。007でさえ女性には弱いのだ。仕方ないのだ。

服の上からでもわかるほどの質量がある双山が、その体温を伝えながらも俺の体と合わさるようにして形を変え、脳内を麻薬のように蕩けさせる。

……何もかも忘れてこの乳房を触ったら、さぞかし気持ちがいいの
だろう。

(もう手で触っちゃってもいいんじゃない?)

俺の心の中でグラスンを掛けた悪魔が^{そそのか}唆すようにして囁く。

(駄目だよ！ 女性に対して不謹慎じゃないか!!)

それに対するようにして俺の理性の代弁者である天使が遺憾の意を
唱えた。

(いいじゃねえかよ、相手が誘ってるんだぜ？ ここは無理矢理で
も茂みの中に連れ込んでヤッチまえよ!)

(何言ってるんだい！ 相手の同意も得ずにそんな事……、不謹慎
にもほどがある!!)

(じゃあ部屋の中でSMプレイはどうだ?)

(今すぐヤッチャってもいいんじゃないかな？ どうせ減るもんじ
ゃないし)

ガチつと力強よく握手を交わす悪魔と天使。

どうやらこの天使は刺青入り天使いれずみだったらしい。

俺が自分の本能と理性を相手にしながら性についての争いをしていく時だった。

――誰かが近づいてきてる。

たぶん監視者だろう人物が1人、俺の死角である背後から徐々に接近してきてる。風下にいるのか、監視者が持っているであろう銃から硝煙『弾丸を発射した際に出る煙』の臭いが微かだが漂ってくる。

永琳と変な争いをしている最中を好機と見たのだろう。足音は聞こえないが、気配はただ漏れである。

相手は俺が気づいてないと思っているが、残念無念また来週。サザエさんのジャンケンに毎回毎回勝っている俺に不可能はないのだ。この事に永琳が気付いているかどうかは知らないが、まあどうでもいい。

また一歩近づいてくる。

あと4歩。

密着している永琳の肩を軽く押して、少し離す。

また一步近付く。

何時でも腕を動かせるように指を鳴らして準備する。

また一步。

呼吸を整え、体制を万端にする。

そして――

「手を挙げる」

若い男性の声が後ろから聞こえる。

それと同時にガチャ と銃を構える音が響く。

「両腕をゆっくり挙げ、今すぐ八意様から離れる」

後頭部に硬い感触と共に銃口を当てられ、言われるがままにおとなしく両腕を挙げる。

「そのまま地面に伏せろ」

銃口を突きつけたまま、要求してくる。

が、あえて正面を向き、監視者と対面する。

見てみると、そこには重装備の兵士がアサルトライフルARと思われる銃の銃口を突きつけていた。

「!?!? 伏せろと言っている!」

「……………」

兵士の怒声を聞いても、表情を変えず、むしろ口角を吊り上げ微笑する。

「セーフティ安全装置が掛かったままじゃあ、撃てないぜ。マヌケさん」

「えっ?」

余裕そうに言いながら安全装置が付いてる場所を見つめる。それに驚いたのか、監視者は彼から視線を外し安全装置を確かめる。

しかし、すっかり安全装置は外れていた。

外れていた事に安心したのか、一瞬だが気が緩む。

それがいけない。

「はい残念」

兵士が視線を外したのと同時に銃身を右手を裏拳の要領で叩き込み、手から弾き落とす。

そして襟首と手を掴み、柔道のたらい落としを基礎とした近接格闘術で監視者を地面に叩き落とす。

落下した衝撃のせいで、意識が朦朧としている間に太股に付いているホルスターからHGハンドガンを抜き取る。

「はったり（プラフ）に掛かるようじゃ、実戦不足だな」

今までの行程には2秒たらず。

「銃を捨てる！」

すると、仲間の異常を察したのか、周りの茂みから同じ格好をした兵士が銃を構え出てくる。

その事に気付いた瞬間、今のやりとりに呆然としていた永琳を無理やり引き寄せ、拘束しながら拳銃を突きつける、右手だけで。

それと並行して、地面に倒れている兵士を足を脇の下に入れ、首を締め、腕を拘束する。

さらに、さつき落としたARを拾い上げ、永琳を拘束している反対側の手でストックを肩に当て安定させ監視者達に向ける。

片腕にはHGを、もう片腕ではARを構える。

そうしている間にも監視者達は彼を反円状に囲み、銃を向ける。はい、典型的な膠着状態が完成。

「あら、随分と女性の扱いが激しいわね」

腕の中にいる永琳が茶化すように笑いながら言う。

「あぁん？ すまんが、俺は胸にSのマークが付くほどのサドステ

「イツクな性格なんでね」

「スーパーマンならぬサドスティックマンだな。」

「ふふつ、激しいのも嫌いじゃ無いわあ」

「……変態だな、お前」

「口調が変わったわね。それが素のあなたかしら？」

「今のやり取りに若干引きながらも、一応周りを見回す。」

「兵士が6人、銃を構えたまま動かない。」

「今すぐ銃を捨て、八意様を解放しろ！」

「ん？八意様って、」

「え？なに？こいつら永琳のお友達？」

「どつ見たらこれがお友達に見えるのかしら？ 護衛よ、護衛」

「護衛って、まあ物々しいですなあ。なんだ？永琳はお偉いさん？」

「偉いかは別として、ただの科学者兼薬医よ。その前に天才が付くけどね」

「はぐん。理解した」

「そう、ならいいわ。」

銃を下ろしなさい、と永琳が叫ぶと兵士達は渋々としながらだが、上司である彼女の命令には逆らえず次々と銃を構えるのを止める。

しかし、俺から視線を外さないのはまだ警戒しているからであろうからか。

「真もよ。離してくれるかしら」

「美女の命令なら何でも、っと。はいよ」

永琳の指示通り、拘束していた腕を永琳から離し、立ち上がる。

下で拘束されていた兵士は首を押さえて咳き込みながら立ち上がり、仲間の元に歩いていく。

俺も構えていた銃を適当な場所に放り投げ、そして、

「んじゃら、俺はこの辺で」

華麗に逃げようとする。

なんかね、さつきから嫌な予感しかしないんだよ。

びんびんなんだよ。俺の厄介アンテナがさつきからバリ3立ちなんだよ。

手をひらひらと振りながらこの場から去る。

ハリウッドでさえ号泣してしまう、誰がどう見ても完璧すぎる去り方だった。

が、

「待ちなさい」

「……どこ行くの？」

永琳に肩を掴まれる。しかも掴む力が強いので、彼の肩の骨が悲鳴を上げている。

芝居がかった風に、やれやれ、と言った感じに振り返る。

「……私めに何かご用で？」

「ええ、御用はあるわよ。それはもうたっぷりと」

「そうか。だがとても残念だけど、俺は今すぐ街に行って人気店
ラーメンツアーしなきゃいけないから……」

じゃあ、と言って永琳の拘束を振り切るうとする。

「「動くな」「」

護衛達全員から銃を向けられた。

「……おいおい、俺が一体なにをしたって言うんだよ」

しかも速攻で逃げ道がふさがれたし。

それはさあ、護衛を叩きのめしたのは悪かったと思ってるよ。

でもさあ、仕方なかったじゃん。あの状況だと誰でもそうするって。

マザーテレサでさえ、あの状況なら敵の顔面にかめはめ波をたたき
込んでいるに違いない。

だからさ、もうすこし酌量処置ぐらいはあってもいいんじゃないか
な。

「あら、大丈夫よ。ラーメンでもステーキでも何でも好きなだけ食べさせて上げるから」

ふふふつ、と風鈴のような透き通った含み笑い。

これだけを見れば何ともないのだが、何ともないのだが。

しかし、永琳の目はこう物語っていた。

――絶対に、逃がさない

「……………降参だ」

とりあえず、俺には両腕を上げるといって白旗的降服行動しか、選択肢はなかった。

あの後、護衛達がぴったりくっついて離れないという懇親な誘導に泣きながら森を歩くこと数分。

開けた場所に出ると、そこにはVTOL輸送機（ヘリコプターとジェット戦闘機のハイブリッド航空機）が鎮座していた。

それにこれまた護衛達によるエレガントなエスコート付きで中に放り込まれる俺。

永琳達もそれにさっさと乗り込み、お空へ出発。

つまり、見事なぐらいに拉致されました。

とりあえずだが、飛行しながらなんとか永琳からこの辺の話を知ることが出来た。

話を纏めるところなる。

永琳が超が付くほど天才だと言う事。

しかも永琳が村にいる能力者とかなんとかやらの力でかなり長生きしている事。

その天才的知能を使い、自分達の街を急激に発展させた事。

縄文時代から一気に明治まで文明を進め、いまではかなり高度な文明を作り上げた事。

そのおかげで永琳が政治的地位がかなり高い事。

何故そんな偉い永琳が森に居たのか聞いてみると、どうやらバカンスみたいな事をしていたらしい。

あそこの森は国が直接管理しており、そこでゆっくりしていた所にいきなり俺が出現。

それを不思議に思った永琳達は現場を確認しに行く事に。

それがさっきの話と繋がるらしい。

他には、俺はどんな女性が好みか、好きな料理はあるのか、彼女は居るのか、結婚しているのか、などなど俺に関する質問が永琳からされたが、特に異常はなかった。

これが、今の俺の経緯だ。

そんな事を考えながら、俺はVTOLの横に付いている小窓から空を眺めていた。

「もう、現実逃避しないの」

不意にだが、空は何故こんなにも綺麗なのか、と考えてみる。

空がどこまでも広く、吸いこまれるように蒼く澄み切っているから、綺麗だと感じるのではない。

理由は、人は太古から空と密接な関係だったからと言えるだろう。

「ほら、返事をしなさい」

昔々、それこそ縄文時代から人は空を見て1日の始まりを知り、空を見て天気を予測して働き、空を見て昼か夜かを知り、空を見て一日を終える。

1分24時間365日、どんな時でも人は空とは離れなかった。

それだけでも空と人間はとても密接な関係だと言える。

人間は空を頼って生きてきて、その長い年月の間に空に憧れを感じ

たのдарろう。

だからライト兄弟も空に近づくために飛行機を作ったに違いない。

もはや、人間のDNAに染み付いているのдарろう。空に憧れて、空に近づきたいと言う欲望が。

だからこそ、故に人間は空を見て、綺麗だと感じるのдарろう。

「いい加減に戻ってきなさい」

誰かに肩を揺さぶられて、思考が現実に引き戻される。

「あら、お帰りなさい」

「……………ああ」

永琳が微笑しながら、俺を見つめている。

しかし、俺はあえてそれに反応しない。

「んーっ、無表情なあなたも素敵だわ」

そう頬を赤らめて言う永琳を見て、何度目かわからない溜め息をつく。

「そついえばお前……変態だったな」

しかし、永琳は相変わらず微笑したままであった。

「……………」

「ふふふっ」

さつきからこのやりとりがずっと続いている。

これを見れば仲慎ましき夫婦に見えるだろう。

俺の手にいかにも頑丈そうな鋼鉄製手錠が掛かっている点を除けばだが。

そのやりとりに見かねたのか、前の座席に座っている護衛の兵士が永琳に尋ねる。

「八意様。何故その男をつれていくのですか？」

兵士が尋ねた疑問は俺が一番知りたかったことなので、現実逃避を止め、すこし耳を傾ける。

「何故って、そんな事決まっているじゃない」

すると、永琳は微笑を崩さないまま、

「私が真の事を好きだからよ」

その言葉に兵士は驚愕。

まあ、無理もない。さっきまで正体不明の人物だった俺を急に好きな人と言いだしたからだ。

それに対して俺はと言つと、

『くそっ！ なら胸揉んどけばよかった！ さっきの俺の馬鹿！』

さっきの状況を思い出し、凄く後悔していた。

その目からは血涙を流している。

『本能に従っていればあの大きなおっぱいを堪能できたのにつ！』

ああっ、触りたかったーっ!!」

後悔に打ちひかれて、これでもかってぐらいに頭を小窓に叩きつける。

『くそおおおっ！理性の馬鹿！ あ？ 理性は賛成してたから別に悪くねえか。 じゃあ俺のこの収まる事を知らない劣情と欲望と性欲は、一体どこへぶつければいいんだーっ!!』

俺の奇怪な行動に引きながらも、兵士はまた永琳に質問をする。

「あの……、ぶしつけな質問ですが、それは異性としてですか？ それともー」

(今から頭を下げても頼めば揉ましてくれるか？ いや、でも、それだと男の沽券に関わるし……。 ああっ、でもっ、でもっ！
！)

「ー実験体としてですか？」

……………は？

なに？実験体？

「前回の男も実験体として連れて行きましたが、そのあと廃棄処分されましたよね？」

今考えてみると納得する。

永琳は薬師である。

当然、色々な薬を開発するだろう。

「あら？そんなわけ無いじゃない」

永琳が何か言っているが、今は関係ない。

ならその薬を実験する事もある。

なら、それがもし俺だったら？

不思議と考えが繋がる。

となると……………

このお女^{おま}つ、俺を騙しやがったな！

俺は憤怒した。

好青年たる俺の純粋な心を弄びやがって！

俺は両拳を握り締め怒りに燃える。

こんな卑劣な事をされればガンディーでさえ、敵をボコボコにリンチした後に衝撃のファーストブリットを決めているだろう。

それほど卑劣な事だった。

もしこのまま永琳に連れて行かれればt-ウイルスみたいなのを打たれてしまうだろう。

いくらランボーな俺でもウイルスには勝てない。

ウエスカーみたいに克服できず、アンブレラ社の最高傑作になってしまう。

たぶんスーパータイラントか、もしくはロケットランチャーさえ効かないパーフェクトタイラントに変身。

俺は仮面ライダーは好きだが、あんな気持ち悪い仮面ライダーには

なりたくない。

コーカサスぐらいが丁度いいのだ。

まあ、いいや。

とまあ、今すぐ逃げたい。

仕返しはしたいが、銃を持った兵士に囲まれた中では、行動すること
とは難しい。

っていうか、仕返しする事自体がかなり怖い。

狂気のマッドサイエントティスト vs 俺。

どっからどう見ても負け戦です。本当にありがとございました。

絶対に勝てる気がしない。

こう言っときはただ1つ。

勝てない闘いはしない。

これ常識。

「どうしたの？顔が真っ青よ？」

心配そうに顔をのぞき込んでくる永琳。

本当に心配しているように見えるが、実態は俺を改造しようとして
いるのだ。だまされてはいけない。

逃げると決めたら即実行。

「ふんっ！」

バキッ！

鋼鉄製の手錠を技術と腕力だけで断ち割る。

「ええっ！？」

それに驚く永琳達。

ごめんね。スパイならこのぐらいの手錠なんて簡単に解けちゃうのよ。

クルミを割るのと同じように、コツがあるのだ。

俺の妙技に驚いている間に、壁に付いている緊急用開封ハッチのコツを下ろす。

固定ボルトが弾け飛ぶ音と共にVTOLの横ハッチが扉ごと吹き飛び、嵐のような風が中に吹き込む。

「しまった！？ くっ、逃がすなっ！」

兵士達は俺を捕まえようとしますが、突風のせいで迂闊に近付けない。

勿論、俺は上部に付いている手すりを掴んでいるから問題ない。

あ、ごめん無理。飛ぶ！ 飛んじゃう！！ 強い強い風がひどいぐらいに強いっ！！

「今日という日を忘れるな！！」

俺はミュージカルを演じる役者のごとく大声で叫ぶ。

「捕まえ損ねちまったな！！ この俺、藤堂 真を！！」

踏み込むように脚に力を入れて、そして――

「MAY BE I CAN FLY!!」

そう言いながらVTOLから飛び出す。

なかなかの高度があるのか周りの酸素が少し薄い。

瞬間、視線を感じ、飛び降りたVTOLを見つめる。

すると、開いた横ハッチに永琳が佇んでいた。

しかも俺を見つめ、何かを言うように唇を動かす。

俺に分かるように、ゆっくりとだ。

俺は読唇術でそれを読み取る。

――絶対に逃がさないわよ

唇でも分かっていたが、何より目が物語っていた。

それを理解した俺は、引きつった笑みを浮かべながら空を降下する。

女って、マジ怖え。

称号を獲得しました 〈MAY BE I CAN FLY〉 (後書

このままだと幻想郷までかなりながくなる。

どっか削るかな？

ちなみに永琳はアルカトラズの事が好きですよ。

実験体としてでは無く、異性としてですよ。

惚れた理由は、一目惚れとして下さい

都市での出来事(前書き)

今回は東方キャラは出て来ないよ

都市での出来事

未来都市。

この場所を言葉で表すなら、この表現がピッタリ当てはまるだろう。都市を見ると、車は地面をタイヤで走る事などせず、空中を飛行して、太陽光型エンジンによって二酸化炭素などの排出物を一切出さないのが一般普及している時点でこの都市の技術がかなり高い事が伺える。

住宅街などの建築物は、錬金術で開発された風を吸収する新素材によって殆どの建築物が高層ビルのように高く建てられ、それがより一層、未来的に見える。

高層ビル群の間には、立体ビジョンで、でかかど空中に映し出された会社の商品宣伝がこれまた所狭しと並んでいた。

その未来都市の高層ビル群の中にある中央ターミナル。

会社員やら学生、もしくはただ遊び人がターミナルを忙しそうに行き来している。

アリの群れかと思間違っほどの人が流れて、闊歩している。

そんなターミナルの一番ホーム。

ホームの中にある購買所アルカトラスに真の姿はあった。

購買所のパンコーナーからホットドックとメロンパンを選び、トレ
ーに載せる。

そして、パンコーナーの隣にある冷凍庫から紙パックに入ったカフ
エオレを取り出し、そのままレジに向かう。

するとレジには若い女性が気怠そうに立っていた。

有人レジか、今時珍しいな。と真は思いながら、無言でパンの載っ
たトレーとカフェオレをレジに置く。

すると、レジの女性も必要最低限の言葉のみ発し、会計を始める。

会計を待つためレジ前に立っていると、会話の無い世界、不意にこ
の言葉が思考をよぎる。

人類は機械に頼りすぎている。このまま時代が進めば、機械が人と
会話し、話すという、会話ではない会話。つまり会話の無い世界が
訪れる。

こう異世界に居た時、誰かが言った。

真はその言葉が非常に重苦しく感じた。

この都市では全てが機械で管理されてるわけではない。

しかし、それ故に人類が少しずつ廃退していく様を見続けているよ
うに感じた。

止めることなど出来ず、歯がゆい。

真にはそれが免れることが出来ない暗い闇の未来のように思えた。

お客様。と声を掛けられ思考を中断し、意識が現実に戻る。

すると目の前に居る店員がまたしても気怠そうに声をかけていたのが分かった。

すみません、と声を出し財布の中からレジに映し出された金額を取り出す。

店員はそれさえも気怠そうに取り、レジにしまう。

紙袋に入ったパンとカフェオレを店員から引ったくるように取り、購買所を後にする。

店員は決まりである挨拶をせず、変わりに出入り口にあるスピーカーから「有り難う御座いました。またのご利用を心からお待ちしております」とどこか機械的な女性の声が真の背中を震わす。

ああ、廃っている。

そう感じながら購買所のこえ自動ドアをくぐる。

ため息をつきながら、ホームにある立体ビジョンを見る。

自分が乗るはずのトレインが到着するまで、少し時間があつた。

真はホームにある椅子に腰掛ける。

そして紙袋に入ったホットドックを取り出し、一口、乱暴に噛み干切る。

——不味い。

購買所で買ったホットドックはどこことなく淡白で、味気なく、平凡な機械的な味がした。

このホットドックも工場にある機械が決まった分量で、機械の手により、定められた製造方法で、機械に^{インプット}入力された数量を製造する。

この都市の至る所に機械は存在しているのか。

そんな考えるのも下らない事をしみじみと思いながら、ホットドックをまた一口、噛み干切る。

ああ、廃っている。

無意識でそれを感じながら、真は逃避するため、過去を思い出すため、思考の渦の中に意識を投じた。

前回のVTOL飛び降り事件から半年が経った。

永琳から逃走し、飛び降りて湖に這う這うの体で落ちこちた俺は、永琳が言っていた都市を目指した。

理由はこの辺で知っている街はそこぐらいしかなかったし、空を降下中に何かないか確認したが、この辺り一帯にはその都市しかなかったからだ。

《探求者の秘宝》からコンパスを取り出し、森を突き進むこと1日半。

比較的短い時間で永琳が言っていた都市に着くことが出来た。

遠目から見る都市はそこそこ広く、しかも都市をぐるりと防御壁が囲んでいる。

しかも、防御壁の上には一定の間隔で固定式銃座タレットが置かれている。

かなり物々しい都市だな、真は感じた。

それに最近争いでもあったのか、地面から血と死体の腐敗臭が漂って来るのを嗅覚で分かった。

防御壁に付いている通行門ゲートから、さっそく都市に入ろうとしたが、

中に入るのにはかなり時間が掛かった。

身体検査、血液検査、パスポートの確認など様々なチェックが都市に入るために通行門で警備兵が行っていた。

身体検査、血液検査なら人間だから大丈夫だが生憎さま、俺はパスポートを持っていなかった。

「パスポートを持っていない人は中には入れない。」

そう言われ弾き出されてしまったのだ。

仕方ないからその夜、暗闇に紛れ込んで都市に侵入。

スネークみたいにバンダナを額に巻き付け、スニーキングミッションを開始したのだ。

潜入途中にエンカウトしたデブい警備兵とは肉体で語り合い（QC）、沈黙させた。

気絶させたデブい警備兵から地図やら警備ルートなどを記した備品を拝借。

現地調達はスニーキングミッションの基本だよな。

デブ警備兵をどこか適当なロッカーの中へと放り込み、進んでいく。

そこまで嚴重ではなかったので楽々進めた。

そして、見事に都市に入れた（侵入）のだ。

都市に入ったからといっても観光としゃれ込む訳には行かない。

まずは都市に入ってから最初に始めたのは戸籍を作ることだった。

戸籍が無ければ働く事も出来ないし、家も借りることが出来ない。

かといって、市役所に「不法侵入して戸籍が無いので、作ってください」なんて言えない。

またまた仕方ないから、夜に市役所に侵入。

侵入する前にキッチンと警報機や監視カメラの類の電気コードなどを切っておく。

この時、予備の電気コードも含めて切るのがベスト。

これ潜入工作の常識だよ。

市役所の中にいた、またまた警備兵を殴り倒し、ロッカーにぶち込み、あたりを物色。

都市の人間の個人情報や会社の保持情報、その他諸々の機密情報を携帯用データ端末機の中に吸い込み、コピーする。

こういった情報は何かと必要になるかもしれないしね。

使える情報はなるべく使う。

ここテストにでるよ！

物色する中で見つけたデータ端末機をハッキングし、戸籍を偽装製造。

ついでに軍事サーバーや国管理のサーバーなどの接続用パイプラインを俺の携帯用データ端末機にコピーする。

そして夜が明ける前に市役所から抜け出す。

こうして俺は晴れて未来都市の住人となったのだ。

しかし、住人になったのはいいが、何もやることがない。

この世界に居るはずである「あいつ」もまだ会ってない。

このまま素敵なN I - T O ^{ネット}な生活に洒落込もうかなとも考えたが、俺はこの世界の金を持ってない。

銀行強盗でもしようかと考えたが、逃亡がかなり面倒な事になりそうだったので却下。

働く事も考えたが、俺は社会の歯車にはなりたくない。

メタルギア（金属の歯車）にならなくても言いいが。

格好いいよな、メタルギア。マジ欲しい。出来ればREXSかREYが希望。

でもピースウオーカーは無い。デザインが気持ち悪いし、あの電子音がイラつく。あれは絶対無い。

メタルギア無いかなー？たぶん無いだろなー。

と言っわけで、強盗は無し、働くのも却下。

んで、考えたのが……

都市の路地裏

「ふははははっ！ リアル汚物は消毒だーっ！」

「あべし!?!」

俺の拳が不良Aの顔面に当たる。

今の衝撃で不良Aは弧の字を描きながら吹き飛んでいく。

「トモちゃん!」

「やべえ! マジやべえよ!」

「人が吹き飛んだぞ?! 何者んだアイツ!？」

仲間が飛んでいって同様する不良BCD。

「ゲキガンナツクウル!」

「ぶぎゃっ!」

またしても俺のナツクルが不良Bの顔面に吸い込まれるように入る。

「シュウちゃん? シュウちゃん!」

仲間が立て続けに2人もやられ混乱する不良D。

「そういえばこんな噂を聞いたことがある。ある奴が夜な夜な俺達みたいな悪者をー」

「衝撃のファーストブリットオ!」

「ちよ、最後まで喋らなつぱあ！」

「リユークーン!？」

俺の体を回転させながら叩き込んだ拳のせいで、最後まで喋れなかった不良：C？不良Dだったか？もう面倒だからモブキャラAでいいや。

モブキャラAが沈黙。

「まつ、待て！何が欲しい？金か？何でもやる！だから命だけは――」

モブキャラBは無様に命乞いをする。

「俺はそんなモノなど欲しくはない!！」

俺は力強い言葉でそれを否定する。

第三者が見れば、俺は悪を倒す正義のヒーローだろう。

「じゃあ、いつたいなんだよ！何が――」

「俺が欲しいのは、それは……」

「そっ、それは？」

俺は少し間を開けて、そして

「愛と希望がたっぷり詰まった具体的にはいろんなのを買ったり出来る素敵な素敵なマネーじゃー……！」

「ちょ、おま、それお金じゃ」

「うるせえ！震えるぞハート！！燃え尽きるほどヒート……！」

「え！？それ作品が違っ？」

「しゃらくせえ、喰らえ！！山吹色の波紋疾走！！！！（サンライ
トイエローオーバードライブ）」

「あぎゃあああああ……！」

俺のただの拳連打^{フラッシュ}が炸裂。

吹き飛んだモブキャラBは哀れに壁と同化する羽目に。

「うし、都市のお掃除完了」

俺は額の汗を拭う。

その顔は爽やかさが溢れていた。

「それじゃあ戦利品（財布）を回収しますか」

顔の爽やかとは裏腹に心は真っ黒だったようだ。

そう、俺は都市に住み着いている不良から財布を拝借するお仕事をしていたのだ。

正義の味方？無償の愛？

今時のヒーローは無料じゃあやっていけないんだよ。

現実リアルと架空は違うんだよ。

最近のヒーローはよ、怪人出現 ヒーロー出動 5人で怪人をリンチ 怪人を抹殺 無事解決ではい終わりとなる。

ただだよお、それじゃあ儲からねえ。

俺なら怪人を抹殺せず、そのまま拘束して捕獲。

そうした後、アメリカでもロシアにでも生物研究所へ大金で売っ
う。

そうでもしなきゃ、正義のヒーローなんかやってけねえよ。

俺は優しい日本産の戦隊ヒーローではない。孤高のギャングヒー
ル（悪者）なのだ。アメリカ産ヒーローなんだよ。

スパイダーマンやバットマンなんかと同種類なのさ。

おおっと、話が逸れたな。

とりあえず不良A B C Dから財布を拝借。

免許証やパスポート、IDカードなんかは要らないからそのまま。

個人情報を守るからよお、このぐらいいいよな？

「今回の清掃はなかなか儲かったな。どれどれっと、ひーふーみー
やー……おお！23万近くあるぞ！」

俺はホクホクしながら分厚い紙幣の束を自分の財布にしまう。

「おかげさまで懐が暖かいです。マジご馳走様でした」

俺は地面に寝転がっている不良A B C D一人一人に感謝の蹴りを入れ、路地裏の端の方へ吹き飛ばす。

路地裏は高層ビルのせいで薄暗いし、そう簡単には見つからないはず。

後処理は大切だよな？

大丈夫。殺してはないから。

しっかし、この半年でかなり儲かったな。もう150万ぐらい貯まったんじゃない？

普通に働くよりも清掃人スイーパーの方が儲かるな。

今日はブックストア（本屋）でエロ本を買い漁ろうかな？

俺はかなり永い時を生きてきたが、性欲だけはちゃんとある。

よく仙人みたいな永く生きた人物はさ、性欲が枯れてしまっている奴がいる。

だけど俺はそうじゃねえ。人一倍の性欲を持って余していると豪語出来る。

男として生まれたらさ、性欲は無くしてはいけないと俺は思う。

男は皆、股間に《性剣》をどっしり構えて生きていくのだ。

まあ、俺はその代わりに道徳心や正義なんて言っしやらくせえもんは持ち合わせてないが。

エロ本購入も大切な経費だ。

ひさびさの贅沢なんだから奮発するか。

そう思い、路地裏からブックストアへと歩を進めようとする。

すると、ポケットに入っていた携帯端末からバイブ音が出る。

「ん？ 電話か？」

ポケットから携帯端末を取り出し相手を確認してから電話に出る。

「よお！ 俺だよ！」

通話ボタンを押した瞬間、携帯端末から若い男の声が響く。

通話音量を上げてたせいか、それともこの男の声が大きいのか、おそらく後者だろうと思われるがどっちでもいい。

「ああ、その声を聞いた瞬間分かったよ。掃除が終わったばかりで疲れてるし用事があるなら素早くな」

「掃除か、お疲れさん。清掃用人は何人だ？」

「ただのチンピラもどきが4人、うち1人は金持ちだった。」

「おおそうか。それはさぞかし大漁だったんだろうな。だったら飯を奢れ」

「んー、ああ、いいぜ」

「お、今日はやけに素直だな。いつものあの不器用さはどこいった？」

「いや、別に深い意味はねえよ。ただ単に今日の掃除でかなり儲かったからな、それで機嫌がいいんだよ。それに情報提供者とは仲良くしなきゃな」

「よく言うぜ。いつもは俺をボロ雑巾のように使うだけ使い倒すくせ」

電話越しだが何とも生々しい文句が聞こえる。

そう、こいつは俺に色々な情報を提供してくれる大切な協力者。

情報とはこの高度な文明社会の中では銃の次に武器となりえるぐら

いに重要度が高い。

それを売ってくれる奴はとても貴重だ。しかも多少なりとも信頼
がおけ性格も堅い奴なら尚更。なまかん

それに、俺は案外こいつの事を気に入っているんだよ。

「うし、言ったな？ 場所はいつもの店、時間は10時でいいな」

「10時だな。 ああ分かった、そこで落ち合おう」

「じゃあな、そのたんまり太った財布を一気に軽くしてやんぜ」

「150万も酒が飲める奴がこの世に居るわけねえよ。 じゃあな」

ピッ と電子音と共に会話が切れる。

携帯端末で時間を確認すると、今はちょうど5時。

約束の時間までは後5時間ある。

それじゃあ、ブックストアで時間を潰しますか。

携帯端末をポケットにしまいこむ。

—————っ！

瞬間、誰かの視線を感じる。

すぐさま後腰に入っているFA ファイブセブン（自動拳銃）を抜き、視線の方向に構え、引き金を引く。

静かな発銃炎と共に発砲音が路地裏に高く響く。

しかし、銃口から放たれた弾丸は壁に当たり、跡を残し無様な音と共に地面に落ちる。

どうやら敵は居なかったか、はたまた逃走したか。

俺はFA ファイブセブンの銃口を下に向け、確認するように視線を感じた方向を見つめる。

「おかしいな。確かに視線を感じたんだが……。」

俺は銃を腰に戻し、辺りを見回す。

「そろそろ潮時かな……。」

すると、何処からかサイレンの音が聞こえる。

弾丸の発砲音がかなり響いたのか、すぐさま都市の警備兵が此処に集まるだろう。

捕まるのは面倒だから、さっさとずらからう。

俺は急いで路地裏から出て、ブックストアへとまた歩を進めた。

怪しい光を放つカメラが路地裏をひっそりと映し出していた事に、彼は気付かなかった。

都市の中央にある歓楽街。

歓楽街と言っても歌舞伎町みたいな浮き世めいた街ではない。

通りには観光所も兼ねた物品販売所が複数あり、それ以外にはバーなどの酒飲み屋があるだけ。

昼は家族連れなんかが楽しそうに行き交っているこの歓楽街。

しかし、夜になると勤務を終えた警備兵達が我が物顔で歓楽街を埋め尽くす。

そんな不思議な歓楽街にある、とあるバー。

バーの辺りにはネオンであろう物から出来た看板が、暗くなった歓楽街を明るく照らしていた。

中には複数のテーブルとカウンター席があり、どちらもちらほらと客の姿が伺える。

店は薄暗くなっており、雰囲気も楽しめる少し凝った造りの内装。

俺はその中に入り、情報提供者あいつが居るであろうカウンター席に向か

う。

店自体がそんなに広くないので、すぐに見つけることが出来た。

黒と赤が混じったような濃色のスーツを違和感なくバッチリ着こなし、この都市では珍しい黒色の肌を持ち、それとはまったく真逆の白髪を深く刈り込んだかなり目立つ男性。

迷わず滑るようにしてあいつの隣に座る。

すると、相手も気付いたのか片手を挙げ、「よお」と気楽な声をかけた。

「ああ、待たせたな」

「なあに、たいして待ってないさ。さてさて、そんなことよりも……」

既に頼んでいたのか、自分のグラスとは別のグラスを俺に渡してくる。

グラスの中には琥珀色の液体がなみなみと注がれており、離れてもアルコールの臭いが鼻に付くように漂ってくる。

「乾杯」

「ああ、乾杯だな」

互いのグラスを軽く音を鳴らすように合わせる。

そして一気にグラスを口に付け、飲み干す。

喉を通り越すアルコールが体の中から暖めるように俺を包む。

あいつも俺と同じようにグラスを傾けており、そのまま一気に飲み干した。

……これってそこそこの度が高い酒だけど、大丈夫かな？ いや、別に体調とかを心配してるんじゃないやなくて俺の財布の中身なんだが。

俺の視線に気付いたのかグラスをカウンターに置き、会話の姿勢になる。

「くはーッ！ 酒は元から美味いが、お前と飲むともっと最高だぜ！ー！」

「そんな訳あるか。 ただの酒だぞ」

「いやいや、兼存なんかすんじゃないぜ。俺はお前ほど酒のつまみになる人物を知らないね」

「ああ、そうゆう意味か」

返事を返しながら、なかなか渋い感じのバーテンダーに新しい酒を頼む。

俺がグラスに酒が注がれるのを待っているとが来るのを待っていると、間を繋ぐように声を上げる。

「それで、一体どんな風の吹き回しだ？」

「ああん？ 何がだよ」

「とぼけんなよ。お前が素直に俺と飲もうなんていう訳ないだろ。どうした？ 何かあったのか？」

「バレたか」

俺はバーテンダーからグラスを取り、話を切り出す。

「実はな、仕事を探している」

「仕事？ 今の仕事じゃ駄目なのか？ 電話でも聞いたが、かなり儲かる仕事じゃあなかったか？」

「スイーパー清掃人だろ。あれは楽でそこそこ儲かるさ。」

「じゃあ、いいだろ。 換えの仕事なんか探さなくても」

「よくねえよ。確かに清掃人は儲かる。だけどな、時間が経つとこっちが不利になるんだよ」

「不利？　なんか賭けでもやってんのか？」

「賭けはやってないけど、最近掃除中に視線を感じるんだよな」

「……監視されてるのか」

「ああ、そうゆう事だ」

そう言い切ると、また酒を喉に通らせていく。

どうやら真剣に話を聞くつもりになったのか、席を此方へと向け金銀の指輪が付いた手で言いたい事を形どる様に動かし、会話を転がす。

「相手は何だ？　都市の警備か？　どっかの裏組織か？」

「分からねえ。監視はしてても行動がアクション無いからな。それに警備の奴等じゃなくても恨みはそこそこ買ってるしな」

「ははあん、なるほど。　つまり、潮時ってわけか」

「そゆこと」

ちよつと待て、と言って懐から携帯用データ端末機を取り出し、な

にやら操作し出す。

俺はそれを横目で見ながら、今度はグラスに入った酒を舐めるように、ちびちびと少量ずつ飲んでいく。

そういえば、この清掃人スイーパーの仕事もこいつからもらったんだっけな。と、少し昔を思い出す。

まあ、昔と言っても半年しかないんだけどね。

こんな事を考えていると、作業が終わったのかこちらに椅子を向けてくる。

「今の所だと、2つ仕事がある。どちらもそこそこ儲かる仕事だぞ」

「ほー、どんなのだ？」

「1つは違法薬物の売人バイヤーだな。丁度売人が足を洗ったらしくて人手が欲しいようだぞ」

ほれ、と言葉と同時に携帯用データ端末機の画面を俺に見せる。

「ふーむ、金もそこそこ、住居保証付き。エリアは……ああ、駄目だな。パス」

下の詳細を見たと同時に手で画面を押し戻す。

「ん？ 気に食わなかったか？」

「そうゆう意味じゃねえよ。金なんかは良かったが、エリアが悪すぎる。これは足を洗った奴は正しい判断だな」

そう言いながら、またグラスに口付ける。

「そうか。だったらコイツはどうだ？ 軍の試験薬の実験体になるって奴なんだが3日でこのぐらい儲かる仕事だぞ」

「あー、それもパス。少し薬なんかの医学にトラウマがあるから」

薬、と聞いて永琳の事を思い出す。

八意 永琳。 俺を騙してt-ウイルスを打ち込もうとした女。

あの狂気のマッドサイエンティストは元気でやってんのかなー？

たぶん今日も人を改造して仮面ライダー1号みたいのを製造してるんだろなー。

怖えよ。マジ怖え。

永琳マジでシヨッカーじゃね？

半年前の事件の事を思い出しながら、酒を飲み干す。

「んー。 その2つ以外にあまりいい仕事は無いぞ」

なにやらまた、携帯用データ端末機をいじくり回す。

その間に無くなった酒をお代わりする。

仕事か。最近はず魚（不良）しかとバトってないから不完全燃焼何だよなー。

なんか心を震わすような激しい仕事は無いかな？

そう思いながら椅子をぐるりと回転させ、店を見回すような格好になる。

店は勤務帰りの警備兵と思わしき集団でほぼ満席となっていた。

何かしら訓練されてるのか、全体的に体格がいい奴ばっかだった。

警備兵ねー。ふむ警備か……。

……お！これいいんじゃない？

「なあなあ、情報でさ軍事関係の仕事はない？」

「軍事関係か……。最近聞いたな。少し待ってるよ」

データ端末機に何かを打ち込む。

ピピピツ、という電子音が鳴ると同時に情報がよかったのか喜色満面の笑顔で画面を見せる。

「ゲットタイミングって奴だな。丁度2日後に軍が兵力拡大のために、かなり大量の新兵を募集するらしいぞ」

「本当か！」

俺は身を乗り出し、端末機の画面に近づぐ。

いやー、いいね。久々に軍人になろうかな。

「うし、決まりだ。次は軍人になろう！」

「ん、そうか。お前は本当に何でもやるよな」

「そうか？ 普通じゃね？」

「清掃人の次は軍人。^{スィーパー}さらには国のサーバーにも入り込む電子侵入者。^{コマンドー}こんな沢山の事を出来る奴は普通じゃないね」

呆れた風に肩をすくめるとまたがばがばと酒を飲み始める。

仕方ねーよ。元特殊部隊の血が騒ぐんだよ。

これでも鍛え抜かれたエリート何だぜ？

SAS（イギリス陸軍特殊部隊）と素手で闘って、全勝した男だぞ。手斧を投げられたときは流石にビビったけど。

「場所と時間は？」

「今日から2日後の正午。場所は都市の南にある軍事施設だな」

端末機の情報を読み上げる。

「何か必要な書類は？」

「自分のパスポートと戸籍情報。それぐらいだな」

「ん、ありがとさん」

俺は内容を頭にメモしていく。

「まっ、別に構わないさ。それより飲もうぜ、飲もうぜ!！」

そう言うと本格的に飲むのか、バーテンダーにキープボトルと氷グラスを頼む。

「人の奢りだからって派手に飲むなよ白髪野郎」

「人の奢りだからこそ派手に飲むんだろボンクラ赤髪」

俺は一応念のために釘を差す。

しかし、こいつはどこ吹く風のごとく、俺に反論の言葉を返すとなんと酒のつまみまで頼み始める。

「……ま、いつか」

気にするのをやめ俺も就職が決まった前祝いとして酒のボトルを頼み、つまみを選ぶ。

「そうそう飲みまくろうぜ」

そう言うといつは俺のグラスに酒を注ぎ込む。

グラスから漂うアルコールが俺の気分を昂らせ、高揚させる。

「……ああ、そうだな。そうしよう」

グラスに口を付け、乱暴に酒を流し込む。

酒はいい。

酒は一時だが嫌なこと何もかも全てを忘れさせてくれる。

例え、それが人生すべてを否定するようなことでも、だ。

結果、朝まで俺達はバーで飲み明ける事になったのだ。

それが2日前の出来事。

ふっ、と意識が現実に戻る。

《右側の扉が開きます。注意してくださいー》

どうやらトレインのアナウンス音で俺は目が覚めたらしい。

さっきまでガランとしていたホームは、いつの間にか沢山の人盛りでこった返していた。

少し寝ぼけていたのか、頭があまり働かない。

しかし、どうやらトレインは来たらしく、周りの人盛りが列を築く。

俺はその列の最後尾に急いで並ぶと、周りの人を確認してみた。

殆どは男だが、ちらほらと女も見れる。

こいつらも軍に入隊するのか？

そんな事を考えていると列が進み、少し狭いがなんとかトレイン入り込めた。

俺は窓に写る高層ビル群を見ながら、これからの事を考えて行く。

まあ、退屈しなければ良いんだけどさ。

「……」

「ああ、私だ」

「……」

「うん、ようやく彼を見つけたよ。そう、たった今さ」

「……………」

「そうだね、あいつはいつも自由気ままな性格だからね。どこほ
つつき歩いてるか見当がつかないさ」

「……。……………」

「それについては同意見だね。彼女も言っただけど、まったく…
…少しはサポートすることこの身になってほしいよ」

「……………」

「いや、それに関しては私のほうでミカエルに頼むとするぞ。多
忙な君の手を煩わせる訳にはいかないしね」

「……………」

「ああ、大丈夫。全部こっちで何とかなるから……。お？ど
うやら彼も移動するみたいだし、そろそろアルカトラスの監視に戻
るとするよ」

「……………」

「うん、わかってるよ。それじゃ、また」

プッ、ツッ、ツッ、ツッ

都市での出来事（後書き）

今回の話は次回の繋ぎ的な話

今回の話についての補足。

《探究者の秘宝》

主人公 アルカトラスがもつ唯一の特殊能力とも言える技能。

簡単に言ってしまうえば「何処でも何時でも出せる空間 倉庫」

詳しい話はまた別に。ネタバレになってしまうので

ちなみに主人公であるアルカトラスは主人公としては最低な部類ですよ。

これからの話で最低っぷりを見せますよ

なんとまあ、準備のいいことで（前書き）

本当は1話にしようとしたが、長かったので二分割に。

急いで書き上げたので文の作りがおかしな事に

見逃してね

なんとまあ、準備のいいことだ

都市の南方にある軍事基地

中央ターミナルからトレインに揺られながら約1時間。

すし詰め状態のトレインから素早く出て、階段を駆け下り、改札口を通り、ターミナルを出る。

すると、ターミナルの出口のすぐ近くに人々の行列が見えた。

その行列はターミナルの前に建てられた軍事基地の入口から始まっているようだ。

恐らく軍の入隊希望者達の行列だろうと思いつながら、その行列の最後尾に加わる。

ただ並んでいると暇なので、さっき買った紙パックのカフェオレを紙袋から出し、飲み込んでいく。

自分が並んでいる行列の先を見ると、今回の目的である軍事施設がある。

軍事施設の中には不釣り合いな情報統制ビルが、自らの存在を主張するかのようによましく建っている。

おー、高けー、でけー、興奮するなー。

いいよね、こついった高いビルって。

アドレナリンが爆発するってこついう事を言うんだよな。

これを見てると何処に爆薬仕掛ければ綺麗に発破解体できるか考え
るとホント、ゾクゾクしちゃう。

俺は別世界では一回、NYにあるマンハッタンビルを軒並みC4（
プラスチック爆弾）で吹き飛ばすというビン・ラディンもびっくり
の解体ショーをやったのけたからな。

あの時は凄かったな。爆風と爆炎が入り混じってNY一面が火の
海に。

確か……爆弾であるC4は2メートルぐらい使ったはず。

あまりにももの出来の良さに我を忘れてしまつて、逃げ惑う市民やレ
スキュー隊員を蹴って殴り倒しながら叫んだのは今でもいい思い出
になつてる。

何故そんな事をしたのかつて？

いやね、その時さ世界 みえでさ、発破解体のプロが居るのを知っ
たのよ。

それが羨ましくて、んじゃ自分でやってみんべ。という感じになっ
たのさ。

まあ、その後は世界最強最悪のテロリストとして各国の特殊部隊と無制限鬼ごっこを始めたんだよな、確か。

俺が過去の輝かしい栄光を振り返っていると行列が動き出し、合金製の耐衝撃特殊防壁に囲まれた中にある軍事基地へと流れていった。

俺も最後尾からそれに合わせて動いていく。

行列は基地の中にすべて入り、監督員みたいな人物が指示を出している。

何かすらしいので、前方にある4つの施設にそれぞれ移動してくれとのこと。

すると行列は全部で4つに別れ、それぞれの施設に移動する。

真（偽名。本当はアルカトラズって言います）は適当な行列に入り、施設に進む。

前方に見える4つの施設は、外見が全て同じで、球状のドームだった。

恐らく軍の講演所などに使用する、多目的施設だろうと推測。

周りをよく観察しながら、俺は行列に続いて施設の中に入る。

施設の中は少し大きめな体育館ホールみたいな造りになっている。

ホール入口では《案内人》と書かれた腕章を付けた警備兵が大声で何かを説明している。

説明の内容を聞くと、どうやら入隊説明などの前に健康診断をするらしい。

自分のパスポートを出して、各場所にある医者診察を受けるところ。

よく見ると、ホールは白色の仕切りと扉で細かに分けられており、赤十字架のマークが入った白衣を着ている人達が、忙しそうに診察の準備を進めていた。

ふーん、健康診断か。この世界に来てから全くしてないな。

最近身体に気をつけていなかったからな、大丈夫だろうか。

ガンや神経疾患なんかの病気は死に繋がる可能性があるから怖いな。

いや、バーサーカーとウルヴァリンとシユワルツエネツガーを足して10乗したぐらいのタフネスさを誇るナイスガイな俺だ。

病気とは一切合切、無関係はず。

むしろ、あまりにもナイスガイすぎて新たな病気を作り出してしま
うかもしれない。

病名 顔面がマジナイスガイ病

発祥源 俺

症状　どんなに不細工なお方でも、この病気に掛かるとあら不思議。一瞬でナイスガイなお顔に！

こんな感じかな？

なんて罪な男なんだ。俺は。

そんなバカな事を考えていると、行列が散り、各自で診察を受け始めた。

俺もさっさと受けようと、適当な所にある簡易診察所に移動する。

入口からそこそこ離れた診察所に入り、自分の番を待つ。

医者と聞いて永琳の事を思い出す。

彼女も医者だから、もしかしたらこの施設に診察をしに、訪れてるかもしれない。

むしろ診察と称して、実際は次の実験体を探しに来ているのではないだろうか。

前前回では俺をパーフェクトタイラントというアンブレラ社もびっくりの生体兵器にしようとしたからな。

くっ！やるな永琳！流石は狂気のマッドサイエンティスト。

だが、俺は必ずお前の野望を打ち砕いてみせる！地球は俺が守る！俺が正義のヒーローよろしく心に変な誓いをしていると、順番が来たのか前の扉が開き、「どうぞ」と声をかけられる。

俺は少し赤面しながらも、さっさと中に入り、椅子に座る。

すると、看護師から健康診断の簡単な説明がされた。

診断をする前に、自分のパスポートを認証読取機にかざせとのこと。

なんでも、それで今までの病気などの履歴を見るらしい。

俺は面倒くさそうにパスポートを認証読取機にかざす。

すると、ピーー と五月蠅い電子音が鳴る。

その音に何故か動揺する医者達。

ん？なに？何かあったの？

俺は少し緊張しながら医者達の診察を待つ。

すると俺が入ってきた扉から屈強そうなハゲ警備員が入ってくる。

え？なに？まさかの警備服着たハードゲイ登場？

そんな俺のボケなど知らず、警備員は医者達に小声で一言二言話す

と、俺の方に振り返り「付いてきてください」と言う。

俺はボケるのを止め、警戒しながらも警備員の指示に従って椅子から立つ。

こういう時は相手が下手に出ているときに従った方がいい。

断っても強制的に連れて行かれるだろうし。

逃げてもいいが、そこまで緊迫した状況でもない。

そう判断すると、俺は頷く。

すると、警備員が前に移動したのでその後を付いていくことに。

なんかえげつないくらい嫌な予感がするんだけど……。

俺は少し冷や汗を掻きつつも、ぎこちない足取りで歩いていく。

さっき居た施設を出て、歩くこと数分後。

俺は警備員に連れられて、違う施設に案内された。

さっきの施設とは違い、かなり奥の方にある施設だ。

周りには銃を持った哨戒兵が、基地を監視している。

普通の人はこの奥には入れないはず、となると何か裏があるはず。

俺は辺りを警戒しながら施設の中を警備員と進んでいく。

時々会う哨戒兵達に挨拶をしながら、廊下を歩く。

しばらく中を進むと、ガラスで出来た扉があった。

警備兵は扉に付けられた機械に数字を打ち込む。

ガチャ と扉の鍵が開く音が聞こえ「中にお入りください」と警備員。

俺は素直にそれに従い、扉を開け中に入る。

すると、またしてもガラス扉があった。しかも、警備員付き。

嚴重すぎてうんざりしながらも、ガラス扉に近づく。

つていうか、なんでこんなところに連れてこられてるの？

俺なにかしたっけ？

そう当然な疑問に思った俺は扉の前にいる警備員に尋ねる事にした。

「あー、なんで俺はここに連れてこられたんですか？」
と、丁寧に質問する。

すると、困ったように頭をポリポリとかく警備員。

「あー、その質問に答えたいのは山々なんだが……」

どこか歯切れが悪い警備員さん。

「何か事情があるのですか？」

「いや、事情とかじゃなくてな、ただ単にこの部屋の中に誰が居るのかわからないんだよ」

「はあ？」

警備している人が知らない？

普通は知っているはず……。

となると、知られてはまずい奴が居る可能性があるな。

なんかやばそうな感じが…。

呼び出した部屋に殺し屋が待ちかまえてるなんてよくある話。

んー、今すぐ逃げたい。だが警備が厳しすぎる。

仕方ないから警戒しながら入るしか手がないな。

扉に近づき、^{ノック} 毘がないかドアノブ、床、扉の上部、蝶番まで丹念によく調べる。

……どうやら毘などは無いみたいだ。扉も少し造りが頑丈なだけで、これといったのは見つからなかった。

俺は警備員さんと目を合わせながら、さりげなさを装い《探求者の秘宝》を展開、中からFA ファイブセブン（自動拳銃）を取り出して後腰に入れる。

「では、中に入ってもいいですか？」

「ああ、どうぞ」

親切に扉から離れて、俺に開けやすいようにしてくれる。

扉を叩いてノックし、礼儀正しく装う。

ドアノブを回して、声を出しながら入る。

「失礼しまー」

「あら、久しぶりね」

すると、部屋の中には銀髪の赤青医者が待ちかまえていて、

「ーした」

扉を開けて相手を確認した時点で扉を思いっきり両手で素早く閉める。

更に、体を使い扉にもたれかかって、向こうから開けられないようにする。

そして一息つく。

「なるほど、居たのは殺し屋じゃなくて医者だったのか」

納得したように呟く俺。

……ふう。

……いや、まあ、わかってるよ。

って言うかさ、今の中にいた医者ってさ、永琳だよな。

おかしくね？マジで笑い事じゃなくてさ、おかしくね？

あれか？俺がさっき永琳が居るかもしれないと思ったのが悪かったのか？

最悪な予想に、顔から汗が滝のごとく流れる。

いや、そんな訳ないはず。

落ち着くんだ！落ち着くんだ俺！

よく考えて見る。思っただけで現れるなんて一体どんな手品だよ。

くしゃみで出てくるハクション大魔王の方がまだ良いぞ。

となると、今部屋の中に居た永琳は現実のモノでは無い！

つまり、今の永琳は俺の見た幻覚に違いない！

「なんだ？俺なんかヤバい薬でもキメちゃったっけ？今部屋の中に永琳の幻覚が見えたんだか……」

俺は考えを口に出して、状況をまとめる。

すると、俺の状態を察したのかさっきの警備員が心配して声をかけてくれる。

「おい、顔色が悪いぞ。大丈夫か？」

「ええ、大丈夫ですよ」

と、手を振り健康なことを示す。

気分を落ち着けるために、ポケットから煙草とライターを取り出す。

「一本どうですか？」

「おお！紙巻き煙草か！珍しいな。」

好意に甘えて、と言って煙草を一本取る警備員。

俺も一本取り出し、口にくわえてから火を付ける。

煙草の煙が肺を満たして、混乱していた思考を落ち着け、気分を癒やしてくる。

やっぱり煙草は良いよな。スネークが好きになるのも分かるよ、ホント。

俺は煙草の味を堪能しながら吸っていく。

しかし、一本だとすぐに煙草は終わってしまふ。

俺は携帯用煙草入れを取り出し、吸い殻を中に入れる。警備員さんのも忘れずに回収する。

「うし、これで幻覚は見ないはず。大丈夫だ」

自分の頬をパチンと叩く。

今日もパーフェクトに決めてやるぜ。

そして、俺は意気込んでノックもしないで扉を蹴り開ける。

「オラァ！ 俺様を呼んだ大馬鹿野郎はいったい何処のどいつー」

「私よ。所で、煙草は吸う人よりも、吸っている人の近くにいる吸わない人の方が害が大きいって知ってるかしら？」

「……失礼しました」

なんてこった、俺はまたもや幻覚を見たらしい。

たぶんマジックマツシユルーム（嗅ぐと不思議な夢を見れるキノコ）なんかを知らずの内に吸ってしまったのだろう。

これはもう駄目だな。今すぐ精神科に行こう。

そう判断して扉を閉めようとする。

「待ちなさい」

が、幻覚の永琳が扉の間に足を入れて妨害してくる。

なんだ？最近の幻覚は実体化するのか？リアルブート？もしくは妄想具現化？

やばいな、俺は童貞じゃないからディソードなんて持ってないぞ。戦えねえじゃないかよ。

あれか？素手で行けってか？

そうか？そうなんだな！

おもしれえ。俺のシエルブリットは天下一品だぜ。

少し混乱したが、俺は落ち着きを取り戻し目の前にいる奴と会話を試みた。

「…………… 本当にすみませんが、少し足を外してくれませんか？」

「嫌よ」

丁寧に尋ねたのにバツサリと断られた。

「いや、ホントに急ぎの用事があるので……………」

「あら、私を差し置いて行く用ってなに？」

「ええ、少し幻覚が見えて……………、今すぐ精神科に行こうかなと」

「それなら大丈夫よ。あなたの目の前にとびつきり腕のいい医者がいるから。」

「そうなんですか、私には悪のショツカー技術者にしか見えないのですが」

「そうなのかしら？」

「ええ、そうなのです」

「……………」

「……………」

沈黙のまま、均衡状態が続く。

「……………わーっ たよ」

力を抜き、扉を開く。

「？ずいぶんと素直ね」

俺のとつた行動に少し驚く永琳。

「どうせこの扉を閉めてもこの施設からは逃げられないからな。」

「確かにそうわね」

素っ気なく答える永琳。

（お前はそれを見越してこの施設に連れてきたんだろうが！！）
内心で毒づく俺。

「あと、何でお前が俺を呼び出したのかも少し知りたいいな」

「そう、じゃあ部屋の中でゆっくり、じっくり話しましょう」

扉を俺が入りやすいように開けてくれる永琳。

そのまま2人して部屋に入る。

「とりあえず、久し振りだな永琳」

「ええ、そうね。久し振り」

「前回会ったのは確か……………VTOLの中に拉致された時だったからな。約半年振りか？」

「……………そうね、あなたからすれば半年振りね」

俺の皮肉をに気しないで玉のような笑顔を浮かべたまま答える永琳。

しかし、少し間があったのは何故だろうか？気になるところだ。

普通に顔を見れば絶世の美女なんだが、残念なことに性格がなあ。

「何か言ったかしら？」

「いんや、何も」

肩をすくめるように両腕を上げ、刺すような永琳の視線をごまかす。

あぶねえ、あぶねえ。女性は何故か勘がいいから気をつけなきゃな。

「んで、何でこんな所に永琳が居るんだ？」

入った部屋の中にある椅子に座り、永琳と対面になる状態。

この部屋は医務室なのか、周りには大型の医療器具などがキッチンと整頓されていて、それが医務室独自の清楚感を引き出している。

「あなたは知っているはずでしょ。私は医者。医務室にいて何がおかしいの？」

「おかしいの？つてさ、永琳は今は医者じゃなくて科学者じゃなかったっけ？」

「私は医者兼科学者よ」

「んじゃあ、何で軍医なんかやってんのさ」

永琳は確かに医者だが、軍事関係には所属していなかったはずだし、政治的地位もかなり高い。

しかも、ここは軍事用の医務室だ。

つまり、ここには訓練なんかで負傷した者が運び込まれる。

そんなエリート人間の永琳が血なまぐさくて、疲れる仕事に就いているのか、全てが疑問だらけだ。

すると、俺の質問が関係しているのか両手を頬に付け、恥ずかしそうにしながら、

「それはもちろん、」

「もちろん？」

「あなたと一緒に居るためよ」

「……………そんな美笑をしながら言われてもな」

永琳の回答に顔をひきつらせる俺。

あなたと一緒に居たいの！と恋人から言われれば、どんな男性でも喜ぶかもしれない。

が、俺と永琳は恋人なんかでもないし、そもそも付き合っただけさ。無いのだ。

だから頬を赤く染めながら恥ずかしそうに言われても正直反応に困る。

「……………どうしたの？嬉しくないのかしら？」

それは心外だ。と言った表情でこちらを見つめる永琳。

「いや、嬉しい嬉しくないとかの前に、そんなに親しくない仲の女性からそんな事言われても逆に怖い、ってかキモイ」

俺の返事に、目を見開き、口をぽかんと開けている永琳。

何だよ、何そんなに驚いてんだよ。

俺は別に間違ったことは言っていないはず。

いきなり知らない女からそんな事言われたら、誰だってそう思うはずだ。

まあ、エロゲーならそういった展開はアリだがな。

俺は二次元、三次元関係なく愛せるといふ、とても器が大きい男なのだ。

「……………そう、分かったわ。あなたの性格。成る程、ええ、理解したわ。」

すると、どこか早口で虚ろに呟くように喋る永琳。

声のトーンが平坦だからか、その言葉に少し恐怖を感じた。

《——神は言っている》

え？何？なんか聞こえる？

《ーお前は人生的にアウトだと》

何処からか甲高い声が響く。

なぜだか俺には人生終了のお知らせに聞こえた。

永琳はさっきからぶつぶつと何かを呟いており、その呟きの中には「麻酔薬、催眠剤、拘束」などと危ない単語ワードが入っていた。

あれ？やばいんじゃない？なんか選択肢間違えたっぽい。

まずいぞ、このままだとたぶん陵辱BADエンドになってしまう。

俺は自分が犯るなら大賛成だが、犯られるのは絶対ヤダなんだよ。

「ちょ、落ち着け。落ち着くんだ永琳。いいか、俺は別に永琳の事がキモイと行った訳じゃないんだ」

永琳にCOOLになるよう説得する。

「……………ええ、大丈夫よ。本当に……………大丈夫」

手を額に当てて暗い声で話す永琳。

「おいおい、大丈夫で正常な人は小声で、「倉庫……………監禁調教……………」なんて言ったりしないはずだ」

俺は片手を突きだし、制止させるように呼びかける。

「……………そうね、監禁調教はダメね」

「うん、そうだ。その通りー」

「それより薬漬けの方が効率がいいわね……………」

「駄目に決まってるんだろコンチクショウ！」

とても残念な事に、永琳の頭が非常に残念になってしまったようだ。とりあえず、永琳の思考を落ち着かせるために説得を再度試みる。

「いいか、俺がキモイと言ったのは永琳がとった行動の事で、永琳自身がキモイと言った訳じゃないんだ」

俺は永琳の肩を掴み、目を合わせながら言う。

「……………本当？」

「ああ本当だ」

少し涙目のまま上目づかいで話す永琳。

あ、やば、これ少し可愛いかも。

「本当に本当？」

「本当の本当に本当だ」

「神に誓っても言える？」

「あんまり神には誓いたくはないが、まあ誓う」

「私って可愛い？」

「他人がどんな目で見てるかは知らないけど、俺から見れば永琳は絶対に可愛いぞ」

これは俺の嘘偽り無い本心からの言葉だった。

つてかさ、なんで俺が彼女でもない永琳を慰めなきゃならないんだよ。

「そう……………」

俺の言葉に満たされたのか、永琳はさっきまでの暗い顔ではなく、いつもの清らかで華のある表情に戻り、

「……………嬉しい。とっても嬉しいわ」

かすれて消えてしまうような、でも、はっきりと俺に聞こえるような声で言った。

何故かその表情や仕草など全てが可愛く、愛しさを感じさせて、俺は無意識に赤面し、視線を永琳から逸らす。

そんな表情をしながら、こんな事を言うのは反則だと思う。

「……………」

「……………」

俺も永琳も一言も言葉を発せず、部屋には天井に取りつけられた空調機の作動音がやけに響いた。

その空気に耐えきれず、俺は肩を掴んでいた手を離し、永琳から離れようとする。

「ダメよ」

しかし、それを察知したのか永琳は離そうとした俺の手を掴んで自分の方へと寄せるように引っ張った。

この雰囲気緊張したせいもあるのか、俺は永琳の急な行動に対応らしいものさえ出来ずに体勢を崩してしまふ。

そのまま永琳の方へ倒れこみ、押し倒さないよう反射的に永琳の身体に腕を回す。

「おっ………」

身体に腕を回すと言うことは即ち、永琳を不可抗力とは言え抱きしめること。

永琳の顔がすぐ目の前にあり、身体に触れている場所から永琳の体温が伝わってくる。

間近で見る永琳の顔はとっても綺麗で、シミなど無く、皺さえ一切見られないみずみずしい肌。

絹のような銀髪からはよく清潔に保たれているのか女性特有の、あの甘くて優しい匂いが漂って来て、俺の鼻孔を溶かすように刺激する。

その全てが俺の思考を占領し、逃げるといふ行動を止め、思わず永琳の顔を無言で凝視してしまう。

「ねえ、真………」

顔をうつすらと紅潮させ、瞳を潤ませたまま言葉をつなぐ。

しかも、普段の鈴のような声とは違う、深みがあつて、どこか耽美な声で俺の名前を呼ぶ。

「私は、真に酷いことはしたくないの」

ごく自然に両手を使って俺の顔を挟み、拘束する永琳。

頬から伝わってくる熱が心地よく、頬が感じる永琳の指の感触が気持ちいい。

「好きよ。あなたのことが大好き」

全てがより一層、俺の心を昂ぶらせる。

「だから、ね」

「……………だから？」

少し間を空け、ゆっくりと、壊れ物を扱うように慎重に言葉を紡ぐ。

「キス……………しましょ？」

そう恥じながら呟くと同時に俺の顔に自分の顔を合わせるように、ゆっくりと移動させてくる。

抱きしめているため、俺と永琳の距離など無いに等しくて、顔を近づけることなんて造作もない。

そう思った時には既に遅く、永琳の顔は俺の目の前にあった。

永琳の潤んだ瞳が、俺の心の奥底まで見通すように見つめている。

永琳の吐息が俺の顔に当たり、それが何故か甘くて溶けてしまいそんな錯覚が体全身襲う。

もう永琳の顔が目と鼻の先にあって、俺と永琳の鼻先が微かに触れあって、そして――

って、やばー！

「っ！ ダメだ！」

「え？ きゃっ！」

理性が戻った瞬間に、回していた腕を放して永琳から急いで離れる。俺の腕に体重を預けるようにしていた永琳は、支えが無くなったため椅子に倒れるように座りこむ。

「はぁ、はぁ、はぁ」

昂ぶっている精神と興奮した身体を落ち着かせるために大袈裟に深呼吸を繰り返す。

呼吸が整ったところで視線を感じ、その方向に向く。

すると、永琳が恨めしそうな、そしてどこか悲しげな目をして俺を見つめていた。

「……………んだよ」

「……………」

俺の少し荒っぽい呼び掛けに反応せず、少ししてから言葉を発する。

「ねえ、どうして……放したの」

その言葉には不満というよりも、淋しさが目立った。

「んなもん考えなくてもわかるだろ。俺は永琳の恋人でも彼女でもない」

「……………それが一番の理由？」

「ああ、そうだ」

俺の返事に、そう、とぼつりと呟く永琳。

「……………」

「……………」

さっきと同じような沈黙が部屋を支配しだす。

俺はその空気から逃げるように部屋から出ようと、扉に向かう。

「どこ行くのかしら？」

永琳に呼び止められるが、俺は振り向かずそのまま返事を返す。

「トイレだよ、トイレ」

返事を待たずに扉のノブを回し、部屋の外にでる。

「まだ用件、終わってないから」

俺はその言葉に無言で手を振り、扉を閉める。

あー、駄目だ。そんな悲しい顔すんなよ。

「調子狂つぜ、全く………」

そう吐き捨てるように眩くと、俺はトイレを目指し、ゆっくり歩き始めた。

「んで、用件は何だ？」

トイレに行ってから5分ほど時間を空けてから部屋に戻ってきた。

「用件？そんなの決まっているじゃない」

永琳はさっきの状態から抜け出し、普通に話せるようになったらしい。たぶん……。

しかし、また頬を赤く染め、体をくねらせる永琳。

えー、何これ。キモイ。

「いや、決まっているじゃないって、俺は知らないからな」

さも当然のことである。

すると、永琳は少しもつたいぶるように間を空け、

「あなたの身体検査よ」

「そうか。じゃあまたな」

片手を上げ、さっさと部屋を出ようと扉を目指して歩き始める。

ちなみに返事までの時間は一秒も無い。

「待ちなさい」

と、出ようとした瞬間に後ろから声をかけられる。

俺はそれを華麗に無視しながらドアノブに手をかけ回そうとする。
が、

ガチャガチャ

「あれ？」

扉から金属がつつかえる音が響く。

不思議に思って、もう一回ドアノブを回す。

ガチャガチャ

だが、何度やっても扉は金属音を発するだけで、開きはしない。

「無駄よ。ここから逃げようたって、そうはいかないわ」

永琳の言葉を聞いて、後ろを振り向く。

すると、永琳の手に何かリモコンみたいな物が握られていた。

「……おい、何しやがった」

「何って、ただ鍵を閉めただけよ。軍事医務室って何かとあるからこういった防犯設備はキチンとしているの」

さらりと答える永琳。

え、なにそれ、怖い。

「俺は身体検査なんかぜってー受けねえぞ！」

俺は怯える気持ちを隠すように、大きく吼える。

しかし、俺の反抗的態度を見ているも永琳は何一つたじろぎもしないで、ずっと笑みを浮かべたままだった。

「そうね、あなたが反抗する理由がいまいち分からないけど、まあいいわ。」

すると、永琳は事務機の引き出しからファイルを取り出した。

「ところで、ここのところ盗難事件が相次いで起こっているらしいわね」

「それがどうした」

ファイルをめくり、内容を閲覧しながら話を続ける。

「この半年の間で34件もの被害届が警備本部に届けられていてね」

「……ふーん………」

「それにね、その34件全部が殴られて財布を抜き取られる、という同様の手口でされているのよ」

「……………え」

あれ？

なんか、すげー身に覚えがあるんですけど。

「最近やっと治安もよくなったのに、ホント嘆かわしい事ね」

「……………」

ダラダラと冷や汗が全身を流れる。

「そういえば、あなたと会ったのも半年前ぐらいだったわね」

「……………」

「ああ、そうそう。半年前と言えば都市に不法侵入した輩が居たって聞いたわね。ご丁寧に警備員をロッカーに閉じこめて」

「……………」

「あとは……………、市役所にも不法侵入があったわね。半年前に」

「……………」

「あと、この前戸籍情報を調べていたら変なことにね、戸籍情報に不正アクセスがあったわね。それも半年前に」

「……………」

「あなた、何か知らないかしら？」

にっこり笑顔をしたまま俺に尋ねてくる。

それに、俺はすぐさま冷や汗を消し、焦りの表情を無くす。

「全然知らないな。誰だそんな酷いことをする奴。絶対に許さないぞ！」

そして、怒りに燃える好青年のような表情で言った。

全ての真実を知っている永琳からすれば、なんとも白々しく見えただろう。

だが、もしここに第三者がいれば俺を犯人だとは一切考えつかないだろう。

それほどまでに完璧な演技だった。

余談だが、俺は「オペラ座の怪人」を10回ぶっ通しで公演できる男だ。

つまり、演技力にはかなり自身がある。

だが、残念な事にそれは永琳には効かない。

「……………そう、それは残念ね。裏で活躍しているあなたなら何か知っているのかと思ったんだけど」

「俺も永琳の手助け出来なくて本当に残念だよ」

俺は心の底から悔いるように顔を曇らせる。

もちろん、これも演技だ。

「ええ、何も知らないんじゃないわね」

「そうか。じゃあ時間だからそろそろロックをー」

「所で、この動画メモリーを見てもらえるかしら」

俺の言葉を遮るようにして、服の中からチップを出す。

「この動画メモリーはね、私が2日前、たまたま、偶然に、本当に

思いつきでねとある路地裏に移動型カメラを設置したのよ」

その言葉に一気に焦りの表情が浮かぶ。

「この動画を確認したらね、一人の男が四人の不良を殴り飛ばしているのが写っていたのよ。しかも気絶した不良から財布を抜き取る
とこまでバツチリと」

これやばいんじゃない？逃げ道が全て塞がれちゃった？

永琳は挑発するようにチップを揺らす。

「私はこれをさっきの盗難事件と強い関わりがあると見ているわ。
だから私はこれを警備本部に渡す義務があるの」

「そういえば、この犯人と思わしき男って、あなたに似ているわよ
ね」

そしてチップを掲げて、微笑しながら俺を見て一言。

「身体検査、受けてくれるわよね？」

なんともまあ、いい笑顔だった。

（ああ、なるほど。俺ってはめられたのか。）

俺はそう思うけど、「はい」と答えるしかなかったのだった。

なんとまあ、準備のいいことで（後書き）

どうでしたか、なんて野暮な事は聞きませんよ。

ただ、感想をくれるだけでお代は結構です

あ。

素敵な素敵なポイント評価はこの下ですよ。

忘れずにね！

狂気のえーりん診療所（前書き）

今回はかなり長いよ。

しかもコメディ回だし。

永琳のキャラ崩壊してると思うし。

あ、最後にあの《水先案内人》が出てくるよ！

感想の受付の制限を無くしました。

だから誰からでも受付ます。

狂気のえーりん診療所

前回のお話で永琳に見事なぐらいに封殺されてしまった真。

しかも弱みを握られたせいで、いやいや永琳の身体検査を受ける羽目に。

果たして、真は無事に軍隊に入れるのか！

真の貞操の行方は如何に！

「どうしてこうなったんだろう……」

俺は少し俯き、顔に影を作りながら言葉に出す。

その影には絶望と後悔、さらには悲壮感さえ感じ取れた。

なんか今までの行動が前回で全て裏目に出た気がする。

前回の目的は、ただ単に暇つぶしで軍人になろうとただけなのに！

俺、なるべく頑張って街を守ろうとしたただけなのに！

それが、いつの間にか狂気のマッドサイエンティストの診察を受ける羽目になるとは。

ぜってー診察なんて言う生優しいもんじゃないって。

ショッカーみたくバッタ仮面に改造されると思う。もはや確実だよ、確定したよ。

どうやってこんなの予測すればいいんだよ。

超能力者でも予測できないぞ。

「主よ、哀れな子羊を助けたまえ……………」

俺は天にいるキリストに祈るように腕を組む。

もう神でも聖者でも誰でもいいから助けてよ。お願いだからさ。

このままだと俺、次回のバイオハザードに「パーフェクトタイラント」としてラスボス出演しなきゃいけない事に…………。

あゝあ、駄目だ。もう駄目だ。終わったぞ。バイオファンの皆さん。あんたらはお終いだ！

何が何でも次回作はクリアさせないかな！

ロケランだろーが、核ミサイルだろーがウエスカーでも何でも全部弾き返しますからね！

クリアは絶対無しだからな！覚悟してけよ！

「……………何やってるの、あなた」

すると、俺のお祈り？を侮辱するかのようにつつ永琳。

おお？なに言ってるの、こいつ。

「てめえ、誰のせいでこんな事になってると思ってるんだ！」

俺は声を荒げて永琳に突っかかる。

「知らないわよ。とりあえず私のせいではないわね」

しかし、俺の憤怒をどこ吹く風のように澄まし顔で答える永琳。

くそっ！　なんて白々しい奴なんだ！

俺は膝を付き、頭をうなだれて床に突っ伏す。

「この世界に……神は居ないのか……」

改めてこの世界に絶望したよ。

くそっ！　こうなったら最終手段を使うしかないな。

「クククツ……まさかこれを使うときが来るとはな……。自分でも結構びっくりだぜ」

できればこれだけは使いたくはなかったが、状況が状況だ。　仕方あるまい。

「これを使って、俺はこの世界の神になる！」

そう叫ぶと同時に《探求者の秘宝》から「ですのーと」と書かれた黒色のノートを取り出してー

「だから何やってんのよ」

「痛っ！」

パソコン、と小高い音を鳴らしながら俺の頭を叩く永琳。

俺が鋭い目つきで永琳を睨むと、般若みみたいな顔になったので慌てて睨むのを止めた。

むう、ただのネタだったのに。

「あなたには身体検査に精神病検査も追加した方がいいかしらね？」

「それだけのご勘弁願えませんかねえ！」

なんだこいつ、俺の心も改造するつもりなのか？

やべえっす！先輩マジやばいっす！

俺、キカイダーになっちまっす！

「もういいかしら？いい加減に飽きたわよ」

般若面から呆れた顔つきになり、俺に尋ねる永琳。

「おつ良いぜ。俺も飽きてきたし」

のそり、と服に付いたほこりを払いながら立ち上がり、答える。

正直、終わりどころを見逃してたから丁度良かった。

退き際は芸人には大切なのだ。

それに、このノートも「ですのーと」「じゃなくて、ただの黒いノートだな。

「さて、それじゃ身体検査を始めましょ」

凄くいい笑顔で話す永琳。

他人から見れば、明日に遠足を控えて眠れない小学生みたいだった。

だが、俺から見れば新しい実験体が入って早く解剖したくてうずうずしている研究者みたいだった。

「受けたくねー」

ぼやきながら、ノートを適当なところに放り投げる。

「自業自得よ、文句言わないの。」

「そりゃそうだけども」

それでも、それをネタにして俺を脅迫してんだから、少しぐらいは文句言っても許されるはず。

「それじゃあ、まず始めにカルテを作りましょう」

「へーへー」

自分の近くにある椅子を指差され、指示通りに腰をかける。

どうやら一応は検査を素直に受けるようだ。

永琳は机の引き出しからクリップボードを取り出すと、俺の前にある椅子に座った。

「はい、まずは基本な事を聞くわよ」

「はい」

「あなたの名前は？」

永琳の質問に対して俺はぐっ、と親指を立てて爽やかな笑顔で答えた。

「おまえはかたろっ御前馬鹿太郎です！」

「ーはい、八意 真さんですね」

「おいしいい?! 俺のギャグすっ飛ばすどころか何言ってるの?」

俺は永琳の返答に思わず椅子からコイキング並みに跳ね起き、突っ込んでしまう。

なんと俺のボケに突っ込むのではなく、無視しながら逆にボケ?をかましてきやがった。

なんとというお笑いテク、じゃなくて!

言っておくが、俺のこの世界での名前は「藤堂 真」だからな!決して「八意 真」ではない。

「俺の名字を勝手に変えんじゃねえ！」

「もう、仕方ないわね。じゃあ私が「藤堂 永琳」になるわよ」

「何が「もう、仕方ないわね」だよ！ そつゆう問題じゃねえよ！
何で名前を変える必要があるんだよ?!」

「あら？ 私達は結婚してるんだから普通でしょ？」

「俺は！ 何時！ てめえと人生の墓場にゴールインしたんだよ！」

「あなたの戸籍ができた次の日から」

「俺の同意がないのに速すぎだろ?!」

「何こいつ？」

澄まし顔でさらりと恐ろしい事言いやがって！

「貸せ！」

俺は無理やり永琳の手からクリップボードをひったくり、名前を修正する。

「もう、つれないわね」

「それに乗るにしても限度があるわ！」

頬を若干膨らませ、拗ねるような反応をする永琳。

いつもの俺なら可愛いと反応するかもしれないが、状況が状況だ。

俺はそれに反論しながら名前を修正したクリップボードを返す。

「まあ、いいわ。次ね。性別は？」

「男」

「血液型は？」

「O型。正確にはOボンベイ型だ」

「あら、随分と珍しい血液型ね」

「んー、まあな」

Oボンベイ型とは世界中でも稀な血液型で、70万人に1人とも言われているほど希薄な血液型なのだ。

これは大雑把に言ってしまうえばO型なのだが、輸血の際は普通のO型では駄目だし、その逆もしかり。

まあ、かなり貴重な血液型だと分かればいい。

「後で血液採集させてもらうわね」

「俺の気分が良かったらな。次」

「どのみち強制よ。次は結婚は………カキカキ」

「おいコラ待て！勝手に名前をかくんじゃねえ！」

「あなた、そう怒ってばっかいると血圧あがるわよ」

「誰のせいだよ、誰の！………ちょっと待て。今気づいたんだが俺の呼び方変わってないか？」

俺は一旦冷静になり、気づいた疑問を尋ねた。

確か、半年前は俺の事を「真」と呼んでいたはず。

それが、いつの間にか「あなた」になっている。

「あら、夫の事を「あなた」と呼んで何か変かしら？」

「変、変じゃないの前に前提が間違ってたんだよコンチクショウ！！」

笑顔でこんな恐ろしい事言われたのは初めてだった。

「じゃあ次いくわよ」

「無視すんじゃないわねよこのサイコ野郎！」

「はいはい。次はね、年は幾つかしら？」

「ああ！ たく…………… 24歳だ」

俺は息を整わせながら答える。

本当は年齢なんか違うけどね。

でも自分の年は幾つか分からない。

3000年は越えているはず。

「やっぱり若いわね」

「んん？ あー、そうか、永琳は能力で長生きしてるんだっけか？」

確か永琳は特別な能力？ を持っている人の力でかなり長生きしているって聞いた。

「そうよ。よく覚えていたわね」

少し頬を染め嬉しそうに返事をする。

どうやら覚えていた事が嬉しかったらしい。

「まあ、最初の出会いがインパクトありすぎだったからな」

俺は懐かしむように目を細める。

初めての出会いが拉致って、かなり稀なケースだろう。

あ、そっぴや俺って永琳が今何歳なのか知らないな。

「なあ、永琳って今何歳？」

俺はふと疑問に思ったので尋ねてみることに。

「……女性に年を聞くなんてマナー違反よ」

「まあ、まあ」

「別に良いけど……、確か今年で2500歳だったはずよ」

「うわババア！」

「てゐ」

ぶすっ

メスが左腿inしたお

「あぎゃーっ?!メスが!メスが俺の左腿ひだりももにつ?!」

俺は絶叫と共に自分の左腿を抱えながら椅子から転げ落ちる。

ってかこの女!どこからメスを出しやがった!

しかも流れるかのような動作で俺に突き刺しやがって!

すこしは躊躇ちゅうちゅうしろや!

「お前は一体何すんだよ?!」

「別に何もしてないわよ。ただどこかの無礼者に教育を施しただけよ」

「教育なんかじゃねえよ!俺負傷したんだけど?!鉄拳制裁なんてレベルじゃねし!これ立派な傷害罪だかな!犯罪だかな!」

俺は床にゴロゴロうつ伏せという何とも不格好な形で吼えた。

でもこれは仕方ない。 なんとって俺の左腿からはメスによって血が滲み出てるのだから。

「ちょ、警備員さん！ 助けてください！ 此処にブラックジャックみたいな通り魔が！ マッドサイエンティストがいますよ！ 今すぐ捕まえてください！」

俺は必至に、もはや懇願とも取れるぐらいに扉の向こうにいる警備員に助けを求める。しかし、

「……………」

へんじがない。ただのけいびいんのようだ。

「言っとくけど、この辺りの警備員なんかは全員私の支配下よ」

「ちょ、警備員！なに買収されてんだよ?!」

こいつ、既に周りには手を打っていやがったのか？

準備よすぎだろ！

「ぐっ、くそっ！ この俺としたことがぬかったわ！ あ、普通に痛いんだけどこれ」

俺はネタと本音を混じりながら呟く。

ちなみに、医療用のメスはそんじょそこらの刃物とは比べものにならないくらい鋭い。

普通のハサミは革コートの上からは切れないが、メスは革コートの上からでもバツクリ切れてしまうのだから、その鋭さがよくわかる。

「少し落ち着きなさいよ、まったく……」

「誰のせいだよ！ 誰の！」

「はいはい、動かないの」

そう言うと、永琳は俺の左腿からメスを抜き取り、布で圧迫する。

そして側にあつた医療箱から何やらスプレー缶を取り出し、メスが刺さっていた場所に何回か吹きかける。すると、

「おお、刺し傷が治った……………」

「それは違うわね。これは散布液がフィブリンと言う皮膚に近い組織で出来ていて、その散布液が一時的に皮膚の代わりをしているだけよ。別に傷が完治したわけではないわ」

「ん、確かに傷がまだ痛むな……………。つまりかさぶたみたいなものか」

俺は左腿を確認するため左右にゆっくり動かす。

確かに血は出なく、傷は塞がってるがまだ中の傷はじんじん痛んでいる。

「あなたのせいでカルテ作りは時間が掛かるから後回しよ。先に検査をしましょう」

「今お前さらりと俺のせいにしたけど全部お前のせいだからな！改竄すんな！」

しかし、俺の言葉が聞こえないのか、はたまた無視しているのかわからない……………いや、分かっているが無視しているようだ。

なんて最低な野郎だ。

……………まあ、俺も人のことは言えないけど。

「診察着に着替えてもらいましょう」

「はいはい」

カルテ作りでは無くなってもウキウキ気分には永琳とは対照的に薄暗い表情で答える真。

精肉工場に送られる豚たちの気持ちって、たぶんこんなのだろうな。

俺の心の中では「ドナドナドナ」がBGMとして永遠再生されている。

ちくしょう、俺の人生のBGMはこんな虚しいのじゃない。

俺のBGMは人の悲鳴がピッタリなただけだな。

できれば複数の悲鳴が混ざって奏でる、コーラスが望ましい。

まあ、艶声でも良いよ。ただし女性限定な。

男だったら容赦しないでバラす。まじ比喻じゃなくてバラバラに分解する。

「更衣室なんかはこの部屋には無いから、そこにあるベッドのカーテンを仕切りに使って着替えてね」

「あいよ」

人間としてくだらない思考を一旦停止し返事を返し、医務室の端にあるベッドに向かう。

ベッドは複数あり、どれも保健室によくあるパイプで出来た簡易ベットだ。

「なあ、どのベットを使えばいいんだ？」

「1番ベットを使って。そこに診察着が置いてあるから」

なにやら器材を準備しているらしく、聴診器やペンライトを取り出しながら返事をする永琳。

見たところ、どうやら普通の身体検査らしい。

俺はほっと一息ついて、胸をなで下ろした。

どうやら生体実験なんかの類では無さそうだった。

とりあえず、1番とカードがぶら下げてあるベットに近づき、備え付けのカーテンを引き、他人から見えないようにする。

すると、ベットには服が一着だけ置いてあり、それを確かめるように手に取る。

よくある前が開く浴衣みたいな診察着だった。

「なんだかな……。人間ドックを受ける中年サラリーマンの気分だぜ」

診察着を見ながらそう呟く。

だが、俺は健康ムキムキな素晴らしいボディの持ち主だ。

何の問題もないはず。

しかし、永琳の強制的な診察を受けるためにはこれに着替えなければならぬ。

とりあえず今着ている上着を脱ぐ。

それをベットに乱雑に置き、Ｔシャツに手をかける。

「ねえ、あなたに質問があるんだけど」

と、いきなりカーテンの向こうにいる永琳から声をかけられる。

「ん？なにー？またカルテ作りの質問？」

「違うわよ。その前に、質問にきちんと答えてくれるの？」

「その質問内容によるな」

ん？

んだよ。

俺にも聞かれたくない質問ぐらいあるんだよ。

特に犯罪履歴なんかはタブーだ。

余りに多すぎて今までのこと全て覚え切れねえしな。

「そうね……何がいいかしら」

考えているように間を空ける永琳。

その間にTシャツを脱ぎ、上半身裸になる。

つまり、ジーパン一丁だけになる。まさにイーノックな状態だ。

イーノックか。懐かしいな、おい。

あいつ元気になっているのかな？。

そういえばあいつって書記官になったんだよな。

今日もひたすら書物を書いてるんだろな？。

そういえばまだ「あいつ」とはこの世界では会ってないな。

何処にいるんだろう、あのゲイ天使。

もしかしたら辺りのいい男を見つけては穴の発掘作業しているのか
もしれない。

やべえな、永琳も恐ろしいがあのゲイ天使も別の意味で恐ろしいぜ。

俺が冷や汗を掻きながら少し過去を振り返っていると質問内容が決
まったのか、永琳が質問を発する。

「そうね……………あなた、今付き合っている女性っているのかしら？」

「あー」

永琳の質問に着替えを中断し、思わず額に手を当てる。

なるほど、女性関係の話できたか。

これは少し考えて返答しなければならない。

さっきの件（前回のヤンデレ？）があるから回答に細心の注意を払
わなければ、俺が酷い目に遭うからな。

一歩選択肢を間違えればバッドエンドまっしぐらだし。

Featよりバッドエンドの数が多いしな、これ。

ちなみにルートは「監禁調教ルート」や「薬漬けルート」、「拘束催眠ルート」なんかがあります。

ちなみに受けるのは永琳じゃなくて俺だからな。ホント残念な事に。

「お前つて俺の事をずっとストーキングしてたんだからそのぐらい分からないのか？」

とりあえず考える時間を稼ぐために、思いついた疑問を永琳に尋ねる。

すると、俺の素っ気ない質問に対して心外だ、と言わんばかりに言葉が続ける。

「失礼ね。ずっとじゃないわよ。あなたが都市に居るのは半年前には気付いていたけど、何処にいるか分かったのは1ヶ月前ね」

「ふーん。監視してたのは否定しないんだ」

つまり、永琳はごく最近に俺の事を確認したのか。

少しほっとする。この半年間全て監視されてた訳ではない。

それでも、半年前に俺が侵入した事が分かってる時点でかなり怖い

けどな。

「少し話は変わるけど、いいかしら？」

「いいぜ、返答に困る話でなければな」

話題が変わってもキチンと釘を打つとく。

天才と話をするときはいろいろと注意が必要なのだ。

「単刀直入に聞くけど、あなた何者？」

「……………」

少しの間だが、俺は言葉を発しなかった。

俺を探る質問内容だからか、恋愛関係の質問より厄介だな。

永琳の質問に今度は頭を使う。

「何って……………、ただの路上強盗者だが？」

「とぼけないで」

ピシヤリと否定されてしまった。

「半年前、あなたと初めて会った時のことを覚えてる？」

「まあ、一応」

そう、と永琳は言つとまた質問を続ける。

「それじゃあ、私の護衛と争つた時のことは？」

「あれを争つたと言つのかは分からないが、それも覚えてるぜ」

あれだろ、俺が華麗なるCQC（近接格闘術）をモブキャラに決めた時の事だろ。

自分で言つのも何だが、あれはかなりキマっていたと思う。

「あの時私の護衛に掛けた格闘術、あれって普通の格闘術じゃあ無いわよね」

カーテンがあるから永琳の表情は伺えないが、見透かすような眼をしているんだろつな。

「んな大それたものじゃないさ。ただの何処にでもある格闘術だよ」
なるべく早めに、それを悟られないように会話を終わらせようとする。

「ただの格闘術ねえ。あそこまで無駄を排除して効率を良くし、なおかつ対人を重視した無音格闘術がただの格闘術なのねえ」

「いやね、あれは」

「そういえば、あの時右手を軽く握り締めてたわよね。あれって本当はナイフなどの刃物を握る動作じゃないかしら」

「ああ、だから」

「あと、2日前に路地裏にカメラを仕掛けた時。あなたこっちの視線に気付いて撃ってきたわよね。ずいぶんと視線に敏感なのね」

「……………」

また理屈責めかよ。こいつ全部分かってんじゃない？

天才って本当に嫌になるよ。

「そんじゃ、お前の予想は一体何なんだ？」

「私の予想では、あなたは何らかの訓練を受けた特殊隊員だと思っているわ」

「残念、不正解だ」

確かに俺は色々な軍事訓練を受けてはいるが、そんなヤワな存在じゃないわねえ。

俺はダースベイダーとメタルギアとプレデターが超絶変形核融合した、とてもハイパーな存在だ。

その気になればいつでも地球征服活動が出来る素晴らしいナイスガイなのだ。

「そう、じゃあ正解は何かしら？」

「ノーコメントだ」

異世界を転々と旅しています、なんて言ったら身体検査に精神病の検査を絶対追加されるだろう。

永琳に診察されるのもう嫌だ。

「はい、俺の身分についての話は終了。質問を元に戻すぞ」

パンパンと手を叩き、強制的に質問を終わらせる。

「そうね、今はいいわ」

と、素直に引き下がる永琳。

なんだろう。何か裏がありそうで怖い。

「最初の質問だな。まあ、今は付き合っている女性はいないぞ」

とりあえず当て触り無い回答をする。

「そう、じゃあ今までには？」

すぐさま、間髪入れずに質問してくる。

んだよ、そんなに気になるのかねえ。

「ん〜、ちょっと待って」

少し考えるように唸る俺。

「あら、いないならいないと言ってもいいわよ」

少し含み笑いをしながら返す永琳。

あれか？俺がモテないと思ってやがんのか。

こんにゃろっ、舐めやがって！

「いやね、そういう訳じゃないんだよ」

「？なら一体どういっー」

俺は芝居がかった風に言葉に間を空けると、

「ただ、付き合っていた数が多すぎて覚え切れてないんだよ」

「は？」

説明しよう！

俺は今までに1000近い世界を旅してきたのだ。

幽鬼のような表情で詰め寄り、そのまま俺の首を両手で掴み激しく前後に振る永琳。

「ちよ、待つ、やめてっ」

「さあ！質問に答えなさい！」

「こんな状態じゃ無理っ、あが、ぶつぶぶ」

電動こけしのごとくグウィンググウィン激しく揺れる俺。

っていうか俺の馬鹿！あれほど女性関係の話には注意するって自分で言ってたのに！

俺が激しくさっきの言動を後悔していても揺さぶるのを止めない永琳。

「かはっ、あっ、酸素を、空気が……………」

「早く答えなさい！」

答えたくとも、首を締められてるため言葉が出ない。

さらに呼吸をする事さえ難しくなっている。

あ？やばい、いい加減に息がキツくなってきた。

命の危険を感じた俺は、少し乱暴だが強制的に引き離すことを決めた。

「待て！落ち着けっ！落ち着けて言っただろこんなんっ！」

俺は腕に力を込め、一旦俺の首に回っていた永琳の手を離させる。

「いいか、頼むから少し落ち着けー」

「質問に答えなさい！」

「だからな、答えるから落ち着きを取り戻してー」

「……………いいから質問に答えなさい。次はないわよ」

「はっ、はいいい？！答えます！答えさせていただきます！」

肩をつかまれた瞬間、永琳のドスの掛かった声に思わず敬語になる。

「恐ええっ！え、なに、女性ってこんな声出せるの？」

「質問するわよ。あなたは今現在付き合っている女性はあるの？」

「ええっと、そのですね……………」

「《はい》か《いいえ》で答えなさい」

「いつ、いいえ！いません！」

助けて！マジヘルプ！

「次よ。あなたは過去に何人の女性と付き合っただの？」

「……………それって《はい》も《いいえ》も使えないんじゃない？」

俺は奴隷のごとく、身を低くして慎重に尋ねた。

「あ”あ”っ？」

「いいえ、なんでもありません！」

瞬間、永琳の突き刺すどころか貫通するような視線から逃げるように顔を背ける。

ああ、俺のさっきまでの強さは何処へ行ったんだろうか。

もうやだ！俺泣きそうなんだけど！

「えっと、付き合った女性の数は、確か500にー」

「へえ、そう」

「いいえやっぱり嘘です！嘘でした！ホントは5人でござえます！」

「よろしい」

あつぶねー！やべえよ！500人って言った瞬間、永琳の目から光が一切消えたんだけど！

あまりの恐さに、無意識に言葉使いが変わってしまったよ。

「次。あなたから見て八意 永琳は可愛いですか？」

「いつ、はい！めっちゃ可愛いです！」

思わず反射的に《いいえ》と言いかけたが、全力で踏ん張ってなんとか言葉を押し止める。

これって俺の本心関係なくね？

質問っと言うよりも、誘導尋問のほづがしくりする。

「あなたの女性の好みは？」

「っ……え、永琳みたいな綺麗な女性がタイプです！」

おっ、おがくっ、踏ん張れ俺！

一歩でも言葉を間違えればBAD ENDだ！

それだけはなんとしても避けなければ！

今は永琳の言わせたいことに合わせるんだ！つまり、平伏の時！

「あなたは銀髪が好きですか？」

「はい！」

「胸は大きい方が好きですか？」

「YES！」

「年上が好きですか？」

「オール ハイル ブルタニア！」

言葉がおかしくなってきた。

「この地球上の女性の中で一番好きですか？」

「もちろん！」

「あなたは八意 永琳と結婚したいですか？」

「それはないww」

ピキッ

それまで俺と永琳の声で騒がしかった場が一瞬で静まった。

あ、やべ、思わず真顔で手を横に振ってしまった。

「何ですって!!！」

「ぎゃーっ！思わず本音がポロリと！」

「本音!?!と云うことは今までののは全て嘘って云うことなのね!!！」

「連鎖的にバレたーっ！」

ぶよぶよなら5万近くのスコアが出てくる程のびっくり連鎖だった。

そんな事よりも、怒り狂った永琳とまたもや取っ組み合いになる。

永琳は俺を逃がさんと言わんばかりに掴み、それに反発するかのよう
に永琳の手を掴み返す。

「おっ、落ち着くんだ……」

「落ち着けるわけないでしょうがっ!!」

その言葉と同時に、俺の体が少しずつ後ろへと移動していく。

「ぐっ?ばっ、馬鹿な!この俺が力負けしているだど!?!」

冷や汗と共に、安っぽいセリフを吐く。

火事場の馬鹿力でも発動しているのか、ゴリラ並みの腕力が俺を襲
う。

「どっちらあなたには少し躡ヒョウシをしなければならぬようね……」

「躡ヒョウシって、お!ちよ、」

俺が反論しようとした瞬間に永琳は一旦、腕の力を弱めた。

俺はかなり力を込めていたため、それに対応できずに前に重心が移動し、よろめいてしまう。

「せいやっ!」

「は?あ、ぐえっ!!」

それを予測していたのか、永琳は俺の腕を両手で掴み、変則的な柔道の一本背負いをかけた。

空中を移動する何とも言えない感覚と同時に、思いっきりベッドに叩きつけられる。

すぐさま、俺の反抗を防ぐかのように体に乗っかる永琳。

つまり俺に馬乗り、ちよつとエツチく言えば騎乗位の体位になる。

「心配なんかしなくても大丈夫よ。痛いのは最初だけだから」

叩きつけられた衝撃のせいで意識が混沌としている俺に何か言うとポケットから何やら怪しく発光する液体が入った注射器を取り出す永琳。

そして素早く注射器の状態を確認し、俺の首筋へと針を向けて、そしてー

俺は叫びながら永琳に反抗する。

エイリアンの体液並みに、よく溶ける催眠剤って一体何なのさ。

「お前俺に何するつもりだ?!」

俺は逃げようと体を必至に動かしながら質問する。

すると、永琳は俺を拘束し、見とれるような微笑みで答えた。

「何って、あなたを快樂漬けにするだけよ」

とんでもない爆弾発言だった。

「お前やっぱ馬鹿だ!!天才じゃなくて大馬鹿だろ!!!!」

もうやだ!さっきも同じ事言ったが、いい加減に俺のハートがクラ

ツシュするんだけど。

俺の身体はガンダニウム合金並みに堅いが、精神は弱いんだよ。スペランカー製なんだよ！

転けただけでマインドクラッシュして植物人間になっちまうんだぞ！

「あ、注射器こっちの方だったわ」

失敗失敗、といった雰囲気ポケットからもう一本ー透明な液体の入った注射器を取り出す永琳。

「さて、それじゃあお注射を再開ー」

「するわけねえだろうが！このボケ！」

何食わぬ顔で俺に注射しようとする永琳。

勿論それに対応する俺。

「大丈夫よ。今度のは安心できるから」

「そんな言葉ホントに信じる分けねえだろうが！」

注射器が握られた手を両手で握り、抵抗する俺。

しかし、またもや火事場の馬鹿力が発動しているのに加え、馬乗りされているので力負けしている。

「さっさと観念したらどうなの？」

「くっ、ぜってー負けねえ！」

「大丈夫よ。これは本当にただの催眠剤だから。私特製の」

「それが信じられねえんだよ！」

俺は力を振り絞って答える。

しかし、反抗虚しく注射器の針が刻一刻と俺の首筋へと迫ってくる。

「ホント大丈夫。ちゃんと動物実験もしたわよ」

「けっ、結果は……？」

「普通にぐっすり眠ったわ。だから大丈夫、安全よ」

「……………それならいい、かな？」

俺は少し考えるように言葉を発する。

なんか正直、いい加減疲れてきたんだよね。

だったら諦めちゃおうかな、なんて考えてしまっ。

本人も安全って言ってるんだし、ただの催眠剤なら別に問題ないだろう。

それに永琳みたいな美女と一発ヤレるなら、それもある意味諦める理由にはなるはず。

「……………分かった。諦めて注射をー」

「まあ、その薬を打った動物はその後に爆死したんだけど、あなたは人間だから大丈夫よね」

大丈夫じゃない、問題だ。

「誰かつ！誰か助けてーっ！！ヘルプっ、ヘルプミィーっ
！！！！」

恥も外見も関係なく腹の底から思いつきり叫ぶ。

俺の人生の中で一番大声で叫んだと思う。

それも仕方ない。早くこの状況を何とかしないと俺が爆死する羽目になるのだから。

だが、俺の悲鳴は誰に届かず、無情にも注射器が首筋へと迫る。

「さあ、観念しなさい！」

「あつ、ちよ、まつ、いやーっ！！」

首筋には注射器の針が触れかかっている、絶体絶命な状況。

ああ、俺の人生終わったな。

俺の思考の中にふと、あきらめの言葉が横切る。

観念したかのように目をつむり、手の力を緩める。

この世界での記憶が走馬灯のようにフラッシュバックし、そしてー

パチンツ

―――時間が止まった―――

5秒が経った。

しかし、俺の首筋には何の痛みも変化もない。

もしかしたら現世とサヨナラをして此処は天国かもしれない。

そう思って自分の身体を確認してみる。

心臓も動いてる。脈もある。足も動くし、腹の辺りに永琳の体重も感じる。

どうやらまだ生きているみたいだ。

……………まあ、どの道俺は死んでも「部屋」に戻るだけなんだよね。

それにしても、そこそこ時間が経ったのに、眠くもならないし、爆発もしない。

何かがおかしいと思った俺は迫り来る恐怖に怯えながらも目を開いた。

「あれ？どうしたんだ？」

思わず口からそんな言葉が出てしまう。

それもそのはず。永琳が俺に馬乗りのまま動かなくなっていたのだから。

いや、永琳だけではない。

さっきまで微かに聞こえていた空調機の作動音も、枕が溶けて空を舞っていた羽毛も、さらには取っ組み合いのせいで乱れていた永琳の髪も、この部屋に有るもの全てが空間に縫いつけられたように停止していた。

「一体何が……いや、これってまさか？」

俺がひとつの予測を立てていると、頭の中に声が響く。

《相変わらず面白い事になっているな、お前は》

「こっつ、この声はゲイ天使か！」

《………命の恩人に対してそれはないだろう》

「あ、間違えた。ゲイ大天使だったっけ？」

《名前の問題じゃないぞ、全く………》

仕方ないじゃん。俺のイメージだとそんな感じなんだから。

《まあ、いい。今は訳ありで直接会って話すことは出来ないが、お前を助けてやるぐらいの事は出来るさ》

「ありがとう！マジありがとう！」

本当に良かった。危うく爆死する羽目だった。

《礼なら後でいい。少し急ぎの用があるからな。今は忙しいんだ》

「ふん。そうなんだ」

《ああ、また今度時間を作ってゆっくりと話そう》

「おう、そうしよう。ってかあと何秒まで時間を止められる？」

《そうだな……今は忙しいから60秒が限度だな》

「充分だ。それじゃあ俺は逃げるからよろしく！」

俺はそう言うと同時に、石像と化して馬乗りになっている永琳をどけて、扉へと向かう。

《……イーノックと同様、お前は本当に手間が掛かるよ》

「ん？何か言ったか？」

《いいや、何でもないさ。それより幸運を祈っているよ》

「やめろ、ゲイの祝福なんか要らん」

そう捨てセリフを吐くと、俺は部屋を出てこの基地から逃走を開始した。

《口が悪いよ、お前は》

独り言なのか、その言葉は彼には届かない。

《まっ、それがあいつの良い所であり、イーノックと同じくらい気に入っている所なんだがな》

ふふふつ、と陽気な含み笑いをする大天使だった。

狂気のえーりん診療所（後書き）

次回は依姫と豊姫の回。

原作なんか知らないよ。だって俺だもの。

桃姉妹に会いに行こう 前編(前書き)

なんとなく筆が進んで書けた作品です。

依姫と豊姫は後編で出てくるよ。

今回は前回みたく長くはならないようにするつもり。

前回は自分でも長くなりすぎたと反省してます。

桃姉妹に会いに行こう 前編

《都市 南側 軍事基地周辺部》

此処は軍事基地の近くにある路地裏。

高くそびえ立つビル群の影でそこは昼でも薄暗く、よく浮浪者達が彷徨っている場所。

そんな陰気臭いしみつたれた場所に彼の姿はあった。

息は荒く、肩を上下させながら新鮮な酸素を肺に取り込もうと必至に呼吸している。

服装も上半身裸で、手にはMP5（サブマシンガン H&K社）を持っているというなんとも可笑しな格好だった。

しかし、彼の肌には幾つもの擦り傷、掠り傷なんかがあり、そこから微量だが血を流していた。

「くそっ！ やってくれんぜ永琳の野郎……」

そう荒々しく声を繋ぎ、空を仰ぐ。

前回のお話で永琳の《受けたら爆死する注射》を強制的に受ける前に、ゲイ大天使ことルシフェルが時間を止めてくれて、俺は何とか脱出。

しかし、俺が脱走してちょうど一分経った瞬間に基地の緊急警報装置が発動。

ARやらワイヤー針スタンガンを携行した哨戒兵がわらわらゴキブリのように湧き出てきた。

俺を指して一直線で。

どうやら永琳は俺が逃走する事も一応予想していたのか、哨戒兵を俺が脱出の際に通いそうなルートに配置していたのだ。

「痛っ…………直撃は無いけど何発か掠ったな、こりゃ」

《探求者の秘宝》から簡単な医療パックを取り出し、身体の各所にある傷に治療をする。

人数も、配置も、装備も何もかも全てが極悪囚人の警備体制並に厳しかった。

プリズンブレイクを全シーズン見てた俺だからこそ脱出出来たものの、見ていなかったら今頃は永琳に改造されていただろう。

しかも哨戒兵が警告もないまま容赦なく発砲してきたから俺も《探求者の秘宝》からMP5を取り出し応戦。

さらにはフラッシュバンやスモークグレネードを大盤振る舞いし、なんとか哨戒兵達を撒いた。

「……………あいつは本当に俺の事好きなのか？　好きな人に兵士をけしかけるなんて正気の沙汰じゃねえぞ」

ヤンデレか？　そうなのか？

元々そんな感じがしてたから納得できるが、今回はやりすぎだと思っ。

もはやヤンデレというレベルではない。

殺人デレと名付けよう。

壁にもたれかかり、基地から全力疾走という過酷な有酸素運動をして熱くなった身体を休めさせる。

この時、追っ手に見つからないようになるべく人目の付かない暗い場所を選ぶ。

それと同時に空になったMP5の弾倉を抜き、新しい弾倉へと変える。

「軍隊に入隊する前に軍隊に追っかけられるってどうゆうわけだよ……………つたく」

休ませながら耳を澄ませると、遠くから搜索隊の声や軍用犬の吠え

る音が聞こえてくる。

声の大きさから予測するに距離的にもそこそこ近い場所にいる。

「ちっ！ 諦めが悪い奴らだ。真っ正面からは………無しだな。数
が多すぎるし、地の利も無い。仕方ねえ、どっかに隠れてやり過
すか………」

俺の体は疲労困憊だが、精神は燃えたぎっている。

つまり、まだ動けるってこつた。

俺は《探求者の秘宝》から適当な上着を取り出し、隠れ場所を探す
ために走り始めた。

《都市 南側 とある豪華な屋敷 裏門》

スパイ、つてのは一回やっという損は無い職業だ。

スパイになれば所属する国から最高の訓練を受けれるし、沢山の技

術や普段知り得ない情報も制限付きだが教えてくれる。

まあ、確かに他国に潜伏したり囮捜査などの危険な任務に従事する必要があるが、それ以上の見返りもある。

つまりハイリスクハイリターンってやつだ。

もちろん、スパイの訓練で隠れ場所なんかの見極め方、選び方の訓練を受けた。

隠れ場所と言ったって、何も無人の小屋や地下道に潜るんじゃない。

案外そう言った場所はその地域担当の警備員にマークされてる場合が多い。

地の利や、直勘に自信がないなら止めた方がいいだろう。

人目に付かない場所は駄目。

かといって人混みに紛れるのも避けた方がいい。

良く映画などでは人混みに紛れるのは得策とあるが、あれはスナイパー（狙撃）から狙われた時や追っ手が少数の場合だけだ。

追っ手が軍隊や公安なんかでは、人海戦術で出入り口を塞がれた後にジリジリと包囲され袋にされる。

ならばどうするか？

そんなのは簡単。あえて警備がしっかりされている建物を選べばい

い。

こういった場所は警備が良いのが仇となり、軍隊、公安はあまり寄らずに、連絡してその警備員に任せてしまおう。

この時、会社や企業ではなく個人の屋敷などを選ぶのがベスト。

企業などは防犯の為にセキュリティが機械で管理されている場合がある。

機械のセキュリティを破るには時間がかかるし、何より下準備が必要だ。

だけど個人の屋敷なら大丈夫。少しのテクニックさえあればなんとかなる。

「……………うん、この屋敷で良いな。名前は「綿月」か。どれどれ警備は、っと」

影になる場所づたいに裏門へと移動する。

すると、裏門には個人で雇ったと思わしき警備員が屋敷に不審者を入らせまいと目を光らせている。

その警備員の後ろにはIDスキャナーの付いた扉がある。

おそらく、裏門は警備員や家に従事している人が入る場所なのだろう。

門の前にいる警備員も首からIDカードと思わしきものを提げている。

警備員を張り倒して無理矢理押し入るなんて野蛮なこととはしてはいけない。

一歩間違えればこっちが不利になる。

スマートに、かつエレガントに入るのが1番いい。

「よう、お勤めご苦労さん」

「ん？ ああ、そつちこそご苦労さん」

侵入するのは簡単だ。

ちょっとした演技力と会話力さえあれば誰って出来る。

スパイになるときにその訓練もしてくれる。

「なあ、綿月様は居るのか？」

「ああ、当主様達は居ないが豊姫様と依姫様がまだ中に居るな」

「ん、ありがとう」

常に笑みを浮かべたままそれらしい会話をしていれば、勝手に相手
が同僚と勘違いしてくれる。

「なあ、ちよつとID貸してくんね?」

「……………どうしたんだ?」

警備員の目に少しだが疑惑の色が浮かぶ。

相手から不審に思われても自分が不審者と悟られるな。
笑みを浮かべたまま、仲間だと思わせるんだ。

「あゝ、実は家に忘れて来ちゃったんだよな、ID。だから見逃し
てくんね?」

そう頼んだ後に、さわやかな笑顔を作る。結構効くんだよコレ。

「おいおい、そんなミスしていると綿月様に怒られるぞ、まったく
……………。ほれ」

俺のマツクの店員もビックリするほどのスマイルが効いたのか、警
備員の顔から疑惑が消えて了承してくれた。

ピー、と機械音が鳴ると同時に扉が少し開く。

「すまねえな。　こんど飯でも奢るから」

そう言っつてすぐさま扉を開け、屋敷に入る。

「……………スパイつてのもいいが、やっぱり俺にはこっちの方が性に合っぜ」

俺の右手のからポフポフと、何故か財布があった。

「まっ、俺がただで媚びへつらうなんか無いんだよ」

俺はニヤリと邪悪な笑みを浮かべると、とりあえず着替えるためにロッカー室を目指す事にした。

《都市 南側 綿月邸 ロッカー室》

「ぐっ……がつ、かはっ……」

「ふんぶん、警備は朝と夜に分かれる二勤体制。人数は警備員や家政婦みたいなのを合わせて10ぐらいか」

俺はロッカー室で警備について載っているであろう用紙を見ている。

「く、おっ、応援を……」

「今は昼の三時だから、夜の奴等との交代にはあと四時間ぐらいあるな。よし、三時間経ったら出るか」

そう考えをまとめた俺は、今まで踏んでいたボロボロ警備員ローラーロッカー室に偶々いた奴を見つけボコしたローラーをチラリと見る。床に這いつくばって必至にトランシーバーを取ろうとしているが、後もう少しというところで俺が踏んでいるため動けない。

「おいおい、もう少し頑張ってくれなきゃつまないだろうがよ」

俺はニタニタと口角を吊り上げながら言う。

「くそっ……何が狙いだ」

「ああ？ 狙い？ んなもんねえよ。 まあ強いていえば俺の憂さ晴らし的な感じかな？」

今日はまだ昼間だが、俺にはもう10日を寝ずに過ごしたのでは？ と錯覚するほどに永く感じた。

永琳に迫られるわ、永琳に脅されるわ、永琳に刺されるわ、永琳に変な薬打たれかけるわ、とろくな事がない。

あれ？ これ全部永琳のせいじゃね？

……とっ、とりあえず、鬼畜外道勇者アルカトラズがなんとも無様な醜態を晒してしまったではないか。

一回、ストレス発散しなければ身体が落ち着かない。

と、さらに足の力を込める。

「があっ、く！はあ、はあ、」

「面白くねえなあ。そんなもんじゃ俺がガキの頃に夏休みの宿題で作ったマダオ観察日記にすら劣るぞ。おら、泣け、叫べや」

ちなみにマダオとは　まるで駄目な男　略してマダオだ。

「がつ、うぐう！」

踏みつけてない方の足で踵落としを決める。

あー、なんか飽きてきたわ。

つまんねえし、金目のもんでも拝借しちゃおうかな？

俺が憂さ晴らしと暇つぶしに絶賛Sプレイを楽しんでいると、さっきの警備員との会話を思い出す。

あー、なんだったか……依姫と豊姫だったけ？　名前から見て女の子だと思っけど、そんな子が今屋敷に居るんだったか？

「おい、お前は依姫と豊姫って子、知ってんのか？」

「ぐっ、知っているがそれがどうした」

「その依姫と豊姫ってのは可愛いのか？」

「お前の目的は依姫様達か?! そんな質問に誰が答えるー」

「勘違いすんじゃないぞカス！　今のは質問じゃねえ、命令なんだよ！　いいか、もし俺が国王ならてめえは奴隷の奴隷なんだよ！」

生まれてからの身分が天と地程に違がうんだ！　つまり、てめえな
んざゴミに拒否権なんか無いんだよ！　いいか分かったか！　この
ウジ虫風情のクズ野郎が！！」

「ひっ、ひいっ？！分かりました！答えさせていただきます！」

俺はドスの効かせた怒声で警備員に聞かせる。

すると、警備員はコウモリのような鳴き声をあげるとすぐさま素直
に従った。

言うておくが、俺のSのパラメーターはMAXを乗り越して無限大、
なのだ。

つまり、皇女だろうが聖女、ヒトラーだろうと関係無く鬼畜ドSプ
レイに走れる素晴らしい軍人なのだ。

二代目ハートマン軍曹と呼ばれた俺の訓練用鬼畜罵声用語集はいま
だに健在だ。

「よし、ならとつとと答える」

「お、お二人とも普通の女性と比べればかなり美しい方です！」

「ふん、そうか。つまり、美人ってわけか」

俺は考えるように顎に手を当てる。

「ちょうど良かった。マッドサイエンティスト（永琳）のせいで少し女性恐怖症になりかけていたんだ。よし、その依姫と豊姫って子に会って癒やされに行こう」

戦う男には休める場所、つまりオアシス（可愛い女の子）が必要なのだ。

そう決断したら、すぐさま行動を起こすのが吉だ。

俺は怯えていた警備員の顎に笑顔で蹴りを入れ昏倒させる。

そしてそいつから服をはぎ取り、適当な空きロッカーの中に放り込む。

いそいそと警備服に着替えて、ロッカー室を出る。

「……………何故か知らんが最近俺が襲われる側だった。とても不本意なことにな」

コキコキと腕を鳴らし、宣言するように口を動かす。

「が、それもこれまでだ。今からは逆に俺が女の子を襲っちゃう番、つまりはショータイムってやつだ！」

ヒヤッホーイ！ と叫ぶと同時に俺はウサインボルトの如く走り出した。

どうやら彼は自分が逃亡している真っ最中だという事をすっかり忘れてしまったようだった。

桃姉妹に会いに行こう 前編（後書き）

女のことになると結構おばかさんになる主人公。

ちなみに主人公は鬼畜勇者ランスみたいな感じに、おんにゃのこを襲うのに抵抗は全然ないですよ。

まあ、この物語ではあんましそういった描写はできない、ってか筆者にそんな技量は無いですけど。

自分なりに頑張って、皆さんが見て楽しめるような小説にしていきたいです。

こんな主人公って皆さんの目から見てどうなんですかね。

そこんところについての指摘なんかの感想がほしいです。

桃姉妹に会いに行こう 中編(前書き)

本当は前編後編だけにしようとしたが、長くなってしまったので、中編を足しました。

この時代では綿月姉妹は学生と言う設定になっていますのであしからず。

桃姉妹に会いに行こう 中編

《都市 南側 綿月邸 調理場》

只今の時刻、昼の一時。

お天道様も頂点を通り過ぎ、朝食を消化しきったお腹が新しい糧である昼飯を求めて虫の音を奏でる時間帯。

今、つまり現在。俺は綿月邸の調理場にて白衣姿で汗水流しながらおやつ作りの作業の下準備をしている。

なかなかの豪邸である綿月邸は部屋ひとつひとつが豪華な装飾品で飾られており、訪問者を泊めるための客室も多めにあり、一般家庭では一つしかないトイレなども複数あるなど少しうらやましい造りだ。

こんな官僚邸みたいな場所に来るのは久しぶりで、俺の住んでた《夜になるとゴキブリ達が隊列を組んでジェットストリームアタックをかましてくる》ような安っすいマンションと比較すると、それはもう、えらいぐらいには大違いだ。

もちろん、そんなそんな豪邸な屋敷の調理場も一般とは程遠いぐらい広く、設備がいい。

扉が四つある業務用冷蔵庫が二つ、ガス台が大小全部合わせて10。さらには電子レンジにオーブン、焼き物用のコンロまで付いているんだから、それは凄い。

それもそのはず。こういったお偉い上流階級の皆様は自己の権利や偉大さを見せつけるため、よく自分の邸宅でホームパーティー、いや、そんなどこの家でも出来るようなモノでは無くもはや披露宴、もしくは国家関係の式典並の食事を開く。それも月一回のペースで催すのだからよほどお金があるのだらう。

羨ましい、なんて妬ましい、いつそのこと爆破してしまおうか。パールパールパールパール。

そんな嫉妬に刈られた事を考えつつも、彼はおやつを作る手を動かすのは止めない。

それは別世界でイギリスお抱えのパティシエと登りつめた精神とプライドが関係しているのか、はたまたこの現状から現実逃避をしているのか分からないが、何故か本気でおやつを作っているようだ。

はつきり言って、技術の無駄使いである。

調理場の中央に堂々と設置されてある調理台。その調理台にあらかじめ準備しておいた薄力粉を開けると、これもあらかじめ準備しておいた大ボウルに高級薄力粉とバター。これは朝に自分でピンを振って手作りした新鮮なものを入れ、二つをダマが出来ないように混ぜ合わせてボロボロに崩れるまで両手を使いほぐしてく。

この時に氷の入った冷水をボウルに入れて、その中に手を突っ込んでおく。そうすることで手の温度を低くし、生地を混ぜ合わせる

際に、風味を損なわずに美味しいパイ生地が出来上がるのだ。

そしてボロボロからサラサラになるまでほぐしたパイ生地に冷水を満遍なく全体に浸透させながら入れて、手の平でコネコネしていく。

この時に冷水を入れすぎてパイ生地がグチャグチャにならないよう注意が必要だ。

俺はパイ生地に全神経を込めて、丹念に製作していく。

「依姫ちゃん、そこにあるラップ取ってくんね」

「あ、はい」

と、クマちゃんマークの可愛いエプロン姿で作業している依姫に頼むとすぐにラップを取り、差し出してくれる。

ありがとう、と感謝の言葉と同時に依姫の手からラップを取る。

「あ、あとで手が空いたらこの生地の形作りを頼んでいいか？」

「任せてください。あ、これって丸く平らに伸ばせばいいんですね？」

「そうそう。あ、伸ばす時はそこにあるローラーを使った方が簡単だから使いな」

分かりました、と返事を返すと自分の作業に戻る依姫。

「ねえ、おやつまだかしら？」

と、調理場の配膳用の窓口からひよい、と間延びした声と共に豊姫が顔を出してくる。

「お腹空いちゃった、はやくはやく」

「はいはい、っと。ピーチパイは逃げないから少し待って……」

おやつを催促する豊姫を宥めつつ、俺は備え付けの業務用冷蔵庫からグラニュー糖やレモン汁で甘く漬けた桃を取り出し、包丁で細かく一口サイズに切り出す。

桃は非常に傷みやすい果物だ。取り扱うには傷つかないように細心の注意を払わなければいけない。

「ねえ、桃ってまだ余ってる？ 余ってるならちよーだい」

「おいおい豊姫、おやつを食う前に甘いもんを食べるなよ。味が分からなくなっちまうぞ」

「そうですね姉様。それに、お昼ご飯食べたばかりじゃないですか。そんなに食べばっかりだと太っちゃいますよ」

食いしん坊な豊姫に小言のように注意を促す。

「大丈夫、後で真と一緒に運動するから平気。だからちよーだいっ！」

が、俺達の忠告を華麗に無視しながら、天真爛漫な笑顔を浮かべおねだりするように手を上下に振る。

「俺が運動に参加するのは決定事項なのか……………」

はあ、と浅いため息を付く。

今日は朝の五時から依姫達の朝食の下拵えをしていたため、少し寝不足なのだ。

このおやつを作り終わったら、少し昼寝をして惰眠^{だみん}を貪^{むさぼ}ろうと予定していた。

「しょぼくれないください。生地出来ましたよ」

すると、俺に慰めの言葉をかけながら、横からトレーを持った依姫が近づいてくる。

どうやら豊姫の要求には華麗に無視する事にしたらしい。

まあ、俺も無視するんだけどな。

「ん、生地も作り終わったか。そんじゃ主役である桃を載せんぞ」

「分かりました」

「おー！」

俺が依姫に次の指示をしていると豊姫も手伝ってくれるのか、呑気なかけ声と共に調理場に入ってくる。

切った桃を皿に移し調理台の上に置き、依姫と豊姫、そして俺の三人で生地に桃を載せていく。

「今日のおやつって桃のお菓子なんだ」

「ああ。パイ生地を使った甘いアメリカンピーチパイ……って、アメリカなんか言っても分からないか」

「あめりか？ 初めて聞く名前ですね。どこかの地名ですか？」

「私も知らない。つまり、美味しい桃のお菓子って訳ね？」

「そゆこと。ほら口より手を動かせ、手を」

「はい」

三人で丸く平らの生地になるべく均等になるよう桃を載せていく。

で、桃を載せた生地の上からまた生地を被せて形を整える。

「あつ！ 摘み食い！」

「摘み食いじゃないわよ。味見味見」

依姫が行儀が悪いと叱るも、豊姫はどこ吹く風のように受け流す。

俺は豊姫の悪行に呆れつつも、おやつであるピーチパイを作り続ける。

そしてその出来上がったピーチパイをトレーに置き、これまた備え付けの業務用オーブンで200 に設定し、二十分かけてじっくり焼き上げる。

これでひとまず終了。あとは二十分後に皿に綺麗に盛り付ければアメリカンピーチパイの完成である。

俺は頭に巻いていた手拭いを取り、固まった筋肉をほぐすように背

伸びをする。

久し振りにお菓子作りをしたぜ。最後に作ったのは確か………パキスタン大統領夫妻の結婚式だったか？

プラスチック爆弾入りのウエディングケーキをわざわざ手作りして大統領にプレゼントしたんだよな。

我ながらいい感じに気を配ったとても素晴らしいケーキだったと思っっている。

そういえば、あの後に結婚式会場が不思議なことに爆発したのだが、ホント何故だろう。

俺はその時だけパーティー会場に居なかったから分からないが、生存者の話だと大統領夫妻がウエディングケーキに入刀した瞬間に爆発したらしい。

世の中は物騒だなー。 これからも用心しなければならぬ。

「しゅん」

すると突然、誰かが俺の腰に腕を回すのと同時に、むにゅ、と水風船と錯覚するぐらいに柔らかい感触が二つ、背中に感じる。

今の間延びた声からして豊姫だろう、と予測しながら今の衝撃で倒れないように体勢を整える。

「それそれい」

「ちょ、苦しいって……………」

と、さらに身体を密着させてくる豊姫に俺は反論を返すが腕を外そうとも、ましてや離れようともしない。

おお、ムツチリとした胸の柔らかい感触がまたなんとも言えない…

……

あれだよ。 とりあえず堪能できるならしておかなきゃ損だよ。

「ちょ、お姉様！ またそんな事して……………はしたないですよ！」

「大丈夫よ、ただ戯れているだけだから」

むぎゅぎゅ、と反発するように、さらに俺を抱き締めている腕に力を込める豊姫。

おいおい豊姫さん。 そんなに強く抱き締めちまうと胸の先っぽにあるぽっちが……………。

うん、幸福幸福。

「戯れるにも限度があります！ 限度が！」

「えー？ だってされてる真も喜んでるし、良いじゃない」

「喜んでるって………うわホント。いやらしい変態の顔してます」

俺の顔を見てドン引きする依姫。

なんだ、なんて失礼なことを言うんだ。

この世界に俺ほどナイスガイな顔したイケメンはいないと断言できるぞ。

「ね？ されてる本人が喜んでいるからだから良いでしょ？」

「良いでしょ？ じゃありません。それとこれとは話が違います

」！

「えー？ だったら貴女もやればいいじゃない。 ころっ、むぎゅっ
っつと」

まるで見せつけるかのように密着する、いやもはや合体みたいなレベルまでに抱き締めてくる豊姫。

ていゆうかね、もうヤバいのよ、胸が。

さつきから胸の感触が服越しに伝わってきてるんだけどさ、服の上から見ても存在を主張する豊姫の胸が、俺の背中に添うようにして

形を変える。

最近ご無沙汰だったマシユマロの感覚に、ちょっと癒やされます。

「そんなはしたない真似出来ません！」

顔中、耳の端から首筋までも真っ赤にして答える依姫。

どうやら依姫はこういった破廉恥？な行為にあまり耐性が無いようだ。

俺的には大歓迎なんだがな……………。

安西先生、非常に残念です。

「出来ないって……………あ、もしかして胸がぺったんこだから……………」

一旦俺から離れると、豊姫は自分の胸を両手で触わり、どこか哀れむような視線で依姫を見つめる。

すると依姫は急に、もはやびっくりするぐらいに笑顔になり、

「お姉様、今すぐその無駄な脂肪の塊を切り落としますので離れてくださいー！」

「きゃー?! ペったんが私の胸に嫉妬して怒ったわ、助けて真!

姫。
激怒して日本刀を取り出した依姫から逃げるように俺を盾にする豊

「誰がぺったんですか! 私にだってそれなりに胸はあります! それに、お姉様が一般より大きいだけです!」

「だって私から見ればぺったんだもん」

「だからぺったん言わないでください!」

「やーい、ぺったんぺったんつるぺったん」

「お姉様!」

ぎゃーぎゃーと激怒した依姫が豊姫を無理矢理俺から引き剥がす。

柔らかい感触が無くなった事に若干惜しい気持ちが始上がるが、このままの状態でいると俺が依姫に素晴らしいアッパーカットを食らわされるので素直に豊姫から距離をとる。

すると、俺の取った行動に豊姫がわざとらしく大声で反応する。

「あー、真ったら私より依姫の胸の方が好きなの? もしかしてぺったん子好き?」

「誰がぺったん子ですか！」

と、また激昂する依姫。このままだとポンペイ火山並に爆発するかもしれないので宥める事に。

「まあまあ落ち着けよ。豊姫の性格は今に始まった事じゃないだろ？」

肩に手を置き、言葉をかけ宥める。

「うっ……、それはそうですけど……」

「なら諦めて受け入れろ。自然災害みたいなもんだと思ってさ」

「……………はあ、仕方ないですね。真さんがそこまで言うならー」

「な？ぺったん姫ちゃん」

「だからぺったん姫って何なんですか！？ あなた喧嘩売ってるんですよね！ そうなんですネ？ そうなんですしよ！ そうって言いなさいよー！」

「ぺったん姫ちゃん。はい牛乳」

飲めば胸がおつきくなるわよ、という一言と共に豊姫がコップに牛乳を入れ、差し出す。

ナイスプレー、ファインプレー。

完全に悪意のある挑発だった。

「お姉様も乗っからないで下さい！」

豊姫の言動にまたもや姉妹そろってじゃれあいを始める。

それを少し離れた場所から見守り、ポケットから煙草を一本取り出し、口に挟む。

ライターで煙草に火を付け、紫煙を味わうかのように吸って、肺のため込み、吐き出し、ぼやけるように天井を見る。

まあ、さつきから豊姫が依姫の事をべったん呼ばわりしているが、依姫は別に貧乳なんかではない。

むしろ普通の胸よりサイズは大きい方だ。

たぶんだが、こうわし掴みにしても指の間からはみ出すようであるう大きさだ。

ただ、豊姫の胸、つまりバストサイズが尋常じゃならないぐらいに半端ない。

「豊姫」の名前と同じように胸が豊かなのだ。

よし、これからは豊姫の胸の事を「とよばい」と命名しよう。そうしよう。

と、俺が人類史上にとても重大な事を考えていると、いきなり口から煙草の感覚が無くなる。

「煙草はダメですよ。百害あつて一利無し」

声の主に視線を合わせると依姫がいて、その右手にはさっきまで俺が吸っていた煙草が握られていた。

「そうよ、煙草は体に悪いわよ。うー、貴方本気で叩いたでしょ。頭がくらくらするわ……………」

「自業自得ですよ、お姉様」

依姫の隣にふらふらと幽霊のような足どりで豊姫が近寄ってくる。

豊姫の愚痴から察するに、依姫は豊姫の頭を叩く事で許したみたいだ。

が、かなり強く叩いたのか豊姫は若干涙目だった。

ホント仲がいいよな、この姉妹。

俺は苦笑いをしつつもたんこぶを癒すように豊姫の頭を優しく撫でる。

豊姫も撫でられて少し恥ずかしいのか顔、具体的には耳や頬をうつすら赤く染めている。

しかし、恥ずかしいが嫌ではないらしく、むしろ嬉しいのかその口元は少し緩んでいた。目尻も吊り下がって、安堵の表情になっている。

「もう、真さんったらホントお姉様に甘いんだから……」

俺の行動を見て呆れるような表情になる依姫。

「そう言っとなって、な？」

「えへへへへへへ」

撫でられながら、嬉しそうに喉を鳴らす豊姫。

端から見れば、《しっかりした妹と天真爛漫な姉。そしてその2人をあやす長男》 みたいに見えるだろう。

だが、何故不思議だが彼の顔にはどこか影みたいのが掛かっていた。

「なあ、二人とも。　ちょっとだけ訪ねたい事があるんだけど、良
いか？」

俺はさっきまでの表情を一変させ、言葉を苦々しそうに重くして2
人の顔を見つめる。

その表情は、愛する家族と恋人を残して戦争に行く青年のように重
く、どこか清々しさを感じさせる表情だった。

「……………どうしました？　何か辛い事でもありましたか？」

「大丈夫？　身体の調子でも悪いの？」

俺の暗い表情を見て何か感じ取ったのか、2人とも顔を心配そうに
して俺に近寄ってくる。

「とても言いにくい話なんだか……………そんな重苦しい話じゃないよ。
だから安心して聞いてほしい。　いや、もしかしたら2人には少
し辛い話かも知れない。　でも、でもな。　これだけは聞いておき
たいんだ」

俺は自分の手を額に当て、重々しい雰囲気を漂わせる。

「……………分かりました。何でも聞いてください。それで真さんの苦しみが少しでも晴れるなら……………私は何だって答えます」

普段から真面目で、一生懸命な依姫は俺の眼をまっすぐ見据えて言葉をかけてくれる。

その表情には、どこまでも安心させるような、そう、まるで地球を照らし導く太陽のように燦々と輝いていた。

「私もよ。それに、真のためだったらどんな質問されたって嫌なんかにならないもん」

依姫とは正反対の性格、天真爛漫でおっとりとした豊姫。

だが、いつものような子供っぽい笑顔はなく、見て取れる真剣さを帯びた笑顔だった。

「なあ、教えてくれ。どうして……………どうして俺は……………」

俺の憂いさを帯びた眼を見て、2人とも喉をゴクリと鳴らせる。

そして罪を告白するように、まさに「パンドラの箱」を開けるかのように、言葉を発する。

「それはさ豊姫達からすれば今更何をかもしれないさ！ でもな俺からすればかなり変なことになってんだよ！ 俺の華麗なショータムは何処に行ったんだよ?!」

大声で、叫ぶように豊姫達に訴えかける。

読者様の中には「お、アルカトラズの野郎もしかして依姫達を犯ちまって墮としたのか？ 流石そこに痺れる憧れるう！」なんて思ったかもしれない。

だが現実はかなり違う。

俺は依姫にも豊姫にも手を出していないし、触れてさえいない。

むしろ屋敷から逃亡しようとしたぐらいだ。

たが失敗した。 何故か逃げ切れなかった。

この屋敷は魔王の部屋だった。

言葉では説明しきれないから回想を挟むとしよう。

回想 1

P M 3 ・ 0 0

「ランランルー ランランルー」

俺は腕を振りながらスキップで廊下を駆ける。

なんだろう、俺は今すごく気分がいい。 まさに天に昇る気分だ。

あれだ、久々にショータイムが出来るから張り切っているのだろう。

さらにこの屋敷に住んでいる可愛い子に会えるんだからもう仕方な

い。

だから俺はランランルーを口ずさみながら豊姫と依姫と言う女性を探し回る。

「ん、誰だおま　「乱乱琉拳！」　ぐぼはあ?!」

と、突然廊下の曲がり角で屋敷の警備員と出くわし、思わず「乱乱琉拳^{ンル}」を顔面に叩き込む。威力は………メガマツク7個分かな？
鼻血を吹き出しながら壁にもたれ掛かる警備員。

危なかった。俺は今不法侵入中なのだ。　バレるわけにはいかない。

まさにドナルドの秘密。

そんな事を考えながら進んでいると、廊下の外に広い庭のような所が見えた。

その庭はよく手入れされており、中央には大きな岩とそこそ大きく育った桃樹があった。

見ると桃樹はそろそろ収穫期なのか、その枝には綺麗なピンク色をした桃が成っており、桃の甘く、芳醇な熟れた香りが離れた場所にいる俺の所まで漂ってくる。

桃樹の葉の深緑と桃の薄赤が織りなすコントラストを凝視していると、

不意にその下に一人の女性が立っているのが見えた。

俺の位置からだと後ろ姿しか見えないが、身長から予測すると約16歳ぐらいだと思う。

桃を取ろうとしているのか、必至にその果実へと手を伸ばしている。

だが女性の身長と桃樹の幹の高さはかなり差があり、背伸びし、手を伸ばすも、あれでは絶対に届かない。

だが諦めずにぴよんぴよん跳ねる女性。

やがて無理だと悟ったのか、跳ねるのを止めるとその女性は屋敷の別棟を向く。

そこでやっと女性の顔が見えた。

さつき飛び跳ねたせいで少し乱れているが、そんなのさえ気にならないぐらいに煌めく金髪。

青色のリボンが巻かれた帽子。それと同じように青と白の入り混じったスリットロングスカート。

おっとりを表現するかのように優しく吊り下がった目。

何より一番目立つのは胸。服の中から押し上げるようにして主張する膨らみは、永琳には惜しくも及ばないが、その童顔とは不釣り合いに大きい。

永琳を妖艶と表すなら、この女性は天真爛漫がぴったりだろう。

俺が冷静に女性のスタイルを考察していると、突然辺りをきよろきよろと見回し始める。

何か道具でも探しているのか、と観察を続けているとくるりと俺の居る方角に振り向いた。そして目が合う。

「その貴方、ちょっと手伝って」

と、手を振り俺の事を呼ぶ女性。

今の言葉遣いから、警備員が言っていた綿月豊姫か綿月依姫だと思われる。

まあ、断るのもやぶさかだから素直に従い、その綿月？の所まで近寄る。

「何でしょうか？」

とりあえず、初対面なので敬語で話し掛ける。

第一印象はとても大切だ。それによって攻略難易度がグンと変わるからだ。

「この木から桃を取るのを手伝って欲しいんだけど、いいかしら？」

「そのぐらいかまわないですよ」

「そう、じゃあ屈んでくれる？」

「屈むって、もしかして肩車ですか？」

「そうそう肩車」

女性を肩車するのは紳士としてはいけないが、まあ俺はそんな事気にしないから問題ないな。

俺が屈むと同時に乗ってくる綿月。それを落とさないよう注意しながら立ち上がり女性の指示に従っていく。

「もつちよつと前前」

「はいはい」

そそくさと桃を取る綿月。

俺は綿月による振動に耐えながら、どうやって癒されようか考えていた。と、何か不思議な香りが俺の鼻孔を通り抜ける。

桃に類似した、しかし何かが確実に違う不思議な香り。

一体何なのかと思い、その香りの発生源を辿るように鼻をすんすん

と鳴らす。

が、どんなに嗅いでみても何の香りなのか分からない。

なんだろう。果実みたいな匂いなんだがな。

「あの……………」

上から声をかけられる。顔を上げてみると綿月が顔を恥ずかしそうに赤くして俺を見た。

ちょ、胸が邪魔で見えにくいんですけど。

「はい？」

「いや、そのですね……………」

言にくいのか、はっきり喋らずに口をもじらせる。

「臭いを嗅がれるのは……………その、ちょっと恥ずかしいです……………」

「あ、すみません」

謝ると同時にこの香りが綿月の身体から薫る臭いなのだと理解した。

だが、汗のように不快なものなどみじんも感じさせない臭い。

むしろ甘くて安らぎを与えるぐらいにいい匂いだった。

綿月の容姿をそのまま直接変換させたように優しい匂い。いや、こないない匂いがするんだから性格も容姿と同じく優しい性格なのだろう。

永琳もこんな感じで優しくかったらいいんだけどなー。なんであんな性格しているんだろう。

胸も大きいし、顔も綺麗。気立ても申し分ない。

あのマッドサイエンティストの性格じゃなければなく、今すぐにもベッドに連れ込んでルパンダイブしているのに。

「……………重いよ、ホント」

愛が重すぎる。押しつぶされちゃうよ俺。

と、いきなり桃を取っていた綿月の動きがピタッと止まる。

それと同時に低い声色で何か呟く。何かは分からない。

「女性に……………」

「はい？」

俺がなんとも間抜けな声を出した瞬間に、今まで手で押さえていた綿月の足が俺の首の前で交差するように組まれ、

おもいつきり締めつけられた。

「女性に向かって重いとは一体どんな見なの？」

柔らかくぶよぶよで極上な感触と、首を圧迫される事による窒息感と鈍い痛みが同時に彼を襲う。

「……………?!」

「ねえ、私って口に出しちゃうほど重いかしら？　ねえ？」

スカートがふわわりと舞い、さっきの甘優しい女性の香りがまた俺の鼻孔を軽く刺激すると、喉仏が足に締め付けられることにより悲鳴を上げている。

子供に優しく言い聞かせるよう叱る綿月。

喉を潰されているせいで声にならない絶叫しか挙げられない俺。

幸福と不幸、天国と地獄が一遍に襲ってくるという、なんとも不思議な体験だった。

いや、幸福は一時しかないのに対して死ぬ危険が付きまといっている時点で理不尽な事だ。

s u g g a r & k i l l

(シュガー & キル)

これが俺の今の状態だった。

これ以上やると死ぬかと思ったのかググツ、と最後により一層強く締め付けると首から足を組み外し、器用に俺の肩から地面に降りる綿月。

ゴホツ、と痛みから解放された喉を抑えながら綿月を睨み付ける。

が、逆に殺されそうなくらいな眼光で睨み返されたので急いで止めた。

優しい印象とは全然違う顔だった。

くっ、くそう！！ この俺としたことがまんまと釣られちゃったぜ。

「貴方、もっと女性に気を使った方がいいわよ」

「……………誤解だ」

なんだろう。俺なんにも悪くないのに。

無罪なのに。

ちくしょう、絶対復讐してやる！

「っ、と。はい、どうぞ」

と、俺がリベンジの方法について模索していると、自分で抱えていた桃を一つ手にとり差し出してくる。

ありがとう、と感謝の言葉を返し桃を受け取る。

なんだ。やっぱり優しい子じゃないか。

とりあえず復讐は先延ばしにしておいてやろう。

そう考えながら、いつも足に常備している小型のサバイバルナイフを取り出し、桃の皮を剥いでいく。

「お姉様——！」

と、いきなり屋敷の方から、これまた美人な子が近寄ってくる。

お姉様と呼んでいたので、隣にいる綿月の妹なのだろう。

容姿は……この綿月と正反対と言つのか、服装は赤と白の入り混じったスリットロングスカート。

薄紫色の髪を黄色のリボンでまとめたポニーテール。

目尻はキリツとつり上がっており、活発で元気そうな印象が姉妹として納得させる。

「あ、依姫じゃない。 どうしたの？」

「どうしたの？ じゃありません。 目を離れた際に部屋から抜け出して……まだ宿題は終わってませんよ」

「えー、宿題なんてもう飽きたわよ」

「そんな事言つて宿題が無くなるなら宿題の意味がありません」

小言みたいなのをこぼす依姫。

今この綿月が依姫と呼んだんだから、たぶん豊姫はこの女性だろう。

なるほど。 あの警備員が言つてたとおりに綺麗だ。

永琳と同レベルな容姿をしている。

「しかも庭になつてた桃まで……太つたって知りませんよ」

「大丈夫よ。　ついさっき足の運動をしたから」

依姫は叱っているのだろうが、全て豊姫にのらりくらりとそらされる。

駄目だなこりゃ、相性が悪い。

と、俺が冷静に姉妹の性格を把握していると依姫の視線が俺に向かう。

「ところでお姉様。この警備員は一体誰ですか？」

警備員？　俺が？

そう不思議に思い、自分の服装を見てみると、確かにさっきぶっ飛ばした警備員と同じ服装だった。

あ、そういや俺ってロッカー室で剥ぎ取って装備してたじゃん。

すっかり忘れていたよ。

「この人？　ああ、この人は桃を探るのを手伝ってくれたのよ」

「そうなんですか。……って、あれ？　私の気のせいなのか若干涙目に見えるのですが………」

「気のせいよ」

気のせいじゃありませんよ。

あなたの姉に殺されかけたんですよ。

だが、これを言うと俺がもう一回殺されかけないので、素直に従う。理不尽すぎて泣けてくるんだけど。

「そうですか。すみませんお姉様が迷惑をかけて……」

「いえ、気にしないでください。これも仕事なので」

一応、警備員らしい言葉遣いで話す。

俺が不法侵入者だとバレるかもしれないし。

「それでは……。ほらお姉様、まだ宿題は終わってませんよ」

俺に謝りの言葉を並べると、依姫は豊姫の手を取る。

「宿題いやー!」

バタバタと反抗するように手足を振るが、そのまま引きずられていく豊姫。

が、何故だろうか。

目に涙をため込んだ、男なら誰でも陥落してしまうような涙目で俺の方を見てくる。

なんだ？ 俺に助けを求めているのか？

つまり、SOSのサインと言っことか。

仕方ない、美人が助けを求めているのだ。

ここで助けなきゃ漢が廢るってやつだ。

とりあえずー爽やかな笑顔で手を振り、豊姫に告げる。

「バイバイ」

「あーん、警備員さんのバカーっ！」

優しくすぎるな俺。ガンディーなんて目じゃないくらいに。

ほんと、ここまで優しくすぎると罪なぐらいだよ。

俺が自分の罪を悔いていると、そのまま膨れっ面で連れてかれる豊

姫。

すると、突然唇に手を当てるようにして考え始める豊姫。

しばらく考えるように唸り、そしてニヤリと邪悪そうな笑みを浮かべる。

なんだ？　なんか嫌な予感がビシビシと肌から伝わってくるんだけど……。

「ねえ依姫、貴女の宿題ってどこまで終わった？」

豊姫からの質問に、一旦進む足が止まる依姫。

「何ですかいきなり。そんなこと言っても写させてあげませんよ」

「違うわよ。そんな事しないって」

朗らかで天真爛漫な笑顔を浮かべる豊姫。誰が見ても思わず微笑んでしまうほどの極上の笑みだった。

だが、俺からして見れば、親の敵を討ち積年の恨みを晴らした復讐者みたいな極悪な笑みだった。

「この間もそんな事言って私のノート写しましたよね」

「え？ そんな事あったっけ？」

どっからどう見ても白々しい演技だった。

「……まあいいですけど。 そうですね、宿題は全体的にして3割ぐらいまでしか終わってませんよ」

「あら、全然終わってないじゃない」

「仕方ないじゃないですか。 あの宿題は変に問題が難しいですし、量もかなり多いし、おまけに教えてくれる人も居ないし……」

「それよー！」

豊姫は今の依姫の言葉になにか裏があったのか、指を指しながら話を転がす。

うん、とりあえず本能の警告に従ってジリジリと気づかれないうつ注意しながら後ろに下がる。

「私達の宿題は難しいよね？」

「それは、まあ、学校自体が優秀ですからね……」

「さらには量も尋常じゃないぐらいに多いー！」

「進学して科目の種類がふえましたからね、当たり前ですね」

うんうん、と依姫の返事が嬉しいのか頷きながら会話を続ける。

少しずつ、俺の頭の中の警報アラートが大きくなっていく。

「極めつけには、その難解な問題を教えてくれる人、ましてや手伝ってくれる人もいない」

「そうですね。お父様は仕事やら家の用事で居ませんし、お母様も付き添いで……………」

依姫の会話は最後の方になると、声の大きさが小さくなっていき、元気がないように見えた。

「そう！つまり私達には宿題の指南役兼雑用役が必要なのよ！」

「そうですか？」

ちよつと困惑する依姫。

あ、なんか分かってきたかも。

「と言うわけで、私はこの警備員を指南役兼雑用役に推薦したいと
ー」

「さらばだっ！！」

「あ！ 逃げた！」

ダツ、と豊姫の言葉を聞くと瞬時に後ろへと振り向き脱兎の如く庭を駆け抜ける。

それはもう、スーパーカー、いや、もはやデロリアン並みの速度でだ。

ちなみに、俺の危機感知能力と逃走力はランクで表すとEXなのだ。

つまり、仕切り直しが何度でも出来る素晴らしい英霊なのだ。

待ちなさい、と可愛らしげに言う豊姫の言葉を背に受けながら俺は豊姫達を置き去りにして、今来た道を逆走する。

さっき下りた廊下にまた上がり、警備員が倒れてる角を通ろうとする。

いつ、いける！！ 今ならハザンダンス〜愛のディスコ〜 ver
ギルガメシュ だって踊れてしまう。

が、

「おかえりー」

「は？」

何故か、庭にいるはずの豊姫が廊下に、しかもとびきり笑顔を浮かべてた。

思わず、ふぬけた声が出てしまった。

「に〜がさ〜ない〜」

そう朗らかに宣言すると同時に、何があったか理解できずに固まっていた俺の腕をがっちり掴む。

いや、此処は廊下じゃない？！

そう感じた瞬間に、自分の周りを急いで見渡す。

すると、よく熟れた桃を飾った桃樹が2本と大きな岩が俺のすぐ隣にあった。

天井も床も無い。

つまり、此処は俺がついさっき居た庭と言うことになる。

は？なに？何があったの？

「ねえねえ、依姫も雑用役が居るのって良いと思わない？」

「それは、そうですが……………」

「ちょ、待って！ 指南役のタグが抜けてる！」

どうやら雑用役がメインだったらしい。

「でも彼は警備員ですし、勝手にそうするのはどうかと。それに屋敷の警備が……………」

「そうだ！ もっと反論しろ！」

依姫の反論に、賛成の意義を加える。

「大丈夫よ。 屋敷の警備員から私達の親衛隊にランクアップするだけだから」

なんか俺の知らない間にジョブチェンジ（職業変更）しているんだが。

「うう、でも……………」

「それに、あなただって少しぐらい楽したいでしょ？ 遊びたいしよ？」

「うう、うう……………」

欲望に飲み込まれているのか、徐々に言葉が弱くなっていく依姫。

「依姫ちゃんよく考えて！ 君のお姉ちゃんは俺を生け贄にしようとしているんだよ！ 悪者なんだよ！」

いわば、ダークサイド 暗黒面の騎士ジェダイなのだ。

ほれほれ、と言わんばかりに依姫をダークサイドに引きずり込もうとする豊姫。

「……………なら、いいです。しちゃいましょう。雑用係」

「依姫ちゃんーんっ?!」

なんて事でしょう。

匠（豊姫）の手により依姫も暗黒面に飲み込まれてしまいました。

バタバタと拘束されてる手を振り払おうと動かすが、びくともしない。

なんだ？ 最近の女性は握力がシャレにならないぐらいに強いんだな。

「そうそう、そこなくっちゃ。じゃあ善は急げって言うし、部屋に戻るつか！」

「はいお姉様！」

ガシツといい笑顔をした依姫に別の腕を掴まれて拘束されてしまう。

「はっ、離してーっ！！」

たまらず悲鳴を上げる俺。

だが、悲しいことに誰も助けしてくれる人は居ない。

「ふんふんふーん」

「なんでー？！！」

俺の絶叫は、澄み渡った青空に吸い込まれるようにして消えてった。

どろぢぢら、彼の歩く道は困難と混沌に満ち溢れているようだ。

桃姉妹に会いに行こう 中編（後書き）

なるべく口調を似せようと小説などを読みあさり、頑張りましたが、筆者の技量が足りずに可笑しいことになってるかもしれませんが、ご了承ください。

そこんところの指摘や改善点など送ってくれたら嬉しいです。

えー、お久しぶりです。クレトスです。

まず、この話を呼んでもらう前に今から書く注意書きをお読みください。

1、綿月姉妹は原作だと純粋な月の民なので、月で生まれるのですが、この話では綿月姉妹は移住する前から生まれており、さらには豊姫と依姫の関係は詳しく言えば姉妹ではなく、なんとも複雑な関係ですが、とてもややこしいので純粋に双子の姉妹と設定しちやいます。

2、読み進めていくと終盤らへんで「は？何これ？」と思うかもしれませんが、気にせず最後まで読み進んでください。キチンと最後のあとがきで疑問点を説明します。

3、最後らへんに、主人公としてあるまじき行為がありますが、気にせず読み進めてください。

4、最後らへんは急いで書き上げたためもしかしたら文章構成が変になってるかもしれませんが、気にせず読み進めてください。

なんとも長つたらしい前書きになってしまいました。どうぞ二万五千字を超える駄文をお楽しみください。

桃姉妹に会いに行こう

後編

《都市 南側 綿月邸》

一日の終わりまであと六時間を切った時間帯。

地上を煌めくように照らす太陽が沈み優しく包み隠すような月光が出て、都市全体を街灯とネオンの看板の灯りだけが支配する。

そんな静かな都市の一角で俺は見つからないよう至極ゆっくりと、しかし急ぐように素早く辺り一帯暗くなった庭に出る。

中腰のまま脚の力をフルに使って庭を疾走し横切り、邸を囲む塀へと近づく。

「自由に、今度こそ、自由に！」

息を荒げながら、希望を心から絞り出すように言葉を発し、塀の壁を蹴り、その反動を上手く利用して三角跳びのように塀をよじ登る。

「今度こそ、俺は自由になるんだああああっ！」

塀から屋敷の外へと向けて、この監獄から脱獄するために、大きく

跳躍する。

その飛翔は余裕で塀を越え、俺の眼下には綺麗に舗装された道路、ゴールが見えた。

が、いきなり周りの景色がぐるんと一変し、辺りが燦々（さんさん）と明るくなった。

「おかえりー」

それと同時に明るく朗らかな女性の声が俺の耳を通る。

「なっ？ ま、まさかっ！」

俺は瞬時に辺りを確認するために視界を移動させる。

気が付くと、何故か綿月邸の部屋の中にいて。

横を向くと、何故か笑顔の豊姫が俺を見てて。

「ちくしょよよよっ！ またかよっ?!」

膝から崩れ落ちながら、俺は豊姫に連れ戻されたという事実を知った。

脱獄は、成功しなかった。

《都市 南側 綿月邸 豊姫の部屋》

「くそっ！ 何故だっ！ 何故逃げれないっ?!」

俺は失敗したという事実には苦惱し、頭を両手でかきむしる。

何故だ？ 《プリズンブレイク》を見ただけではクオリティ的に駄目なのか？

やっぱり《24》ぐらいのハイクオリティじゃなければ成功しないのか？

なんてこった。俺は《バーン・ノウティス》の方が個人的に好きなんだが。

「はいはいお疲れ様。 ねえ真、いい加減に逃げるのを諦めたら？」

と、俺の隣で枕を抱きしめながら布団に座っている豊姫が声をかけ

てくる。

「どうせ真じゃ私の能力からは逃げられないんだから」

「うるせえっ！ ていうかなんだよその能力。 チートだろっ！
反則だろっ！」

さっき話してくれて分かったことだが、この豊姫は《海と山を繋ぐ
程度の能力》と言う《能力》を持っている。

簡単に説明すると、この能力は《空間と空間の点を繋いで移動でき
る》と、一種のワープのようなモノらしい。

ていうか《能力》ってなんだよ。

今までかなりの数の世界を旅してきたけど、こんな世間おっぴら
に《能力》が知れ渡っている世界なんて無かったぞ。

「持っているんだから仕方ないじゃない。 そうゆう真は持ってない
の？」

「持ってねえよ。 もし持ってたら今すぐソリダスぶっ飛ばして俺が
ビックシエル事件を引き起こしてるよ」

そしてスネークを倒し、俺が新しいビックボスとなる。

「意味が分からないよ」

だろうよ。

って言うかさ、《能力》とかマジ羨ましいんだけど。

そりゃあ過去に何度か超能力者とかとは対峙したことはあるけどさ、せいぜい物を浮かべたりするだけで、ここまで反則的な奴は居なかったよ。いや、あれは神道の類だったか？

俺も《探求者の秘宝》と言う無限倉庫は持っているが、あれは《能力》では無く《技能》に分類されるから違う。

《能力》って買えないかな？コンビニとかで普通に売ってないかな？できればプリペイドカードで売って欲しいんだけど。

「いきなり考え事して、どうしたの？」

「いやね、ちょっと 秘密結社ソニー に頼んでみようかなと……」

あの会社のテクノロジーならそのぐらい作れるはず。

「そー？」

キョトンと呆気な表情をする豊姫の言葉を無視し、俺は両手を上げるように肩をすくめる。

「まあそんなくだらない事は置いといてだな、いいか豊姫」

「ん？」

「お前が何故に俺を捕まえてるかは知らんが、残念なことにもう帰宅時間なんだよ。つまりマサラタウンとさよならバイバイしなきゃならないんだよ」

俺は部屋についている時計を指差しながら話し掛ける。

「時間って……まだ6時じゃない。普通はもっと働かない？10時とかまで……」

「それは、あー、あれだよ。今はやりのサマータイムってやつだよ」

「今の季節は春だけど……」

「じゃあスプリングタイムだな」

「じゃあって言うてる時点で駄目じゃない」

豊姫がジト目で睨んでくる。

ちなみに他にもフォーertimeやウインタータイムがあります。

つまり年柄年中、暑い寒い関係無く早く帰ります。

「それに、まだ仕事も半分しか終わって無いじゃない。 残業しなさいよ、残業」

腕を突きだし、攻めるような口調で俺を引き留めようとする。

「仕事って、お前の宿題のことか？はつきり言って全部俺にやらせるのはどうかと思うぞ。 ちっとは依姫ちゃんを見習え」

「えー、だって面倒じゃない。それに、何のための雑用係よ」

「お前な……………」

俺は豊姫の回答に口をヒクヒクと引き付かせながら、手を額に当てて落ち着いて会話を続ける。

「それに、俺は雇われた訳でもボランティアでもなく、お前たち姉妹に無理矢理に連行されたんだが」

「それは…………あれよ。今はやりのヘッドショットってやつよ」

「ヘッドハンティングの間違いだろ。俺の頭撃ち抜いてどうするつもりだよ」

なんだこいつ。俺を殺してスコアでも稼ぐつもりなのか？

俺のキレのある二段つっこみにあははは、と誤魔化すように笑う豊姫。

ちなみにヘッドハンティングとは他の会社から優秀な人材を引き抜く事をさすので、決して人攫い（アダプション）の事ではないのであしからず。

「と、ゆうわけでそろそろ退社したいんですが社長」

なるべく平社員みたいな口調で話す。が、

「だめ、絶対だめ」

ぷっつ、と頬を膨らませそっぽ向いて答える豊姫。

実に可愛らしい反応なのだが、今はその反応に思わず顔をしかめる俺。

だが、そんな鬼畜社長（豊姫）に構わず突っ込んでいくのが平社員（俺）だ。

逆境な立場から格上の存在を倒す。 いいねえ、燃えてくる。

いまこそ、サラリーマン金太郎を全巻読破した実力を見せるとき。

「定時時刻はもうとっくに過ぎていますよ。社員達も働き過ぎで過労死一歩手前なんです!」

演劇のように、舌を滑らかに回し、声高らかに訴えかける。

だが、悲しいことに社員は彼一人しか居ない。

「それでもだめ。社長権限で労働時間は延長します」

「何を言っているのですか社長! そんなの横暴ですよ! 職権乱用もいいところです!」

「じゃあ真の労働時間だけ延長。労働時間は24時間。休み時間無し」

笑顔でとんでもない宣言された。

「ちよ、なんですかそれ! 俺だけ働き過ぎでしょ!?! 1日中働き続けるのですか!?!」

「うん、その通り！」

笑顔のまま親指をぐつと立てる豊姫。

やばい。思考回路が完全にSになつてる。

永琳に続いて第2のサドスティック女王がいやがる。

「え？ 足りないの？ だったら増やー！」

「いやいやいやいや、無理ですからね！ 1日は24時間しかありませんからね！？ 勝手に増やさないでくださいよ！」

「そのぐらい、時間を止めたり遅くしたりとかで何とかしなさいよ」

「平社員にそんなスタンド能力を求めないでください！ ってか、労働基準法に違反するんじゃない？」

「社長権限で労働基準法は廃止！」

「社長すげえな！！マジパネエっす！！！」

社長権限で法を無くすことができるだなんて……………凄すぎる。

「みらいえじいと云うわけで、真は未来永劫いつにこの綿月邸で働き続けてもらいます！」

「平社員から奴隷に格下げされた!？」

皆さーん!ここにデイビーン・ジョーンズが居ますよ!フライング
ダッチマン号のタコ船長が居ますよ!!

「いや、流石に毎日働くと死んじゃいますから社長! 過労死より
も餓死しますから!」

「働けないなら死ねばいいじゃない」

「俺の扱いがとんでもないぐらいに低すぎるっ!」

あの優しそうな表情から一変、汚物を見るかのような目で一瞥され
た。

エリザベス女王の名言が微妙に変わっただけで、ここまで心に棘が
刺さるとは驚きだ。

「つまり真に残された道は働いて過労死するか、食えなくて餓死す
るかどちらか一つです」

なんという究極の魔女裁判!

「どつちにしても死ぬじゃん！ 死んじゃうじゃん！ 俺生き残る道がないんだけど！ ねえ！」

俺は豊姫の魔女裁判に猛反対する。 が、そんなどこ吹く風かの如くに無視する桃色サドスティック女王。

「くううつつ?! いくらDSとDMという悲しい性癖を両方兼ね備えた俺でも、今回はっかしはキツイ!!」

俺の顔には冷や汗がたらたらと浮かんでは顔を伝っていく。

俺はDMな面もあるけど、それは年上のお姉さんとかの場合のみで、年下な娘には基本的にDSなのだ。

つまり、サバナン在住の肉食系男子なのだ。

「ふっ……まさか俺を精神的にここまで追い詰める奴が永琳以外にも居るなんて……、非常に驚いたぜ。 敵ながら見事！」

「なんで褒めてくれるか分からないけど、とりあえずありがとう」

俺は敵に余裕そうに賞賛の言葉を投げかけると、口元をニヒルに吊り上げ笑う。

サド皇女（豊姫）はその反応に若干戸惑いつつも冷静に返事を返す。

「だが、只野仁を超越しせし特命係長である俺を、そうやすやすと下す事が出来んということとその身を持って教えてやるう！」

その言葉と同時に俺はいかにもジョジョらしいポーズをとり、全身を劇画タツチにして構える。

どうやら《史上最強のスタンド使い》と呼ばれた俺の実力を見せる
ときがきたようだ。

俺のスタンドである《祝福された性騎士（ピング・ドラム）》の
力は森羅万象。

何者にも覆せないぜ。

「……………どうやら本気のようなね」

豊姫も俺の本気を悟ったのか、しっかり俺を見据えて、いつでも動
けるような体勢になる。

こういつ時にとる行動はただ一つ！

「三十六計逃げるにしかず！　つまり脱出！」
エクスダス

「あ、また逃げ出したっ！」

俺はさっきまでの言動など何処行った！　と言わんばかりになりふり構わず瞬時に扉を出て脱出を再開する。

豊姫の怒声が俺の背にかかるが、足を出すのは止めない。

俺の逃走劇　第8ラウンド、開始。

「で、けっきょく逃げきれなかったわけですか」

「うん……………無理だった」

居間で荒い息を付きながら横たわっている俺に哀れむような視線を向ける依姫。

「ホント化け物だろ、あの桃娘。俺の逃走が全部失敗したんだぞ、チートだぜ……………」

気が付いたら同じ部屋に戻ってる。

そしていつもそこで捕まる。

まさにピーチマンが倒せない。

「くそっ、E缶さえあれば楽に勝てたのに…………イエローデビルならぬピンクデビルじゃねえか」

「人様の姉を初代ロックマンのラスボスにしないでください。って、そのぐらい何とかして逃げられなかったんですか？」

ちょっと疑問に思ったのか、嫌疑そうな顔して尋ねてくる依姫。

それに対して俺は立ち上がると即座に依姫の肩をガシツとつかみ、センチメンタルな表情で教える。

「実に138回もの逃走を陸海空の経路をフルに使って計ってみたが、全てがあのだ忌々しい桃娘の手によって失敗したんだ。さらには「どうして俺の居場所が分かるの？」と聞いてみたところ、全部が勘でやってみたらいいんだ。あんなカンストしたチート野郎からどうやって逃げきればいいのか教えてくれないかな依姫ちゃん……」

「あ、あはははっ……すみませんでした」

「よろしい」

乾いた笑い声を上げた後に謝る依姫。

俺はその反応に満足したので、肩をつかんでいた手を離し、座布団に座る。

「そこまでされて、お姉様を恨んではないんですか？」

おずおずと控えるようにして疑問を投げかけてくる。

「ん？別に恨んではないぞ。そこそこ楽しかったし、いい感じの仕返しもしたからな」

「仕返し？」

頭に？マークを浮かべてる依姫。俺はさっき淹れたお茶をすすりながら、疑問に答える。

「最後に捕まった後に豊姫の宿題を全てやらされたんだが、その殆どを喧嘩売っているような珍回答にしてやった」

「……………真さんにも突っ込みたいところもありますが、お姉様は何やっているんですか……………」

自分の姉の行動が情けないのか、額に手を当ててうなだれてる。

「あの回答なら、絶対に先生に呼び出されること間違い無し」

「……………ちよっと気になりますね、その珍回答」

「ん、ならば教えてやろう。ほら月夜見って言う奴いたじゃん」

「ええ、確かかなり偉い人でしたよね。授業で習いました」

「その名前を書く問題が出てきたんだが、ちよっとした遊び心でさ、《ラリったDQN野郎》って入れたんだよね」

「……………」

衝撃的すぎてか、口をあんどりと開けたまま動かない依姫。

んだよ、そんなに驚かなくっていいじゃねえかよ。

ほかの回答のほとんどを《ググレカス》と入れてやったんだからさ、少し優しいと思うんだけどね。 自分的には。

「……………ハア、少し…疲れたので、お風呂入ってきますね……………」

「いてら〜」

依姫はそう呟くと頭を抱えながら、ふらふらと壁を伝って部屋を出てった。

俺はそれを見送ると、時計に視線を移し、窓の外を見る。

「もうそろそろ9時になるな。 ん〜、いい加減にここを出ないと駄目だよな……………」

このままのパターンで進むと、読者もびっくり！ まさかのお泊まりイベントに入ってしまう。

俺的には大賛成なのだが、今の俺の置かれてる状況も状況だし、何よりも残念な事にこの小説は15禁だ。

「どうしようかねえ、ホント」

俺は窓に写った完全に暗くなった空を見ながら、打開策を模索する
ように意識を思考の渦に入らせた。

《全体視点

都市

南側

綿月邸

豊姫の部屋》

真が居間で考え事していると同時刻。

今回の事件の首謀者（豊姫）は自分の部屋で今日を振り返っていた。

「ふんふんふん」

豊姫はとても上機嫌に鼻歌を鳴らしながら、軽々しい手際で湯飲み

を取る。

今日はなんて楽しい1日なのだろうか。

さつきからずっとそんな事を考えながら、湯飲みに入った緑茶をすすする。

今日の彼女の機嫌はそれはもう絶好調だった。ホントに、一年に一度あるかないかって言えるぐらいにテンションが上がっていた。

なぜこんなにも今日が楽しいのだろうか。

理由、と言うより原因は豊姫が昼に見つけた彼、つまり藤堂真アルカトラスに係があつた。

最初に彼を見つけた時は、ただの屋敷の警備員だろうと思った。

この屋敷に住んでいる男性といえはお父様だけだし、なによりも服装がこの屋敷の警備員のものであつた。

そして彼を雑用係にしたのも、「そうしたら何かおもしろい事がおきる」と勘が囁いただけ。そう、ただそれだけの理由である。

だから依姫をそそのかして彼を無理矢理に屋敷へと引きずり込んだのだ。

その人攫いとも呼べる行動の結果は大成功、いや予想を遙かに上回った。

依姫と真と一緒に勉強会を開いて、逃げようとした真を能力を使って捕まえて、即興で社長と社員のコントをしたり、また逃げようと

した真を捕まえたり。

真と過ごした時間は1日にも半日にも満たない、ほんの少しの時間だったのに、いつも過ごしている日よりもずっと濃い1日だった。

もし彼が私達の兄だったら、それはもう毎日が楽しくなるだろう。

いや、兄じゃなくて彼氏や恋人のような関係も良いかもしれない。

なんともアバンチュールで可笑しいな妄想だが、想像してみると、途端に頭に甘い感情が溢れ、胸が幸福感で満たされていく。

顔も上気し、自分でも熱くなってることが嫌でもわかった。

そもそも、真と出会ってから間もないのに何故こんなにも幸せな気分になってしまうのか。

さつきも同じ事を考えていたが、どんなに考えてもいくら頭をひねっても、自分が納得するような答は出なかった。

だが、奇怪なことに真と一緒にいると自然と頬が緩み、不思議と心踊ってしまうのだ。

思い返えすと、思わず笑ってしまうほど楽しく、愉快的時間。

これまでに、ずっと感じていた《寂しさ》がスッと一気に薄れていくのを確かに感じた。

何故寂しいと感じているのか。

それは豊姫達の両親、つまり父親と母親が関係していた。

豊姫達の父母はこの国の政治家で、いわゆる《下級》に分類される地位だ。

2人とも仕事場で初めて出会って、お互いを知り、付き合いを重ね、より親密になり、交際を申し出て、そして仲間に祝福されながら結婚した。

そんな仲つつましき夫婦の間に産まれてきたのが豊姫と依姫だ。

もちろん、夫婦は生まれてきた我が子を何よりも愛し、夫は政治家であるのに仕事を休業をして、母は政治家自体を辞めて、幼い姉妹と一緒にいるんな所へと連れて行った。

海や山や、レストラン、デパート。様々な観光地やら遊園地にも行った。

様々な場所で親子4人揃って、恥も外見もなく大はしゃぎした。

毎日がとても楽しく、その帰り道もよく父母と一緒に手をつないで、依姫と場所の取り合いをしながら騒がしく家路についた。

それが、10歳の時の記憶。

それからは毎日が、今までの日常が一変した。

何故なら、父親が休業から復帰し、また政治家として働き出したのだ。

再び政治家となった理由は、今まで働かず休業してたために貯蓄が減った事も理由だが、父親にはそれとは別の考えがあった。

自分の社会的地位を上げよう、と考えたのだ。

この考えは自分の権力をあげたい、金や財産が欲しいなどという黒めいた欲望などは一切なく、ただ単に《娘達に少しでも良い暮らしをして欲しい》とゆう、父親の愛欲心から出てきた考えだった。

その考えには母親も嫌うどころか賛同し、更には父親を手伝だおうとした。

そうして父親は政治家として返り咲き、母親はそのお付き秘書としてまた働き出したのである。

そこから、徐々にだが、親子が面としてふれあう機会が少しずつだが確実に減っていった。

そこまでは良かった。確かに寂しくはあるが我慢できる程度であるし、何より自分達のために働いてくれているのである。

普通の子供なら不満を言うかもしれないが、豊姫と依姫はそこらの子供と比べて頭が良く、達観していた。

が、逆にそれが父母に心配を与えなくしてしまったのである。

社会的地位の向上。

一見、苦勞しそつに見えた計画。

もちろん、そう簡単には事は進まない。それは夫婦共々分かり切っていたし、長い道のりになる事も覚悟して復歸した。

だが幸運なことに、そして不幸なことにその道のりは意外とも簡単だったのだ。

復歸してから二年が経つたある日。 その日に事件が起きた。

国の政治に深く関与している政治家達、総勢75人の汚職が全て公表されたのである。

普通なら権力などを行使して汚職を揉み潰す政治家達。 だが、今回の摘発には多種多様な組織が計画的に準備し、そして何よりも指揮していた人物が天才と唄われてる八意永琳。 勿論敵うわけなく政治家達はマスコミの手によって全てを白昼の元に晒し、一般人にも知れ渡つたのだ。

この事件には政治に大きな衝撃と混乱を与えた。

そして、その混乱に乗じて父は一気に出世し、重要な地位に居着いたのだ。

普段なら絶対に出来ないこと。

だが政治を動かしている地位の殆どが汚職に関与しており、その汚職した者が一気に辞職し、国の機能が一齐にストップしたのだ。

堅実な性格が功をせいし、元々周りからも信頼があったのもせいから、人々から支持されながらも父親は重要な地位に付くことは出来た。

しかし、重役に付いたからと言って安心は出来なかった。

地位固めや、汚職の再発防止。一度停止した国の政治を動かすなどやることは腐るほどあった。

父親も娘達のために、と張り切って仕事に励み、母親も秘書として忙しい父親を必死で手伝った。

最初は娘たちのために、という優しい親心から始めたこの計画。

だが、悲しいことに段々と地位が上がるにつれて権力や金に対する執着心が、父親達2人に芽生えてきた。

精神的にもこの世で人間が一番弱いと言われているのが外傷でもなく病気でもなく、心にかかる《欲望》である。

この世にはアニメや漫画のような、どんな誘惑にも負けずに絶対の信念を貫き通すような人間は居ないのだ。

聖職者だろうが、勇者だろうが関係なく、人間は目の前に「欲望を

満たすなにか」を出されたら必ず心に闇が生じる。

つまり薄汚い執着心とも言うべきか、金に対する《欲望》が2人の心に暗い考えを持たしだしたのだ。

そして最終的には、娘達の存在など頭の奥底に追いやってしまい、変わりに手に入る大金と社会的名誉のことしか、夫婦には頭になかった。

そうして、父母と私達、つまり親子のふれ合いというのが消滅し、親子の絆が無くなっていった。

「……………あっ」

そこで、ふっと我に返った。

時計を見てみると、もう10時を過ぎている。

考え事をしてからかなり時間が経ったのか、手に持っている湯呑みが冷たくなっていった。

暗い事を考えてたせいか、心もしんと冷たくなっていると錯覚するほどに沈んでいた。

「んー、寂しいな」

心を切り替えるために無理に声をだし、冷たくなった湯呑みを机に置き、考えるように腕組みし、そしてパンと腕を叩く。

「そつだ真を呼ぼう。 うんそつしちやおつ」

名案と言わんばかりに顔を笑顔にして、《能力》を使って強制連行しようと考ええる。

自分お得意の勘を頼りに、真が居そうな場所を予測して、その点と自分の部屋の点を繋ぎ、そして

「……………あ、失敗しちゃった」

そう間抜けな声と同時に、彼女は盛大な失敗をした。

本当に、もうかなり厄介な失敗を。

《都市 南側 綿月邸 居間》

「とりあえず、豊姫を殴って気絶させるなり眠らせるかして逃げるか」

俺は主人公として最低な事を考えながら居間でくつろいでた。

もう夜遅いし、もし今日泊まってしまつとこのままずるずると居着いてしまつかもしれないので、去るときはさっぱりと去るほうが何かと都合がいい。

何より、永琳が軍を動かして俺を血眼ちまなこになって探しているのだ。

はつきり言って、マジ怖い。

やベーよ。マジやベーよ、小便ちびるって。

捕まったら絶対にフランケンシュタインに改造されるって。

「さてと、クロロホルム（睡眠薬）を染み込ませたハンカチってしまつて置いたっけか？」

誘拐犯の手口と全く持って同じ事を少女にやろうとしている時点で、この主人公は色々と駄目かもしれない。

と、俺が立ち上がるうとした瞬間、周囲の景色が一変した。

さっきいた畳の敷かれた部屋から、なぜか今度はフローリングみたいなのが敷かれている部屋に座っている。

「はぁ……またかよ」

別段、驚く様子もなかったため息をつく。

これは豊姫の能力によって俺がどこかにワープさせられただけである。もう百回以上もこれを体験したから分かる。

あまり人の許可をとらずにワープさせて欲しくないのだが、豊姫はそんなのを気にもとめないし、何より今回は豊姫本人に用事がある。

った。

ちょうどいいタイミング、と考えたのと同時に後ろで人の気配がした。

俺を呼び出した豊姫本人だろうと思い、声をかけようとして後ろを振り向く。

「ちょうど良かった。豊姫、お前に用事がー」

振り向きざまに声をかけて、後ろを確認して俺はー絶句した。

「……………ふえ？」

「あ、るん……………」

視線の先にある人から発せられたどこか抜けた声と、俺の驚きで尻すぼみになった声がぶつかり合って部屋全体に響く。

そこにはまん丸と目を開き硬直した依姫が一糸纏わぬ姿、つまり裸のまま俺を見つめていた。

「え、ちょ、ん？ なに、ここって風呂場か！？」

俺はいきなりの事態に対して慌ただしく状況確認をする。

見てみると、固まっている依姫の向こうにはシャワーがあり、バスユニットもあり、誰がどう見ても一発で風呂場とわかる光景だった。

「……………」

あまりの事態に頭の回転が追いつかず、石像と化している依姫だが、俺はせっかくの機会なのでまじまじと生まれた姿のままの依姫をしっかりと見る事にした。

シミ一つ無い綺麗な色をした柔肌は、女性独特の優しい色をしており、さつきまで風呂に入っていたせいか、その表面をほんのりと紅く染めており、思わずどきり、としてしまうような美しさを表していた。

さらには、お湯でしっとり濡れた紫髪がたぷんたぷんと、女性らしさの象徴でもある、たわわに実りに実った双山の、その頂点にあるツンとした魅惑の桜色を、見えそうで見えないという、なんとも惜しくて、絶妙なバランスで、その存在を隠している。

「おお……、ビューティホー」

思わず感嘆の声を漏らし、喉をぐくりと鳴らしてしまう。

ポニーテールにし纏めていた髪も、今は黄色のリボンを外して、サラリと腰まで流れるような長髪が湯で濡れた肌にピッタリと張り付いており、それが普段の可愛らしい姿とはまた別の姿、何故か分からないが、どこか妖艶に見えた。

腰つきも雑誌のモデルのようにキュツと締まっており、中に何も詰まっていないのでは、と錯覚するほどにくびれが細く、端から見ても無駄な肉が一切付いて無いことがわかり、ありきたりだがそれこそ陶芸品の壺のような、15歳とは思えないほど美しい形をしている。

そして下腹部より少し下の位置にある、男性なら誰でも憧れる乙女の領域は、少しだがうっすらと茂っており、水に濡れたその光景は思わずぐくりと喉を鳴らすほどみだらに見えてしまい、この女性が少女ではなくなっていくという事を視覚から否が応にでも感じさせられた。

「あ、なっ、ななななななっ!？」

少し時間が経った事によってやっと頭が回りだしたのか、猫のような素早さでバツと近くにあったバスタオルで胸などを隠し、意味不明な言葉の羅列を口から出すと同時に、さっきまで湯気を出し薄赤色だった顔が、熱した鉄のように一気に首筋まで燃えるようになる。

言っちゃ悪いけど、茹でたタコみたいだな、おい。

「なっ、なんで真さんがここにいるのよっ?!」

「それは俺が聞きたい」

俺は澄まし顔で顔色一つ変えずに返事を返す。

まだ混乱から抜け出せていないのか、自分が何一つ身に付けていないのを見て慌ただしくあたふたし、ふと、今の姿勢だと前が丸見えと気付いたのか急いで俺にへと背中を向ける。

すると、今度はぶるん、と小刻みに揺れる小振りで形の整った美尻が俺の視界に入る。

逆桃型をした尻たぶは、水を入れたように瑞々しく、触れたらぴつと指に吸い付くように柔らかさそうで、だけどゴムのように弾けるような弾力もあり、風呂上がりという要因もあってか、男の欲情をそそるように綺麗で、美しく、どこか愛嬌がある桃尻。

さらに、それを引き立てるかのように、すらつと細からず太からずに整い鮮麗された脚は、太股から足先まで一つの線のように伸びており、それが依姫の身体のバランスを妙に目立たせていた。

と、俺の視線に気付いたのか、はたまた尻を丸出ししているのに気付いたのか、あっ、と恥ずかしそうな声を出すと同時にすぐさまバスルームの中に入り、此方からは見えないようにする。

残念。今日のサービスタイムはこれで終了のようだ。

「見たっ?! 見たの!?!」

「見たって、何が?」

扉からひよこりと頭を出し、恥ずかしいという羞恥心と、見られたかも知れないという恐怖からか、思わず声が強張り、強くなる。

「だから、わっ、私の……あのう、その……」

「言っておくが、依姫ちゃんの裸なら下から上まで隅々まで見えたからな」

俺のストレートな言葉に、赤を通り越して紅色になる依姫。

俺はこう言ったことに嘘を付けない純情で、ピュアな男なのだ。

ハートからボディまで、全てがピュア100%で出来ている全身純情少年なのだ。

「あ、ああっ、あああああ」

「愛してる?」

「そんなわけ無いでしょうが、このヘンタイーっ!!」

「きゃーっ!!?」

天を貫かんばかりの依姫の怒声が、狭い風呂場を縦横無尽に駆け回り、耳をつんざけ、俺は思わず女性みtainな悲鳴を上げた。

何故だ、今の返しのどこがけなかったんだ？

今の完璧すぎるやりとりの何処に不備があったのと言っただ。

ほんと、訳が分からないぜ……。

なあ、皆？

綿月邸にて、ここは調理場。

冷蔵庫のほかに、様々な機器が完備されたその部屋に彼の姿があった。

トントントンと、リズミカルに包丁を動かし、まな板に乗った万能ネギを切っていく。

彼は調理用の白衣を身につけているが、よく見ると体中には包帯が幾つも巻かれており、非常に痛々しい姿だった。

「くそうつ、依姫ちゃんの奴。日本刀で滅多刺しにするなんていくら何でも酷すぎるぜ。いてててっ」

体中に走る激痛に、顔を歪ませる。

あの後、あまりの恥ずかしさに錯乱した依姫は、廊下の壁に飾ってあった日本刀で俺を抹殺しにきたのだ。

もちろん逃げたが、地の利がなくて普通に捕まり、人形チャッキー並みに刀で串刺しにされたのだ。

「この俺様のギリシャ彫刻並みの美体に傷を付けやがって……………」

顔がよくてイケメンでナイスガイという三拍子揃った俺じゃなければ死んでたぜ」

危なかった、と風につぶやく真。

だが、顔がよくてイケメンでナイスガイでも、日本刀で何回も刺されたら普通は死ぬのだが、今回はギャグ話なので何の心配もいらない。

と、ちょうどネギを切り終えると同時にガスコンロで炙っていた鰹がいい感じになっていたので、火を止めまな板に移し、包丁で均等に形を崩さず切っていく。

そして切り終えた鰹を、さっき用意した鮪や海老、タコに赤貝と言った海の具材と共に、丼に盛った白米へと見栄えよく並べていく。

ホントは酢飯が良かったのだが、生憎だが作る時間が無く、仕方ないので白米にした。

盛り付けた海鮮の横に干瓢やらイクラを盛り付け、最後にわさびを盛ったら、海鮮丼の出来上がり。

「醤油と小皿とガリと、あ、あとは箸もか」

ちゃっっちゃかと御盆に海鮮丼を三つ並べ、白衣を脱ぎ調理場を出て豊姫の部屋に向かう。

扉を開けると、そこには頭にタンコブがあり涙目な豊姫と、恥ずかしく、面目なさそうに顔を真っ赤に染めうつむいている依姫が居た。

「おら、おつちよこちよい殺人娘と大馬鹿腹黒桃娘、夕飯の時間だぞー」

「うう、おつちよこちよいって……………」

「私、腹黒くなんかないし、馬鹿じゃないもん」

依姫はさっきの行動に反省しているのか、素直に受け止めて、豊姫は不満があるのかなんと俺に口答えしてきた。

まあ、俺はとてつもなく優しくすぎるのが長所であり特徴でもあるので、ニコツと爽やかな笑みを浮かべると豊姫の頭を優しく撫でるように手を置き、そしてーフルパワーで握り締めた。

「あ、痛い痛い痛いっ！！ 止めてっ、頭が陥没しちゃうよおっ！！」

「人に大怪我さしといて、あまつさえその怪我人に夕飯を作らせている奴の事を馬鹿呼ばわりして何が悪いんだ、ええ、おい？」

「でも私馬鹿じゃ、痛たたたたっ！！ 分かりましたっ！ 私は馬鹿です！ 大馬鹿ですっ！ だから手を離してっ！！」

陸に揚げられた海老みたいにびくんびくん跳ねている豊姫。

その姿は思わず笑ってしまう姿だったが、いい加減うるさくなってきたので素直に手を離す。

俺はとりあえず席につき、自分の分の海鮮丼を口の中にかきこむ。

すると、豊姫依姫も海鮮丼を取り、パクパクと喰っていく。

やっぱり酢飯じゃないから具と合わないな、これ。

少し話を混じりながらも、丼を食い終わり、締めとして渋茶を飲む。

ふうっ、と一息ついたところで、改めて豊姫を見据える。

「なあ、豊姫」

「んー、なに？」

間延びした声でお茶をすすりながら返事を返す豊姫。

「俺、ホントもういい加減にマジで帰りたいんだけど。時間も11時だし、眠いし痛いし」

「あ、確かにもう夜遅いですし、そろそろ帰った方が良いですね」

「ええっ？帰っちゃうのっ？！ダメよ！！」

上が依姫で、下が豊姫。

依姫ちゃんは俺が帰るのに賛成だが、豊姫は猛烈に反対している。

「ダメよって……、言っておくけど俺は無理矢理でも絶対に帰るからな。お前らの相手で疲れたし」

「そんなっ、酷い。酷すぎるわっ?! 一体私達が何をしたって言うのよっ!?!」

「誘拐されて、膨大な量の宿題をやらされた上に、刀でぶっ刺されただけど、俺」

人間国宝たる俺の体を刺しやがって……。

なんだ、串に刺して焼き鳥にでもするつもりだったのか?

モモか? ねぎまか? はたまた砂肝か?

どうせ炭火でおいしく焼いちゃうつもりだったんだろ!!

くそっ! 俺は生のままが一番美味しいのにつ!!

「うっつ、確かに悪かったけど帰るのはダメよ……。ん! そうだ!?!」

一瞬うなだれたかと思ったら、ぴんと跳ね起き、名案だとばかりに顔を輝かせる豊姫。

ポケットから何かを取り出すと、俺に見せつけるようにそれを突き出す。

それは、黒いケースに収められたトランプだった。

「トランプで正々堂々勝負して、帰るか帰らないか決めましょう！」

「やだ、めんどい、たるい、眠い」

意気揚々な豊姫に対して、俺は冷酷に答える。

眠いんだからよう、頭を使う遊びは勘弁してくれや。

せめてさあ、脱衣麻雀とかこう、激しく男の欲を引き立てるような奴にしてくれよな。

みんなも脱衣が良いよね？

着衣プレイよりも裸プレイの方が燃えるよね？

まあ、縄で拘束しちゃうSMプレイでも俺は全然構わないけどさ。

「そんな頭ごなしに断らなくてもいいじゃない。ただのトランプなんだし」

「まじ勘弁してくれよ。たりーんだよ」

ぐでっ、と机に寄りかかりながら答える。

ダメだ。モチベーションやテンションが著しく上がらない。

が、そんな俺に構わず会話を続ける豊姫。

「ルールは簡単。私と依姫と真の三人に別れて大富豪をやる、ただそれだけ。革命ありのジャックバツク、八切りもあり。縛りも有効」

「あー、めんどい」

「連続5回で私達が勝ったら、真は今日家に帰らせないで綿月邸にお泊まり。真が5回連続で勝ったら帰っていいわよ。あと真はそれだけだとつまらないからー」

「だから、たるいんだって」

「ー真が勝つことに依姫が服を一枚脱ぐでどう!」

「お姉様っ?!」

目をひん剥いて驚く依姫。

だが、豊姫はそんな事構わずに指をピンと立てながら俺の回答を待つ。

だが、もちろんの事に猛烈に反対する依姫。

「ちょっと、何バカなこと言ってるんですか!？」

「バカつて、なにが？」

「なにが？ じゃありませんよっ!! どうして私が脱がなきゃならないんですか?!」

「え？ だつて真に裸を見せたし、ちょうど良いかな、って」

「ちょうど良くありませんよ!! 誰が喜んで脱がなきゃならないんですかっ!! 真さんも何か言ってくださいよっ!!」

顔を真っ赤にして叫んでいる依姫が俺に助けを求めてくる。

俺はその声に対応するように、豊姫の見て、叱りつける。

「豊姫、そこまでして俺を引き留めようとしてくれるのは嬉しいが、幾らなんでも女性を脱がすのはどうかと思っぞ」

「ひひひひひめんなぞ……」

反省したのか、しゅんとうなだれる豊姫。

俺はその反応に満足したので、優しくうんうんと頷くと、言葉を続ける。

「まったく……、仕方ないな、今回だけだぞ。ほら、早く席に着け」

「真……うんっ！　ありがとうっ！」

「真さんっ?!」

何処からかこの世の終わりみたいに悲壮な叫びが聞こえるが、そんな事など無視しつつ俺はトランプをよく切り、三人分に分ける。

「来いよ豊姫。俺が直々にあられもない姿に引っ剥がしてやんよ（依姫をね）」

「ちよ、お願いだから待ってー」

俺は余裕そうに顔をニヤリと歪ませ、トランプを手に取り、

「来なさい真。私は最後の一枚になるまで（依姫がだよ）この戦争を続けるわよ」

「頼みますから、話をー」

豊姫は目に決意を宿し、俺を見据えながらトランプを並べる。

「ふっ、ふええええええん?!」

こうして、漢達の永遠の欲望を賭けた、壮大なるジハード（聖戦）の幕が切って降ろされた。

「……………疲れた、ぜ」

俺はがつくんがつくん、ふらふらと危なっかしい足取りで廊下を進んでいく。

時間を確認すると、もう夜中の一時。

「あー、ダメだ。　睡魔がハイテンションになって集団で襲って来やがるぜ」

重くなったまぶたを必至に開け、薄暗くなった廊下を亀のように進んでいく。

ジハード（性戦）の結果は、なんとも奇妙な事に引き分けとなった。俺と豊姫による激しい一進一退の攻防は、的確に依姫の服を追い詰め、勝利を重ね、一枚ずつ衣服を剥がしていき、裸まであと一歩と言ったところまで行ったが、恥ずかしさやその他諸々の感情が爆発し、またもや暴走。

楽しいトランプから一変、日本刀を持った下着姿の依姫から逃げるといふ、なんともクロックタワーなゲームに様変わりしてしまった。

「んー、やっぱり軽いな。女ってなんでこんなに軽いんだ？」

その言葉をこぼすと同時に、自分が今抱えている女性、まあ、眠っている依姫なんだが。

走り回って疲れたのか、あの逃走劇が終わったなら二人とも糸が切れたようにパタリと眠ってしまったのだ。

豊姫の部屋は近くにあったので良かったが、依姫の部屋は少し離れてるのでこうしてわざわざ運んでいるのだ。

と、そう思っていると依姫の部屋が視界に入り、そそくさと扉を開け中に入る。

すでに敷かれていた布団ー家政婦さんがやったのかーに依姫を寝かせて毛布をかぶせ、確認したところで部屋を出る。

ふと、廊下の窓から月が見えた。

身を乗り出して見てみると、あたりには眩しいぐらいに星が瞬き、その中央には快々しく黄金の月がでかかと居座っている。

ああ、そういえばこんな景色、どこかで見たことがあるな。

深く考えるように模索してーいや、考えるまでもない。

この綺麗な光景は今でも記憶にはっきりと覚えている。

俺が「元居た世界」の時、こんな風に黒蒼い色をした夜空の下で、ただっ広い草原の中で、俺と「彼女」の2人つきりで、寝転びながら、こんな綺麗なお月様を拝んで、虫が奏でる薄かな音を聴いていた。

もう千年以上も昔の事だが、今でも昨日のことのように鮮明に思い返せる。

「彼女」は俺の根本であり、「彼女」が俺の唯一の支えで、「彼女」こそ俺の全てであり、「彼女」だけが俺の家族だった。

そう大切な記憶を思い返そうとして――思い返すのをやめた。

ダメだ。今考えると雰囲気のせいもあるが、本当に泣いてしまっかもしれない。

男が泣くなんてみっともないし、何より「彼女」が泣くのを嫌った。

「……………早く、帰りたいな」

いつか、帰れるだろうか？

残念だが、俺には分からない。

だが、俺は諦めない。

戦争だろうとなんだだろうと関係ない。全ての世界を乗り切ってみせ

る。

捨て台詞みたいな言葉を吐くと、俺は考えるのを止め窓から離れる。

そして、これからどうしようか迷い、とりあえず立ち止まってみる。

「もう移動するのもかったるいし、めんどいし、もう仕方ないから今日はここに泊まるか」

この世の建築物は全て俺に所有権があるから、何ら問題はない。

そう決めると俺は、臃気な足取りで暗くなった居間へと進んでいった。

「んんっ…………、ふああ」

目を覚ますと、縁側にいた。

起き上がり周りを見回してみると、隣には依姫ちゃんが茶をすすつており、庭では豊姫がまた桃を採っていた。

ああそつだ。ピーチパイを作つて食べたあとに眠かつたから昼寝したんだっけな。

そつ寝ぼけた思考を働かせていると、俺が起きたことに気づいたのか茶を置き依姫が声をかけてきた。

「おはようございます、真さん」

「おはようさん依姫ちゃん」

「真ーっ!」

と、庭の方から大量の桃を腕に抱えた豊姫が駆け寄ってくる。

「ねえ、昼寝したんだからもつ元気よね？ だつたらもう一回トラ

ンプやりましょうよ」

「なんだ、また依姫でも脱がすのか。　　言っておくけど今度は下着まで脱がすからな」

「なんで私が!？」

寝たことによつて頭が休めたから、今の俺は切れ切れの最強状態だ。今すぐにでも相手の服を引つ剥がす恐怖のピンク・ターミネターになれるぜ。

「頑張つて、依姫!」

「頑張りませんっ!　　なんでまた脱がされなきゃならないんですかっ!」

ギャーギャーと姉妹仲良く戯れているのを見ながら、依姫の茶を勝手に貰う。

飲みながら、まだ若干寝ぼけている頭を覚ますために縁側から起き上がり、よく整備された庭の風情ある景色を視界に写す。

実を付けて鮮やかに色づく二本の桃樹。

どこか神々しさを引き出す大岩。

形良い丸石を幾学的に並べた石敷。

扉にいる赤青の珍妙な服を着た永琳。

周りを縁取る、形良い植木の数々。

美しく、鮮麗された景色が俺の意識を覚醒させる。

「うっっ！今日も1日頑張っ……うっ？」

俺の元気ある声が、最後の方になると疑問を弾き出すように尻つばみになる。

あつれえ？ おかしいな。

いま、庭の中に何か変なのが混じってたよっ……。

気のせいかな？

目を何回も擦り、もう一度よく庭の景色を注視する。

深緑と薄赤が織りなす美しい色をした桃樹。

四角く、形よく切り出された蒼色の奇岩。

川の流れのような雰囲気をあしらった石川。

俺をしつかり見て、手を振り微笑みかけてくる狂気のマッドサイエ
ンティスト 八意永琳 ¥(^o^) /

「つて永琳iiiiiiiiいんっ?!」

「ふえ、なにになに?」

「ん、どうしたの?」

ハンマーでフルスイングしたような鋭い衝撃とともに瞬時に脳が覚
醒して、喉から有らん限りの悲鳴とも絶叫ともとれる叫びがでる。

おいおいおいっ?! ヤバいやバいやバい!! ホント、マジで色
々と危険でヤバすぎる!!

頭の中でアラートがガンガン鳴り響き、身体から汗が流れる。

永琳から逃げるために俺は即座に辺りを見回し、逃走経路及び脱出
地点を探す。

「あら? 何処行くのかしら、真?」

が、それよりも先に永琳の凜と透き通った声がそこそこ離れた距離

にいる俺の耳に入り込んでくる。

拡声器でも使っているのかその腹に響き渡る地獄の呪いのような言葉はしっかり聞け、その魔音を聞いた瞬間、不可視の手に直接背骨をぐわっと掴まれたかのように自分の意志に反して足が止まる。

錆びたブリキ人形のような音を出しながら首を永琳の方へと向けると、それはもう絶好の笑みを浮かべながら彼女は口を開いた。

「もう、妻が挨拶したんだから夫であるあなたも挨拶を返さなきゃダメでしょ」

「あ、ああ……………、よう永琳。一日ぶりだな」

「それは違うわね。まだ離れてから1日は経っていないわ。正確に言えば23時54分31秒ね」

正

ホント、ダメな人なんだから。

そう優しく子どもを叱りつけるように柔らかな笑みを浮かべる永琳。

だが、その言動と反するように俺の堅牢な《精神》が、ガンガン泥のように容易に削り取られていく。

胸の動悸が激しくなる。腹の底を持ってかれたように下腹部が熱くなる。

「どうしたの真？　ってあの女性は誰？」

「お客様ですか？」

ひよこり、と綿月姉妹が俺の横に表れる。2人とも永琳の方を見て誰だろうか？と疑問符を頭上に浮かべている。

永琳も2人に気づいたのか、ぺこりと頭を下げると礼儀正しく自己紹介を始める。

「始めまして、私の名前は八意永琳。いきなり押しかけてしまつて非礼を詫びるわ」

「あ、ご丁寧にどうも。綿月豊姫です。……………八意？」

「私の名前は綿月依姫と言います。綿月豊姫の妹です」

三人とも自己紹介をし終える。

豊姫はどこか心当たりがあるのか、帽子に手を当てながら唸っている。

その間に逃げようとしたが、永琳の視線は一秒とも俺から離れず、逃がさないように牽制している。

はっきり言って、目が怖い。

鼬を狙う鷹、まさしく猛禽類の眼をして俺を見ている。

「ところで、この屋敷に一体何用ですか？」

考えて動かない豊姫に代わって依姫が永琳にへと質問を出す。

永琳はそんな質問にも顔を一切変えず、質問の返信をする。

「ええ、用って言うほどのモノじゃないんだけどね。ただちょっと……」

「ちょっと？」

永琳は少し間を空けると、何事もなかったように口を開く。

「ただ、脱走した夫（俺）を連れ戻しに来ただけよ」

「くそっ！ どこから突っ込んでいいのかわからねえ！！」

永琳のバカな発言に、俺は頭に手を当て叫ぶ。

今すぐ否定の言葉をあげようとして――誰かに袖を引っ張られた。

誰だろうと思いつつその方向へと振り返ってみると、そこには、鷲のよ

うな鋭い目つきをした豊姫が、こちらを見ていた。

「ねえ、今《夫》という単語が聞こえたんだけど。私の気のせい？ ねえ」

力が強すぎて、俺の袖がビリビリと断末魔をあげている。

「いや、俺結婚してないし。ってかお前も眼が猛禽類になってんぞ」

なぜそんな事を聞いてくるか分からないが、とりあえず真実を話す。が、いま豊姫の頭の中では光の速度で妄想が流れているのか、いきなり顔を赤くしたかと思ったら、また青くなり、またまた顔が赤くなり、なんと目に涙を溜め込み、潤んだ瞳で俺を非難するような言葉を投げかけてきた。

「そんなっ、酷いっ！ 私と付き合っていないながら、実は結婚して妻帯者なんて……………、私のことは遊びだったの！！」

「は？」

俺のなんとも間抜けな声を無視しながら、豊姫の妄想暴走は続く。

「私の淡い乙女心を弄ぶだけ弄んでっ、本妻が来たらすぐにポイするなんて最低っ!!! 変態っ!!! ロリコンっ!!!」

「バカっ、誰がロリコンだ！ そりゃあホント、偶に、月に一回ぐらいに反応するけどさ！ ヤっちゃうのは色々と性を持て余して魔が差した時くらいだよっ!!! 色々と溜まって魔が差して可愛かったらヤっちゃうかもしれないけど、まだやってねーよっ!!!」

俺は急いで色々アウトな否定の言葉を並べる。

しかし、変態と言うことを否定してないのは、少なからず自覚しているせいなのか。

よくわからないが、真と豊姫のえせ痴話喧嘩はヒートアップし、会話の内容が最低な方向へと進んでいき、徐々にクライマックスへと近付いて、そして豊姫は爆弾発言をかましてきた。

ホント、もう、核爆弾なみの爆弾を。

「だから、俺は結婚してなー」

「昨日だって風呂上がり依姫の裸を覗いたり、一緒に依姫の服を無理やり剥がしたのに、それも嘘だったのねっ!!!」

「お前マジで何言ってくれてんのおおおおお!?」

合ってるよ！確かに合ってるけどさ！

話し方が最低すぎる！そして此処にいるメンバーが悪すぎるっ！

俺は脊髓反射で、神速の速さで豊姫の口を塞ぐ。

が、時すでに遅し。

自分の背後からーまあ永琳がいる方向なんだがー何やら黒い気配が滝のような激しさで俺にぶつかってくる。

後ろを振り返ってみると、そこには天使と般若と仁王像を混ぜ合わせたような極上の笑みを浮かべた永琳が、ピタリと一切動かないまま、俺を見据えていた。

心なしか、さっきの猛禽類を彷彿とさせる目から、暗く底なし沼のような混沌とした目になっている。

そして、どこか早口で、どこかゆっくりと感じれるように、その口を開いた。

「……………妻である私をほったらかしにしていると思ったら、まさか若い子と浮気をしているなんてね。ホント、驚いたわ」

「いや、まで永琳。よく聞いてくれ。これは違うんだ」

俺はゆらりと幽鬼のような気配を纏った永琳に静止のみ言葉をかける。

ていうか、なんで結婚してない俺が、こんな浮気現場を取り押さえられた夫みたいな言葉を言っているんだろうか。

理不尽すぎて泣けてくるんだけど。

そんな俺の心境などいざ知らず、永琳は会話を続ける。

「浮気者に対する《対応》と言うのは、一度もされたことがないから私はあまりわからないけどね。でもね、どんな《罰》ならしいいか、私はよく分かるわ」

「ま、まて永琳。だから誤解だと言ってーおい待て。その取り出した通信機はなんだ！」

「ピッ 私よ、プランFで実行しなさい。ええ、構わないわ。予定通り作戦を開始して」

「今何と連絡を取った！？ 作戦って一体なんだ？！ お前は何しようとしてるんだ！！」

会話の内容を聞き、いやな予感がしたので通信機を取り上げようとした瞬間、永琳の後ろの扉から帯銃した大量の兵士がなだれ込んできた。

そして兵士達は一斉に銃口を俺へと向けーヤバいつ？！

状況を確認した瞬間、俺はすぐさま豊姫と依姫の腰に手を回し、庭

にある唯一の障害物となる大岩へと滑り込む。

それと同時に、俺の後を追うように弾丸が砂ぼこりを立てながら地面に傷跡を残す。

「キヤーンッ!!!」

「え、何何何!!! いったい何なのよっ!!!」

「いいから口閉じて隠れてろっ!」

いきなりの事態にただただ悲鳴を上げる姉妹達を無視し、俺はいつも腰に差しているFNファイブセブン（ハンドガン）を抜き取り、高速で襲い来る弾丸に当たらないよう祈りつつ岩場の陰から狙い撃つ。

いかにも重厚そうなヘルメットを被っておりケブラーヘルメットを貫くファイブセブンでも貫通するか分からないので一番狙いやすい体にサイトを定めて、トリガーを絞る。

甲高い発砲音が鳴り響いて、それと同時に狙っていた兵士が腹を支えるようにして崩れ落ちる。

その兵士を横目で見ながら、また別の兵士に照準を付け、弾丸を叩き込む。

見ると、血も流しておらず肩が上下しており、そして驚くことにそのままゆらゆらと立ち上がり……やがった?!

……この銃さ、200m先のレベル3-Aのボディーマーさえ
撃ち抜くんだけどよ。

ここからあいつまでの距離って100mもないよね？

近いよね？近距離だよな？

それを防ぐだなんてどんだけハイスペックな装備してんだよ。

っていつかさ、なんで二日連続で兵士と撃ち合わなくちゃならない
んだよ。

しかも今度はハイスペックな装備で身を固めた奴だし。

ダメだ。勝てる気がしない。

ライトマシンガンを取り出してぶっ放せばボディーマーを貫通し
て勝てるかもしれないが、数に圧倒的の差があり俺が殺られてしま
う。

とりあえず、一旦白旗でも振って負けを認め、攻撃をやめさせて、
その隙をついて逃げるか。

降伏を申し出ようとし岩から出ようとした時、弾幕が止み兵士達の
会話が聞こえた。

疑問に思い、耳を澄ましてそれを聞いてみる。

「隊長見てください。あの野郎、美女二人といちゃいちゃしていませんぜ」

「ああ、我らが女神である永琳様もたぶらかし、あるうことか他の美女までに手を出すとは………生かしてはおけないな。全人類のため」

「抹殺すべきですね。今すぐに」

「スコップは準備してあります、サー！」

「埋めるのにちょうど良い場所が郊外にあります、サー！」

「死体を運搬する車両も手配しました。準備万端です、サー！」

「よし、とつとあの腐れ者を亡き者にして埋めに行くぞ」

「……ウーラーッ!」「」

ダメだ。俺を殺すき満々だし、あいつらがあまりにも馬鹿すぎて俺を抹殺したあとの手順さえ完璧すぎる。

「ちくしよーッ!… てめえらのせいぞろーっ!…!」

「ええっ?! どうして私達に銃を向けるのよっ?! 敵はあつちでしょ!」

「っていつか、それ本物では?! どこから出したんですか!」

「るせえっ! おまえ等が可愛すぎるからおれがこんな目にッ!

絶対に仕返しして「撃てっ!」「うっお?!」

感情熱くなり、頭を岩から出したところをヒュンと弾丸が俺の頬を掠り、タラリと血が滲み出る。

すぐさま頭を引っ込め、カバーショットをしながら脳を働かし、如何にして此処から脱出するか経路を図る。

家はダメ。待ち伏せの可能性が高いし、身を隠す障害物が少なすぎる。

塀を越えるのも……ダメだ。壁を上っている最中にいい感じな蜂の巣にされちまう。

後の逃げ道はーっどうしよう。無いんだけど。

バンバンと音速の弾丸が後ろにある大岩に当たり、着弾音を響かしている。

万事休すか?

なんとも苦々しい顔で空を見上げる。

ああ、鳥のように空を飛べたらな。そしたら今すぐ此処からバイバイ出来るのに。

そう思うと、あきらめの感情が心を支配し、思わず泣きそうにーならず、天啓が下る。

空、そら………そつだ空だ！

考えついたら即座に、上空を眺める。

見ると、支援ヘリも航空機の類は一切飛んでいない。

………まあ、飛んでたらチャンチャラ可笑しいけどね。

たった一人に対してガンシップなんか要請されたら多分、いや絶対俺死んじゃうから。

逃走経路を決定したら、俺はすぐさま道具の準備をする。

「えーと、緊急脱出用のバルーンとそれをつなぎ止めるフックと、簡易パラシュートを取り出して、つと」

「え？ それ何処から出したの??」

「企業秘密、だっ！」

《探求者の秘宝》を展開し、後ろに近づいてきた兵士の太ももを打

ち抜きつつ、必要なモノを一式取り出す。

それをサクサク体に取り付けて、最後にバルーンを腰と胴体に巻き付け、安全確認をする。

はっきり言うところのバルーンは使いたくなかったが、今俺が死にかけているし、何より撃たれて死ぬかバルーンの衝撃で失神して墜落死するか賭けてみようと思う。

と、片手で安全確認してもう片手で兵士を撃ち抜いている俺に、涙目の依姫が耳を塞ぎながら大声で質問してきた。

「ちよつとっ！　なんであの女性は真さんを攻撃してくるんです、キヤアツ?!」

「ああっ？　知らん!!」

「知らないって何ですか！　真さんはあの女性と結婚してるんですよ!!　夫ならばそのくらい分からないんですか?!」

「わからねえよっ!!　第一にあんなサドスティック星から来た女王なんかと結婚してねえよ!!」

とりあえず、永琳はこの星の人間では無いと思われる。

俺の推測だと、サイヤ人の親戚あたりの存在のはず。

「あ、思い出した！ 八意永琳って、天才医師で科学者でこの国で
すごく偉い人じゃないっ！！」

「ええっ?! 真さん、あなたは何て人に出したんですかっ！
」

「出してねえよっ!! 出そうと思ったけど理性でなんとか踏みと
どまってんだよっ!! それに攻撃してきてるのは豊姫が変なこと
を言ったからだろっ!! なんかして詫びるやこの桃娘!!」

「アレに対してどうやって詫びればいいのかよっ!?!」

俺の左右にいる依姫と豊姫で喧嘩していると、また横から兵士が来
たので、今度はそいつの腕にサイトを付け、撃つ。

そこで遊底がホールドオープンし、機関部が露出され、弾が切れた
事を知らせる。

その弾切れしたファイブセブンを手から放し、《探求者の秘宝》か
らもう一丁新しいのを取り出して、安全装置を外し、また引き金を
引く。

そこで、身に付けている装置の確認が終わり、脱出する準備が整う。

あとはこのロープを引けば、腹部に付けたバルーンに特殊な気体が
注入され、強烈な衝撃と共に一気に空中まで引き上げてくれるのだ
が、その前にやるのが1つある。

くるりと俺の右にいる豊姫の方を向く。

豊姫はキヤーキヤー叫びながら耳を塞いでおり、どうやら錯乱しているようだ。

まあ、いきなり自分ちの庭で銃撃戦が起こったら誰でもそうなるわな。

俺は何回かこんな状況があったから驚かないけど。

が、今そんなことはどうだっていい。

とりあえず、今回の永琳に言った言葉とかその他諸々についての仕返しをしなければ。

元々、この姉妹に会おうとしたのも、エッチな事をしようとしたのが目的だしな。

俺の格言は《有言実行》だからな。必ずやらなければならない。

皆もそつちが良いよね？

このまま普通に脱出よりも、そうゆう展開の方が需要あると思うんだけど。

ホントはベッドでキャットファイトしたがったが状況が状況だし、まあ、キスぐらいで勘弁してやるか。

そう考えを纏めると、俺はファイブセブンを地面に置き、逃げられないようガシッと両手で豊姫の小顔を挟む。

「え？ 何、どうしたの？」

「真、何やってんですか？」

「えー、状況がヤバいし命の危険があるので手早く済ませますね」

「は？ 何を手早くー」

豊姫の疑問の言葉を待たずして、素早く俺は自分の唇と豊姫の唇を合わせる。

スポンジのようにふわりと柔らかく、だけどキチンとした弾力があり、なんとも言えないような瑞々しく矛盾した感触が、唇を通して脳へと伝わってくる。

その麻薬のような刺激に、病み付きになるような快楽に、思わず唇を押し付ける力を強めてしまい、さらに強まった弾力を唇全体で楽しむ。

美女の初めての口付けを奪う。

その背徳感に思わず背中がぞくりと震え、感情が熱く昂ってくる。

突然の行動に驚愕しているのか、豊姫は目をまん丸と見開き、硬直

して反抗さえしてこない。依姫も石像と化していた。

あ、ついでなんで舌も挿れちゃいますね。

俺は本人の許可を得ずに、自分の舌を前進させ豊姫の口内へと侵入させる。

意外とすんなり入り、生暖かい豊姫の口の中を軟体生物のように上に下に、右に左、なんの味もしない唾液と唾液をネチャネチャと混ぜ合わせる。意味のないことだが、その行動自体が、俺の心を揺さぶるように刺激する。攻めてきた舌を、無防備な舌と絡ませるその行為に酔いつつも内頬をなぞるようにじっくり這い交わせ、縦横無尽に小さい蜜壺を征服するかのように舐め回す。

時間にして十秒ぐらいか、そろそろヤバいのでぶはあ、と塞いでいた唇を離す。

又ルリ、とさつきまで唾液と絡み合っていた舌が、なんとも淫らかな感触を残しつつもゆっくりと解除され、その行為の跡を示すかのようにつと舌と舌に銀の橋が架かる。

その快樂に心を浸していると、後ろから足跡が複数聞こえてきて、目の前にいる豊姫も少しずつだが現状を理解してきている。

そろそろ時間だな。

そう判断した俺はすぐさま緊急脱出用のバルーンの作動ロープを引く。

ボンッ！ と気体が入り大きく膨らんだバルーンを衝撃で離れない

ようじつかりと掴む。

「……………え？ ふええええっ!？」

と、意識が覚醒したのか、腑抜けた声を上げながら何をされたのか理解した豊姫の顔が急激に青くなった。

それを確認すると、俺は片手を使い豊姫の頭を撫でるように乗せると、グイッと顔を近づけ、しっかりと聞こえるよう宣言するよつに言葉を発する。

「いいか、俺がお前の初めてのキスを奪った男だ。この顔をよく覚えておけよ」

ニヤリと俺は不適そうに口角を吊り上げらせ、顔を歪ませる。

その言葉に反応するように、青白かった豊姫の顔が元に戻り、それと代わるようにゆっくりと頬を赤く染める。

そして蚊の鳴くような小さい声で「……………はい」と恥ずかしそうに返事を返した。

それを聞くと同時にバルーンに引っ張られるように空へと急浮上し、地面から高速で離れる。

下から依姫の怒声が聞こえてくるが、俺は遙か上空にいたので大丈夫

夫だし、兵士達の銃弾も当たらない。

まさに、もう何も怖くない。

結構な高度まで上昇したのか、空気が薄くなり、綿月邸がそれなりに小さく見える。

「うし、じゃあ降下するのでしょうか」

なかなかの高度だが、元アメリカ空軍特殊作戦軍団“SOC”隊員である俺にしてみれば簡単なことである。

HALO（高高度降下低高度傘 10000m上空からの降下）を100回以上も繰り返してきたのだ。格が違う。

そろそろバルーンを外してパラシュートを開こうかと思い、後ろを振り向いてみるとー遠くからハイヤーみたいな戦闘機がものすごい速度で此方へと迫ってくるのが見えた。

……え？ まじ？ キスした罰が戦闘機とかマジであり得ないよ。

こんなのって無えよ、神様。

桃姉妹に会いに行こう

後編（後書き）

はい、長ったらしい駄文をよんでくださいます、心から感謝です。
では、みなさん少なからずが疑問に思った点。

今回の永琳の行動について簡単に説明します。

夫が浮気したから射殺。

普通はあり得ません。

皆様も「ちょ、おま、ありえねー」と思いましたよね？

はい。何度も言いますが普通はあり得ません。

では何故こうしたのか？

はっきり言えば、伏線です。

種明かしをしたくてたまらないですが、そうしちゃいますとつまらなくなってしまうし、何より後々の盛り上がりには欠けるので詳細は言えませんが、つまり、伏線なのです。

そんなこんななギャグ回でしたが、次回はバトル編になります。

バトルと言いますが、《能力が目覚めてチートの化身になる》なんて事にはなりません。

主人公である彼らしく、外道な手を使って、非道な手段で殺していくだけです。

それでは、次回をお楽しみに。

永琳からの頼み事はー……え？ バトルロワイヤル？（前書き）

はい、お久しぶりです。クレトスです。

今回からやっとバトル編にへと入ります。

バトル編はだいたい2、3話にしようと考えております。

えー、あと最後らへんはかなりえーりんさんがぶっ飛んでおりますが、気にしないでください。

それでも、始まるよーっ！

永琳からの頼み事はー！……………え？ バトルロワイヤル？

東方転生旅人録、前回までの3つの出来事！

1つ、永琳の罠にかかった藤堂真（本当の名前はアルカトラズ）は嫉妬に狂った永琳の《受けたら爆死するお注射》を注射される寸前、大天使ルシフェルの手引きにより辛うじて危機を脱出。軍事施設から逃げることに成功した！

2つ、永琳の追っ手から逃げる途中、偶然見つけた屋敷に身を隠した真。だが、そこで見かけた美人姉妹「綿月依姫」「綿月豊姫」に強制的に指南役兼雑用係に任命され屋敷の中へと連行されてしまった！？

3つ、脱衣トランプとかをやりながら綿月邸で一日過ごした真。しかし次の日の朝に永琳に見つかってしまった。豊姫の誤解発言にまともや嫉妬に狂う永琳。永琳の部下に射殺されかけた真はお詫びとして豊姫の《ファーストキス》を強引に奪うと遙か上空へと脱出したのであった……………。

《都市 東側 とある倉庫前》

此処は都市の東側にある商業地区。

都市でも一番多くの会社が大小関わらずこの地区に集まっており、
経済の発展の中心地として日々巡るましく市場が動いている。

そんな騒がしい地区のひとときわ喧騒の激しい倉庫の前に、ひとりの

男の姿があつた。

その男はすすで薄汚れた作業着を着ており、倉庫の中にある大きな箱を複数重ねて持ち、倉庫の外に停まっているトラックの荷台へと何度も運んでいく。

しばらくしてその作業を続け、やっと一仕事終えたのか、彼は額の汗を首にかけてタオルで拭いながら近くにある休憩所の中へと入り、ポットに淹れてある水をがぶ飲みしていく。

「真くん、お疲れ様」

「あ、社長」

腰掛けている彼の後ろから、同じような作業着を着た、体型のふくよかな中年の男が声をかけてきた。

「いやー、ほんとごめんね」

「？何がですか？」

「ああ、本来新入りである真くんこんな激しい業務はさせたくないんだけどね……。今は慢性的に人手が足りなくてね、ごめんね」

「いえ、新人なんですし頑張らなくちゃいけませんから」

彼は社長の謝罪の言葉に謙虚そうに返事を返すと、またポットから水を出し、働いて渴いた喉にへと流しこむ。

すると、社長はその言葉が嬉しかったのかバシバシと笑いながら彼の背中を叩くと労いの言葉をかけ、また倉庫の中へと入っていった。彼は叩かれて痺れている背中をさすりつつも、ふと自分はなぜ運送会社で働いているのかと思い、振り返るようにして過去を思い返した。

前回のえーりん襲撃事件から2ヶ月が経った。

あの後、何とかして永琳の追っ手から逃れた俺は、見つからないよう人の出入りが激しい東側の商業地区に潜った。

まさか脱出した後、遙か上空で戦闘機とガチでタイマン張っていたところに重装備の攻撃ヘリが編隊を組んでやって来たので、久し振りに死ぬかと思った。

三機だよ三機。おかしすぎるだろ。

そして、その勝敗の行方は、なんとも予想外なことに勝利したのは俺だった。

勝因は、素晴らしいぐらいの根性で攻撃へりを無理矢理に乗っ取り、ミサイルで攻撃してくるハリヤーみたいな戦闘機を《探求者の秘宝》からステインガーをぶっ放して墜落させたのが主な理由だろう。

我ながら、恐ろしいぐらいに気迫せまっていた。

たぶん、ステインガーミサイル連続10発が効いたんだと思う。

前回の事件は俺の今までの行動を見ていた神様が「お前少し自重しろ」と言いたかったのだろう。

だから、あんな冥界の刺客ネーりんなんかを俺に送り込んできたのだ。そうだが、絶対そうに違いない。

ふと、今までの行動を省みてみると確かに沢山の悪事を働いていた。路上のチンピラ共から財布を抜き取ったり、国のコンピューターに侵入してデータを横流ししたり、豊姫のファーストキスを奪ったりなど、大小様々な悪事を星の数ほどやってきた。

あの時の俺は、少しだけやんちゃなガキだったのだと思う。

世の中がよく分からず、混乱していただけだったのだ。

だが、今の俺は違う。いわばニュー俺。

これからはいい子な模範生として心機一転、新しい職場で頑張っていこうと思っている。

幸い、職場の同僚達も良い奴だし、社長も少し押しが弱いが優しく気さくな人だ。

こう思うと、随分恵まれた職場環境なのだろう。

人生をやり直すには、とても良いスタートだ。

そんな事を考えていると、休憩してからそれなりに時間が経った。

新入りの最初の一年は、バリバリ文句を言わずに働けと、誰かが言っていた。

だから俺もそれに習い、生真面目に働くでしょう。

そう固く決意し、休憩所の席を立つ。

「すみません」

と、心の中で意思表示していたところで後ろから声をかけられた。

誰だろうか、職場の人間か??と思いつつも後ろを振り返る。

すると、そこには黒いスーツにビッチリと身を固めサングラスを掛

けた黒人が立っていた。

「あなたが藤堂真ですね？」

「人違いです」

神速の速さでボブ（俺命名）の言葉を拒否をする。

自分でもびっくりするぐらいに早口だった。

「……………いや、あなたが藤堂真さんではー」

「俺はそんな名前じゃありません。俺の名前はジャック・バウアーです」

俺はあんな老け顔ではないし、ICUに所属してもないのだが、知名度はそのぐらいあるから何ら問題ないだろう。

「ええ？ でも写真と顔が全くもって同じなんだが……………」

そう言うとボブは胸ポケットから一枚の写真を取り出し、俺に見せてくる。

確かに、そこには俺の顔がでかでかと綺麗に鮮明に映し出されている

た。

それを見て俺は、なんとも凄いことに顔色一つ変えずホント白々しい言葉をボブに投げかけた。

「あー、いや、これ俺のそっくりさんですね、ええ。だって俺はもっと顔が良くてイケメンでナイスガイですから」

「…………でも、どっからどう見ても同じー」

「他人のそら似って奴じゃないですかね？俺の近所の人も全員、これと全くもって同じ顔をしてましたからね。俺の遺伝子のパターンがよくある奴ですからそのせいですよ、きっと」

自分で言っというてなんだが、遺伝子とは99.9%が全ての人間は同じであり、残りの0.1%で個性が決まるのだが、それまでが同じとするともはやそれはクローンである。

それに、自分とクリソツなクローンがたくさん近所に居たらマジ怖い。

どこのスターウォーズだよ。

「うっむ、そうか。だったら人違いか？」

俺の返答に手を顎に当てて考えるように唸るボブ。

だが、俺の頭の中ではさっきからけたましいぐらいに警報アラートが鳴り響いている。

ヤバい。こんなCIAやFBIに居そうな服装してる時点でもヤバいが、これは別の意味でヤバい。

この黒人、絶対に永琳の手下だ。見ただけで分かる。

ボブには何食わぬ顔をして接してはいるが、俺の心の中では冷や汗がたらたら、それこそナイアガラナイアガラの滝のように流れている。

まさか、俺の居場所がもう永琳にバレたのか？

早い、早すぎる。身を隠してからまだ二ヶ月しかたっていないのにもう見つかったのか。

このままだと、絶対にろくでもなさそうな事態になる。

色々と考えたいことがあるが、その前にここから逃げなければ。

急いで思考を働かせ判断を下すと、俺はボブへと再び話し掛ける。

「あ。そういえば新しく入った新人くんが写真と全くもって同じ顔してましたね」

「なに、本当か？」

「ええ、なんなら確認のために会ってみますか？ たぶん今なら倉

庫の中に居ると思いますよ」

「ん、そうか。協力に感謝する」

ボブは俺に礼を言つと、身を翻し倉庫の中へと進んでいく。

すると、ボブの視界がそれた瞬間に俺はすぐさまこの場から離れるため全力で外へと走り出した。

「ん？ おいつ貴様！ 待てっ！！」

が、足音のせいでバレたのか、走り出してからすぐに後ろからボブの怒声が聞こえ、振り返ってみるとこちらを指して走ってくるボブの姿が映る。

それでも気にせず俺は走りつづける。

「待てと言っているだろうが、このボンクラ！！」

「誰がボンクラだ、このっ馬鹿っ！！ B級映画に出てきそうな黒人面しやがって！！ バイオハザードのゾンビ役として次回作に出演してるやっ！！」

「なんだと！？俺はただのゾンビ役なんかつとまらんぞっ！！」

大きな声で罵り合いをしながら、倉庫を囲んでいたフェンスを跳び超え、外へと出る。

くそっ、名前もないモブキャラのくせに頑張るな！

「だったらラクーンシティにでも行ってリッカーでもタイラントでも何でもやってろや！！俺は主人公として出演するからっ！！」

「何い、ふざけるなっ！貴様みたいな精神的に最低野郎にあの崇高なミラジヨボビッチの座が務まるかっ！！私に変われっ！！私にこそふさわしいっ！！」

「てめえこそざけんな！お前みたいなモブキャラはウエスカーに瞬殺されるのがお似合いなんだよ！！とつとと殺られて主人公たる俺とビッチ（決してエロい意味でない）の愛の踏み台になりやがれ！！」

なんとも低レベルでお馬鹿な会話だが、その間にも徐々にだが俺とボブの距離が縮んでいく。

あの野郎、特別な訓練でも積んでんのかスーツのくせにバカ速え。

このままではいずれ捕まってしまう。

焦りながらも逃げ道を模索していると、少し先の道端にいたって普通のゴミ箱が視界に入った。

それを発見した俺はすぐさまゴミ箱を後ろへと脚で蹴り飛ばし、ボ

ブの通行妨害を図る。

中身にあるゴミを撒き散らしながら跳ね転ぶゴミ箱。

だが、そんな状況を一瞥するとボブはフツと余裕そうな笑みを作り、更にスピードを上げ、そのままゴミ箱へと突っ込んでいきー跳躍した。

「ハッ！ 学生時代にハードル走を鍛えに鍛え上げついに《ハードル王子》と呼ばれた私のフォームを舐めるなつぶほえっば?!」

あぎゃああああ、となんとの間抜けな悲鳴を上げて地面を転がっていくボブ。

なぜなら、ボブが飛んだ瞬間に俺はあらかじめとっておいたゴミ箱の蓋をアイツの顔面へと投げつけたからだ。

見事なぐらいにヒットしたゴミ箱の蓋は、急所に当たったのかボブはピクリとも動かない。

空中だと動けないから逃げられないよね？

俺は男には基本的に容赦ないので、別に何とも思わないのだ。

「ふはははっ！ てめえは惨めにゴミとフュージョンしてるのがお似合いだぜっ!!! ハリウッド主人公の座はこの俺様のものーっばらげっ!!!」

主人公らしくカツコ良く決めようとした瞬間、体と頭にとんでもないぐらいの衝撃が襲いかかり、なんとも間抜けな声と共にそのまま地面に勢いよく倒れる俺。

今ので脳震盪でも起こしたのか、頭がぐらんぐらんと地震でも起きたのかと錯覚するぐらいに脳が激しく揺れている。

おぼつかない目を必死にこらえて前を見てみると、そこにはどでかい看板が建っており、どうやらそれに当たったようだ。

まあ、前見ないで全力疾走すればそうなるわな。

「ぐっ、この英雄たる俺が！ か、看板ごときにやられるだっ
？」

三流の敵役みたいな台詞を言うと激しい脳の揺れに耐えきれず意識が朦朧とし、そして糸切れた人形みたいにパタリと倒れた。

主人公として、なんともアレなやられ方だった。

《都市 西側 とある会場にある車の中》

場所が変わって、ここは西側のとある地区。

都市から遠く離れ、都市をぐるりと囲む防壁のすぐ側にあるこの地区。

辺りにはトタンやら木やら何かよく分からないもので出来たボロ屋が幾つにも何重にも建てられており、科学が発展し栄かを誇るこの都市とは何とも真逆で廃れた場所。

この地区はそれは昔、都市の周りから来た人間たちが当時の都市管理者に中に入れてもらえず、仕方なしに都市の近くに自分達で材料を調達し勝手に住み着いたのが始まりだった。

以降、半世紀以上もの間そこには人々が集まり、その治安の悪さもあってか犯罪者達のがさばるブラックタウンとなり、それを危険視

した国がしばらく後にそこに住んでる人々は都市へと受け入れられた際、その地区ごと都市の中に入れられたのだ。

今では時間が経ち誰一人とも住んでおらず、その衛生面の悪さから都市の人々は誰も近付いて来なくなり、一種のゴーストタウンとなっていた。

そんな寂れた地区に、なんとも場所違いなことに何台も的高级車が入り交じるように停まっていた。

その高級車の中の一台中、またまた奇妙なことに三人の女性の姿があった。

「あー、八意様？」

「あら、何かしら依姫？」

車の中では依姫と向かいになる形で永琳が座っており、その依姫の隣に豊姫が座っている。

話し掛けた依姫は一瞬言いにくそうに口を余どすが、意を決したように顔を上げ苦笑いを浮かべながら目の前にいる人物へと質問を続ける。

「なんで私達、ここにいらっしゃるんですか？」

「秘密よ、秘密」

ふふふつ、と愛想笑いとも本当の笑顔とも取れる玉のような笑みを浮かべる永琳。

だが、本日7回とも連続で同じ回答に思わず依姫は額に手を当てしまった。

はてさて、何故に学生である綿月姉妹が八意永琳と一緒に此処にいるのか？

それは、永琳が彼女達を朝早くに車で拉致したのが原因だった。

姉妹が学校へ行こうと屋敷を出た瞬間、あらかじめスタンバイしていた車が彼女達を囲んで永琳の手下が車の中へと放り込みそのまま走り出す。

法に真つ向から喧嘩売るような所業を永琳はやってのけたのだった。

もちろん依姫も豊姫も拉致されて喜ぶわけもなく、最初は逃げようと抵抗した。

だが、相手は国でかなり偉い人だ。もし、万が一にでもなにか粗相でもしてかしたら大変なことになる。

さらには、相手は浮気しただけで夫（主人公）を射殺しかけるような人間だ。

つまり、権力者よろしく絶対に逆らえない状況なのだ。

「八意様」

「何かしら」

と、依姫が悲観に明け暮れていた所に、車の窓から黒スーツで身を纏めた大男が永琳に話し掛ける。

一言二言会話すると男は車から離れていき、永琳も肩をはたき軽く身支度を整えから、自身のトレードマークである赤青医師帽子を頭にかぶり、車から外にでる。

依姫と豊姫も否が応なしにそれに続き、中から外に出ると永琳の後ろを追うようについて行く。

進みながら周りを見てみると、この地区では不思議なぐらいに綺麗でよく整備された場所で、いかにもセレブな人や高級そうなスーツに身を包んだ男女がそれぞれ集まっては自分の見栄話とどうでもいような世話をしており、そこは自分達にとってなんとも場違いな場所に思えた。

さらには、何故こんなにも偉い人たちが、こんな荒んだ場所に集まっているのか。口には出さずとも、それも依姫と豊姫は疑問に思っていた。

そそくさと三人はパーティー会場みたいな場所を抜けると、そのま

ま近くにある二階建ての建物へと入って行く。

中には幾つか扉があり、永琳は迷わず階段を上り二階の奥にある扉へと進んでいき、部屋の中に入る。

自分達も入っていいのかと、少し迷いもしたが、残っても仕方ないので若干遅れながら依姫達も続いて部屋の中へと入る。

すると――

「よお永琳。久し振りにあってなんだが一発殴らせてくれないか？」

「いやん、会っていきなりSMプレイ？ 昼から激しいわね」

――その部屋の中には永琳の胸ぐらを掴み上げ殴りかかろうとしている藤堂真の姿があった。

「よお永琳。 久し振りにあつてなんだが一発殴らせてくれないか？」

「いやん、会っていきなりSMプレイ？ 昼から激しいわね」

あらかじめ部屋でスタンバイしていた俺は、永琳が扉を開けた瞬間にこちらへと引き寄せ、胸ぐらを掴み上げた。

だが、そんな暴力的な行動に対して、体を横によじらせ頬をほんのり赤く染める永琳。

なんとも変なポーズで気色悪いことこの上ないのだが、今はこの馬鹿を殴ることが最優先なので、気にせず殴ろうと判断。

そう思い、握り締めた拳を振りかぶろうとしてー

「ちょ、出会い頭に何やってるんですか!？」

誰かに腕を掴まれてしまった。かなり強く握られたせいで、その隙に永琳は俺の拘束から離れる。

誰だろうと思い後ろを振り向いてみると、なんと依姫が俺の腕を握っていた。

「やあ、依姫ちゃん。さっそくですまないんだけどその腕放してくれる?」

「ダメですよ! 何さらりと女性を殴ろうとしてるんですか!」

「依姫ちゃん、それは違うよ。こいつは女性の前に第一級殺人犯だからなんの問題は無いん。法で裁けない罪を裁くのが俺の役目なんだよ」

「なに、キラみたいなこと言ってるんですか! 問題大ありですよ!」

とても不本意だが、依姫の激しい抵抗にあつたので仕方なしにとりあえず殴るのは先延ばしにしておいた。

態勢を直し、いつものようにぐでつとしたポーズになりながらも依姫と永琳を交互に見る。

すると、乱れた服を正した永琳が近づいてきてジロジロと見ながら俺に話しかけてくる。

「ふう、一応動けないように真の監視役として何人か人をつけたんだけど………一体どこに行ったのかしら?」

「んー？ ああ、あの黒スーツの野郎達のことか？ あいつらならボコして端っこにひとまとめにしてあるけど」

俺は部屋の端っこを指差しながら返事を返す。

そこには、何故か顔面だけが痣あざやタンコブで原型がつかないぐらいにボコボコにされた男達がジエンガのように規則正しく長方形に組まれていた。

「人が気絶から復活して目を開けたら不細工面がモアイのように並んでたからな、思わず殴り倒しちまったじゃねえかよ」

「……………あまり人の護衛をボコボコに殴らないで欲しいわね」

「この人達全員を真さんが1人でやっただんですか……………」

俺の仕業に呆れてる永琳と驚く依姫。

目が覚めて瞳を開けた瞬間、不細工な男の面が目の前にあったら誰だってそうするよね？

人の目覚めを汚した罰として素直に受け取ってくれや。

「ん？ てゆうか、なんで依姫ちゃんが永琳と一緒にここに居るの？ 学校は？ 今日は平日だろ」

えーりんがここに居るのはよしとして、学生である依姫がここに居るのはとても可笑しいことだ。

それを尋ねると、依姫はなんとも言い難いような顔をすると、口を淀らせながら答えた。

「それが……実は学校に行く途中に2人そろって八意様に誘拐されまして……」

「ふーん、依姫ちゃん達もそうなのか、俺と全くもって同じじゃないか。奇遇だな。ほんと、誰がやったのか気になりすぎて今すぐそいつをぶん殴りたいよこんちくしょう」

俺は張本人である澄まし顔した誰かさんを睨みつつ嫌みを言う。

と、そこでふと誰かが足りないことに気づく。

「……………あれ？ 依姫ちゃんがいるんだろ。そしたら姉妹セットで豊姫がいるはずだが……………」

あのお気楽天然娘が居ないことに気づき部屋の中をよく見回してみる。

が、いくら探してみても部屋の中には俺と依姫と永琳の三人しかい

ない。

どこだ？あのピーチマンはどこにいやがる？

前はアイテム二号が無かったから負けたが、今度は大丈夫だ。

不思議に思って探していると、俺の隣にいる永琳がある場所を指をさしながら口を開く。

「あなたがお探しの豊姫なら部屋の外にいるわよ」

「外お？ そりゃあ、なんで部屋に入ってこないんだ？」

疑問に思い、扉をジッと見つめる。

何故だろうと不思議に思っていると、不意に怒りとも何ともとれる気配と視線が横から感じた。

その方向に振り向いてみると、怒ってはいるが、しかしなんとも言えない顔で不機嫌に唸っている依姫がいた。

「フーッ！」

「おいおい猫のように唸って……どうしたんだい依姫ちゃん？」

俺的には依姫はネコミミよりイヌミミのほうが似合いそうなのでイ

又派だと思っていたのだが、違うのか？

もしかしたら、ウサミミの方が似合うのか？

どっちだ？ネコミミかイヌミミ？はたまたウサミミ？

是非とも確認のために一度付けさせて欲しいものだ。もちろん写真撮影付きで。

すると、唸っている依姫の代わりに永琳が説明するかのように口を開く。

「そうね……………まあ、依姫が唸るのも無理はないわね」

「？何故に？」

「……………そうね、口で説明するよりも会ってみたほうが分かるんじゃないかしら。あなたはそんなに鈍くないし」

「ん？」

永琳の言葉に頭に？マークが浮かぶ俺。

考えでもって仕方ないの恨みがましい視線から逃げるようにでてく
てく歩いていき、扉を開けて外へと出てみる。

すると――

「あつ……………」

「ーそこには、なんともおかしなポーズで壁に聞き耳を立ててる豊姫がいた。

がちやりと何食わぬ顔で扉から出てきた俺に気づくと、一瞬間抜けた声を上げると瞬時に顔を朱く染め、恥じるように、まるで俺から逃げ隠れたい事を示すように頭に被っている帽子を急いで深く被り直した。

あれ？なんか前回会ったときと態度が違うような……………、気のせい
か？

豊姫の不思議な行動に疑問を持ちつつも、このままだと会話が転ばないので俺はとりあえず話を進めることにした。

「んー、久し振りだな豊姫」

「……………うん、久し振りね」

ゆっくりとだが、はにかみながら確かに返事をする豊姫。

その時浮かべた華のような笑みに、思わず胸がドキリとなる。

「前に会ったのが、確か二ヶ月前だから……それっきりだったな」

「っ！？　そ、そうね。　それっきりね、確か」

二ヶ月前と言う単語を聞いた瞬間、肩をびくりと上げる。顔、と言うよりも肌全体が朱く染めあげられてくぐらいに過剰反応する豊姫。

その後もどことなくぎこちない会話が幾つも続く。

一見、俺を遠ざけているようにも見える。

が、何かが決定的に違う。

嫌悪感とか悪い感情ではなく、こっ………恋愛感や恋い焦がれる感じがする。

俺が豊姫の様子を事細かに観察していると、何故か不思議なことにその帽子の隙間から俺の様子を伺うようにちらちら、と見て短く熱っぽいため息をつく豊姫。

その間から伺える目は少しだけ涙で潤んでおり、指先もきゅっと力んでいるのがここからでもよく分かる。

その姿は、恋している男性を目の前にしている乙女の反応だった。

あー、なるほどなるほど。つまり、そうゆう事ね。理解したよ。

「すまん豊姫。少し込み入った用事があるからまた後でな」

「え……でも、」

「大丈夫、あとで時間を取るから。　　そん時にゆっくり話そうぜ」

「……………ん。　　わかったわよ」

しよぼーんと肩を落とす豊姫を宥めつつ、一旦会話を打ち切る。

じゃあ用事があるからと片手を振り寂しがる彼女を尻目に部屋の中に戻る。

「……………（ジーン）」

戻った途端、俺を突き刺すような視線で見ってくる依姫と俺をまるで品定めするかのようじろじろ舐め回す視線を送る永琳。

俺はひとまず襟など服装を整え、こちらをじっと見つめてくる永琳と依姫を手で制し、落ち着くように一呼吸入る。

そして宣言するようにはっきりと大声かつ澄まし顔で原因を皆に教える。

「あれ完全に惚れてんな、俺に」

「一体誰のせいだと思ってるんですかあああああ!？」

豊姫の可笑しい原因を言った瞬間、駿足で依姫が俺の胸ぐらを掴み上げ、前後に激しく揺さぶる。

気分は少しだけだが、電動こけしのようだった。

俺は依姫の暴力に悲鳴を上げつつも、落ち着いて反論の言葉を投げつける。

「おいおい依姫、落ち着けよ。 純粋な乙女が甘酸っぱい初恋をしているんだぜ？ ここは妹として、いや同じ女として応援して後押ししてやるべきなんじゃないのか？」

「その純粋な乙女のファーストキスを強引に奪った奴に恋してるんですよ!？ 同じ女として応援できる訳ないですか!！」

さらにぐわんぐわんと、前後に激しく振れる俺。

依姫の正論に対して俺はなんともだらけた感じで反対を述べる。

「んだよ、そんなどうでも良いようなちっちゃい事忘れるよな。」

この世には強姦から始まる恋愛があるかもしれないんだぞ？ それに比べたらとってもビューティフルでワンダフルな事じゃないか」

「強姦（レ プ）から始まる恋愛がある訳ないでしょうがっ！ 乙女の初めてのキス奪っておいてなんとも思わないの？！」

「んー、別にいい。 はっきり言ってなんとも思わない！。 強いて言うなら「やーりい、美少女ゲットだぜ！」ぐらいしか……………」

「どこまで最低なんですか？！」

「外道な主人公でどうもすいません」

へらへら笑いながら謝る俺。

なんとも人を馬鹿にした態度だった。

「お姉様が真さんに恋してからとゆうもの、化粧をし始めるわモデル雑誌を熟読するわ、美容を気にするわ……………。それに、ここ最近で可愛い服やしつ、下着だって二倍近くの量になってきてるんですからねっ！？ どうやって責任取ってくれるんですか！！」

「へー、そうなのか。 あ、下着の色なら黒か白が好ましいな。出来ればアダルトチックな露出の多い大人向けの奴ね」

「そうゆう事を聞いてるわけでは有りませんっ！！ 一体どんな思考回路してるんですか！？」

世界が回っているのでは？と感じるぐらいの錯覚が俺を襲いかかる。そういえばこの前に、携帯のアプリで「脳内メーカー」をやってみたらさ、頭の中全部《H》で埋め尽くされていたな！。

まあ、確かに自分の性格を省みたら否定はできないけどさあ、あんな時は悲しかったな。

思わず、首を吊りそうになったよ。

「なんて言うか、もっと、こう、罪悪感とかは無いんですか?!」

「すまんっ！ お、俺がダビデ像を遙かに超越するイケメンで格好良すぎたせいでこんな事に……。ああ、なんて罪深いんだ、俺は」

「うっ、うっ、うがーっ!?!」

俺は自らを悔やむよう両手で肩を抱きしめ頭を小刻みに振り、悲観の言葉を並べる。

俺があまりにもナイスガイで優しすぎて英雄だからこそ、こんな事になってしまったんだろう。

ほんと、つくづく罪づくりな男だぜ。

ここまでくると「七つの大罪」に俺の格好良さを加えるべきではな

いのだろうか？

そうだ絶対にそうするべきだ。

今度ルシフェルに頼んでみようかな？

と、俺が自分の罪を悔やんでいる途中に永琳が前に進み出る。

「ねえ、そろそろいいかしら？」

「ああ、何？ 今電動こけしになってるから忙しいんだけど」

そついや、こいつに連れてこられた事すっかり忘れてたよ。

俺を誘拐するなんて、何かしら用があるのだろう。

「実はね真、あなたに1つお願いがあるのよ」

「お願いって………最初に言っておくが新薬の実験体なんかにはぜつてーならないかな！」

逆らうような言葉を並べ、攻撃態勢を取る。

あの時の「受けたら爆発するお注射」の恐怖は今でも身に染み着いている。

ルシフェルが時間を止めてくれなかったら俺死んでたし。

「あら、大丈夫よ。今回は新薬とかそうゆう怪しい実験の類は無
いから」

「……………本当にか？」

「ええ、本当よ」

「マジで？ 実験薬とか無し？」

「もう、そんなに怖がらなくてもいいじゃない」

片手を横に振りながら朗らかに笑う永琳。

その綺麗な笑みに思わずだが、俺もそれに釣られるように少しだけ
口角を上げ、同調するように笑う。

「そうかそうか。それなら安心だな」

「ええ、とつても安全よ」

「まあ、頼みごとの内容にもよるけど、ひとまず聞いてみようか」

そう言うと、永琳はふふふっと玉のような笑顔で妖艶に笑い、何一
つ躊躇ためらうことなく頼み事の内容を言ってきた。

「真、今からあなたには殺し合いをしてもらいます」

「そつか殺し合いかー……………は？」

「……………ほえ？」

永琳の頼み事に、俺と依姫は間抜けた声を上げる。

え？何？こいつ今なんて言ったの？

確か……………殺し合いだっけ？

「あら？ 私が言ったこと、聞こえなかったの？」

「いや、聞こえたのは聞こえたんだが、少し内容がおかしいような……………」

俺の聞き間違いだよな？そっだよな？

祈るように否定の言葉を心の中で何度も復唱する。

「もう、耳でも遠くなったのかしら？ もう一度私の身体検査でも受ける？」

「あつ、ああ。出来れば今すぐそうしたいな。「殺し合い」とか聞こえちゃって………ちょっと耳がおかしくなつたみたいだから………」

思わず顔に手を当て、冷や汗を垂らしながら天井を見上げてしまう。
頼み事が殺し合いなんて、そんな、ねえ？

漫画みたいな展開なんて、有るわけ無いじゃんか。

「大丈夫。あなたの耳は何もおかしくなんてないわよ」

「え？」

と、俺の呟きを聞いた瞬間、永琳は呟きに対して否定の言葉を述べる。

「え、いや、でも冗談でしょ？」

「そっ、そうですよっ。「冗談ですよねっ」？」

2人して永琳にへと苦笑いを浮かべる。

すると、永琳ははあ、とため息を吐くと俺の腕を掴む。

「そう、じゃあアレを見てもあなたはまだ冗談だと言えるかしら」

そう言うと永琳は俺を部屋についている窓の前まで引っ張っていき、アレと言うの指差し、見せる。

指差す方向の先には、思い思いの装備で身を固めた傭兵、いや装備品の一部が統一されているのでどこかの軍隊だろうと思われる集団がいた。

あー、まさか、マジ？

「さてと、もう一度言っわね」

窓の外に見入っている俺の背後にピタリと抱きついてきた永琳の凜として透き通った声が、流れるようにして俺の耳へ浸透する。

それを聞くと同時に、いやな予感が頭を支配し、後ろへとゆっくり振り返る。

「真、あなたは11人の兵士を引き連れる隊長として、今から36人の敵を殲滅してもらいます」

そこには、一目見ただけでそのまま吸い込まれてしまうような、絶世の美笑を浮かべた悪魔が居た。

永琳からの頼み事はー……………え？ バトルロワイヤル？（後書き）

はい、長ったらしい駄文を読んでくださりありがとうございます。

えーりんさんがかなりぶっ飛んでますが、いつものことなのでご理解ください。

まだまだ序章なので詳しいことは次回になるので、どこか腑に落ちなくても気にせず次回お待ちください。

では、また今度お会いしましょう。

バトルロワイヤルなんかに参加したくない 前編（前書き）

はい、お久しぶりです。クレトスです。
ちゃんと生きていますよ。

今回は戦闘編に入る前の導入話的な感じで書いていたんですが、書いていた結果、総文字数が18000を超えてしまう事態になりました。どうしてこうなった？

とりあえず、この話は2回に分けて投稿します。

前編はギャグやらが主な内容で、後篇に本題が始まります。

本当は一緒に投稿したほうが文脈的にもいいんですが、そうすると私のほうがてんてこ舞いになってしまうので、許してください。

そんなこんなな11話。

ゆっくりしてってね！

いつもどおりにキャラの性格がぶっ飛んでますが、寛大な心でこの駄作を見てください。マジでお願いします。

バトルロワイヤルなんかに参加したくない 前編

前回までのあらすじ

永琳に捕まったらなんかバトルロワイヤルに参加しろと言われた

何故こんなへんぴなで廃れた場所に政治家やら大手企業家などといった都市でも有力な権力者達が大勢いるのか？　まずはそこから説明しよう。

常識的に考えて、ここに集まってる皆さんは社交パーティーなどという洒落た事をしに此処に集まった訳ではない。

するならもつといい場所が山ほどある。高層ビル最上階のペントハウスや繁華街にある大型ダンスホール、なんならそこの安っぽい運動ホールでもいい。　とりあえずこんな場所よりましなところ幾つでもある。

なら、何故？

何故にこの人々はここに集まっているのか？

それは今から開催される、ある《ゲーム》を見にきたからだ。

「12人と36人の訓練された兵士を一カ所に集め、本物の銃を使わせて行われる殲滅戦」

正式な呼び名はないが、呼び名が無くとも最低な催し物だと言うことは見ただけで分かるものだった。

つまりは此処に集まった人たちは全員、人と人、兵士と兵士撃ち合い、殺し合うのを嬉々として見に来てるのだ。

人間というのはホント不思議なことに、自分たちの周りが平和になると大かれ小かれ何かしらの《刺激》というのを求めるものだ。

平和ボケとでも言うべきか、エンターテイメントを求めているのか。何はともあれこの日常を昂らせる推進剤が欲しいのだろう。

わかりやすい例を出すなら、殴り合いをするボクシングや技を掛けたり掛けられたりするプロレスなどがあるだろう。

二つとも安全のために幾らかの制限やルールがあるが、それはただ日常では絶対に得られない《暴力》と言う名の外部的な刺激がある。

確かに命の危険はある。が、このぐらいならある程度安全性もあるし、なにより国も民衆娯楽として正式に認めてもいる。

だが、金の集まった権力者とは何とも言えない事に、ある程度安全性のある規制された《刺激》より、それ以上の命の危険性のある《刺激》を求めるのだ。

食生活の基準みたいと同じで一度その味を知ってしまうと、なかなかその基準を維持して落とせないように、その刺激を一度でも体験した権力者達は「ゲーム」に病み付きとなり、こぞってそれを見ようと集まってくる。

麻薬みたいに、どこか中毒性でもあるのだろうか。

「つまり、今までの話を簡単に纏めると永琳は俺に金持ち達のくだらない道楽に命を懸けて参加しろって事だなあ、おい？」

「ええ、まったくもってその通りよ」

「んー、そうかいそうかい」

その言葉を聞いた俺は、今の心境を表すように顔に手を当て上を向く。

さっきから何一つ変わらない態勢のまま、声色一つ変えずに話す永琳。

思わずだが、自嘲気味にはははっ、弱気に笑ってしまう。

「と、言うわけで今すぐ戦場へLet's Go!!」

「んなわけあるかああああああっ!？」

その場違いな掛け声を聞いた瞬間、俺は我慢の限界を超え思いっきり腹の底から声を張り上げる。

間違いない。この女

――確実に俺を殺しにかかってきてきやがる。

「おかしいだろ！？話を聞いてる時から頼み事の内容がおかしい
と思っただけけどさあ、殺し合いとかおかすぎるだろ！？なん
でいきなりぶっ飛んだ事になってんだよっ！！」

永琳の肩を乱雑につかみ、激しく揺さぶりながら反論の言葉やらこ
の世の常識を投げかける。

「あら？可愛い可愛い妻からの頼み事よ？少しは叶えてく
れたっていいじゃない」

「それを叶えようとしたら俺がバトルロワイヤルに参加する羽目
になるんだけど！？」

俺まだ爆発する首輪貰ってないんだけど？

あれってなかなかイカしたデザインしてるから好きなんだよな。

何処に行けば貰えんの、アレ。

千円ぐらいで売ってくんねえかなあ？

「愛しの妻のために死が飛び交う戦場に行く夫……………きゃっ???
素敵じゃない！」

「きゃっ??? ってなんだよ?! 何一つ?が付くような素敵要素
がねえよ!! 愛しの夫を戦場に連れて行こうとしてる時点で俺へ
の愛が一欠片も感じられないんだよ!!」

さつきから変なことばかり口走る馬鹿に対して必死に突っ込む。

だが、俺の怒声なんてなんのその、構わず突っ走る永琳さん。

「必ず…必ず生きて帰ってきてね。グスツ 私、祈ってるから！」

「ふざけんなああああああつ! 何なの?! お前一体何なの
?! さつきから死亡フラグばつかバンバン建てやがって!! 一
体何を祈ってるの?? 死体となって帰ってくるよう祈ってるんじ
やないのお前!??」

「大丈夫。 お腹の子と一緒にあなたの帰りを待ってるから……………」

愛おしそうにお腹をさする永琳さん。

うん、俺はお前を抱いた事なんて一度も無いからね。

「やめろっ！！ それ以上死亡フラグを建ててるなっ！！！！ もうスカイツリー並みにフラグが建築されてるんだかな？！」

このフラグを回収しようとしたら、俺が300人いても全然足りないと思う。

何が嬉しいのかキヤーキヤー声を上げながら妄想している。 が、次の瞬間には永琳はそっぽを向きながら頬を赤く染める。

そして何か秘め事を話すかのように恥ずかしながら口を開いた。

「真……………この戦争が終わったら、式を挙げましょう」

あ、

……やばくね？

これマジでやばくね？

これ確定したんじゃね？ 死亡フラグ。

「終わったあああああッ！！ 俺の人生二重の意味で終わったあああああああッ！！」

頭を抱え、この世の終わりのような叫びを上げる。

死亡フラグNo.1の台詞&えーりんと一緒に人生の墓場へランデブーだなんて、最悪すぎる。

これなら絞首刑で町中引きずり回されるほうが数千倍マシだ。

ザキと同じぐらいの死の呪文ではないか。

顔全体に、額から首筋までびっしょりと冷や汗やら脂汗が流れ落ちる。

ダメだーこのまま此処にいたら確実に殺されちまう。

どうせなら死ぬ時は女の膝の上がいい。 あ、ただし永琳や八意と名の付いたものは除く。

そして生き残るには――逃げるしかねえ！

そう判断し逃走経路を探すと、部屋の窓が目に入った。

それを見た瞬間、俺は準備もなしに一番近くにある窓にへと身体を投げ出していった。

「え！？ ちょ、ここは二階ですよっ！？」

ガラスが割る音と同時に窓から依姫の叫びが聞こえたが、今はそんなのは二の次だ。

最優先するのはこの場から逃げることだけ。

割れた窓ガラスの破片と共に地面に落下する寸前、前回り受け身をとって落下の衝撃を最小限に押し止め、そのまま、背中に刺さったガラス片の痛みを無視しながらこの場から離れるために走り出した。

「真さーんっ？ 大丈夫なんですかーっ！」

窓から身を乗り出し、窓から飛び降りた真を心配する依姫。

それもそのはず。 なんとって人が窓から何も準備なしで飛び降りたのだ。

スタントアクションでも映画の撮影でもないのだ。 心配しないほうがおかしいだろう。

「あらあら、行っちゃったわね」

それとは真逆に別段何も心配してないようで、普段通りの態度で話す永琳。

いや、これが普段通りなのかと言われれば初対面に近い依姫にその判断はできないだろう。

だが、これだけは言える。

この人、普通では無い。

「まあ、真ならこのぐらい大丈夫でしょうし……心配しなくていいわね」

その言葉を聞いた瞬間、依姫は思わず目をぎよっと見開いて振り向いてしまう。

――この人は何を言っているのだろうか？

――人がガラス突き破って窓から飛び降りたのだぞ？

――まず最初に心配するだろうか？

――もっとほかに言うことがあるのでは？

――そもそも貴女が殺し合いだなんて頼んだのが原因では？

などど突っ込みたいことが山ほどあったが、相手が偉い人であり、さらには色々と性格がぶっ飛んだ人種なのでグツと声を押し殺し、耐えた。

と。

ひたすらに自身をお落ち着かせ冷静になっていると、自分達がいる部屋の外から突然話し声が聞こえた。

永琳も話し声が聞こえたのか、澄ました視線を扉へと向けている。

――え、あの、どちら様ですか？

――ん？ ああ、この部屋にいる人に用があつてね。。

――そうそう、居るんでしょ。 11111。

――という訳で、通さしてもらひつよ。

――えっ、で、でも……………。

――いいからっ、通さしてもらひつよっ！

その声の主は扉の前にいるであろう豊姫の制止の声を振り切り、荒々しく扉を開いた。

「やあ、八意さん。 久し振りだね」

開かれた扉には、高級スーツに身を包んだ男達が下劣な笑みを浮かべながらもこちらを見ていた。

永琳から逃走して少し経った後。

俺はこの周辺を巡回してる私用の警備兵をぶん殴って気絶させながら、とある場所を目指して走っていた。

「くそっ、何処だっ?! 教会

セーブポイント

がみつからねえ!」

手に汗握りながら、必死に目的地へと目指し、奔走する。

早く、一刻も早くこの忌々しい死亡フラグを解除してもらわなければっ!!

この世で一番恐ろしいもの。それはフラグである。

たとえば、どんなに銃で頭を撃たれても顔色変えず澄まし顔なまま
で戦闘をする最強NPCでさえ、ひと度「俺、この戦争が終わっ
たら結婚するんだ」といった瞬間、どこからともなく現れた敵兵
に頭をビューティフォーされてしまうのだからフラグの恐ろしさが
わかるだろう。

だが、そんな恐ろしいフラグも教会に行けば、全身青タイトな巨乳
の神官がきつと俺を癒してくれるはず。

頑張れ俺、ヒーローで英雄でもある俺に敗北は許されないのだ。

だがー問題がある。

なんと世界は無情な事に、俺は王様からゴールドも何も貰っていな
いし、最初の仕事であるお使いもこなしていないのだ。

こんなストーリー的にまだ進んでいない初心者丸出し勇者である俺
に聖なるお祈りが効くのだろうか？

武器だって、ヒノキの棒どころか徒手空拳、つまり素手なんだぞ？

逆に天罰的なノリで呪いを掛けられそうで怖いぜ。

いやー大丈夫だ。問題ない。

俺は勇者は勇者だけれども、その前に《鬼畜外道》のタグが付く方
の勇者だ。

神官が美人の女性なら、俺の身体から溢れんばかりの魅力
カリスマ

でなんとかいけるはず。

男ならばっ飛ばして脅せばいい話。

三次元verランスと呼ばれた俺に不可能はないのだ。

と、

「瞬殺のファーストブリットオーツ！」

「ん？グハツ！」

曲がり角を曲がった所に警備兵が居たので、すかさず拳を叩き込む。

体を螺旋のように回転させ、放物線を描き地面へ落下する警備兵。

「ふはははっ、俺の戦闘力は99999だぞっ！」

本当はそんなに戦闘力は無いのだが、主人公補正があるから大丈夫
だろ。

そのままぶっ倒れた警備兵のそばを通過しようとした一瞬間、後
ろからジャリと誰かが砂を踏む足跡が聞こえた。

距離にして……5 m、あの壁の向こう側か？

ちっ、取りこぼした奴が居たか？ いや、巡回している別のやつか？

すぐさま逃げようとしたが、足元にある気絶した警備兵に気がつく。

気絶した警備兵 それを見つucker警備兵B 曲者じゃーっ！！出逢え出逢えーッ！

とてもシンプルな結果が考えずとも浮かび上がった。

逃亡がダメなら、迎撃あるのみ。

すぐさま足跡の主に対応しようと、横にあった壁の影に身を隠し、姿勢を低くしながら息を殺して相手が近づいてくるのを待つ。

ジャリ、と靴が地面を噛む音を逃さず、冷静に距離を図る。

そして、その足跡の主が俺のすぐ横を通り抜けようとした瞬間、胸ぐらへと手を伸ばし掴み上げ空中に浮かし、そのまま地面へと落とす。

「へ？ きゃっ！」

押し倒した相手を腕で地面にホールドし、そのまま顔に拳を叩き込もうとしてーん？きゃっ？

耳にとても不可解な声が入り、思わず振りかぶった腕を止める。

なんとも女の子らしい悲鳴が聞こえたので、不思議に思い地面へと叩き落とした相手をしつかり確認する。

「ちょ、真んつ、あ、ふぁっ……」

自分の真下を見ると、そこには何故か豊姫が居た。

「一体どこ触ってーんっ、ひゃん！」

そして何故か色気のある艶声を出している。同時に顔も耳から首筋まで赤く、恥ずかしそうに片目を瞑つづつてる。

ちょびつとだが、色っぱいのが目の保養になる。

なんだ？ 何があつたんだ？ と考えていると、むにゅんむにゅんとマシユマロのように柔らかく、なおかつ適度に弾力のある感触が手に伝わってくる。

一体なんだ？ またまた不思議に思い、その感触の原因たる自分の手元を見てみるとー納得した。

「おおう、指からはみ出るほどの大きさ。素晴らしいのを
持ちですね」

服をこれでもかと言わんばかりに押し上げ自らを自己主張をする双
山に、しっかりと俺の手が埋まっていた。

あー、バッチリ揉んじゃってますね。豊姫の胸を。

もうこれでもかと言わんばかりのわし掴み。

まあ、胸ぐら掴んで押し倒していればそうなりますねー。ええ。

「んんっ…っ、はっ、あああっ！」

胸からくる刺激のせいなのか、それとも快樂のせいなのかろくに抵
抗できずに体をくねらせる豊姫。

豊姫は感度が高いのだろうか。まったく、近頃の女子はけしから
んな。実にけしからん。

とりあえず

せつかくの機会なので俺は胸を揉むことにした。

「ひゃああつ!? やめつ、ん、そこはだめつ、んんっ!」

豊姫の静止の声が聞こえるが、そんなことお構いなしにもう片方の手を別の胸手をかける。

少し力を加えたことにより、豊姫の口から聞いただけでそそられるような声が漏れる。

より一層強まった刺激にか、豊姫の体がピンと弓なりに仰け反る。

「……………（むにむに）」

「ふうっ…っ、あぁ、くう…うう…んっ!?!」

マシユマロのような感触の双山を早く時折に遅くし、緩急混ぜながら丁寧に触っていく。

まるで水風船のように瑞々（みずみず）しく、張りのある乳房が手を包むように変幻自在に形を変え、その大きさを表すような重さが指を通して伝わる。

口から漏れだす吐息がー興奮しているのかー熱っぽく、淫らになる。

「もう、もうむりい…だめ、限かいいつ…」

頬を紅く上気し身体を震わせながら、奥から絞り出すように言葉を上げる。

その何とも甘美な声を聞いて、思わずだが喉をぐくりと、鳴らしてしまふ。

「真つ……」

自分の名前を呼ばれたので、今まで胸にへとやっていた視線を豊姫の顔へと移す。

普段はクリツとしてて可愛い眼は、滲み出た涙で少し潤んでいて、それと同時に熱意のこもった視線がこちらの視線と重なり、交じり合う。

その日常とは一線を画した、妖艶で耽美な表情を見て、自分の中にある様々な感情が際限無しに一気に昂っていくのがわかる。

眼の奥がじんじんと焼けるように熱くなっていく。

さっきまでいつどおりだった呼吸も、荒く激しく乱れ、吸うと吐く

の間隔が短くなっていく。

一体何故だろうか？

そう脳裏に疑問が浮かぶが、考える必要もない。

ただ単純に、シンプルに、原始的に、本能が囁いているのだ。

欲しい。目の前にる豊姫が、女として欲しい。

「ん…」

そこで、ずっと豊姫の瞼

まぶた

が降り、静かに眼が閉じられる。

それと同時に、何かの行動を指し示すかのように顎が微かに持ち上がる。

それを見て俺は、彼女が何を欲しがっているのか瞬時に理解し、空いていた右手を優しくそつと頬に添わせる。

触れると同時に身体がびくっと震えるが、嫌ではないのかそのまま俺の手を受け入れてくれる。

「豊姫………」

今愛そうとしている女性の名を呼び、ゆっくりと顔を近づける。

手から伝わる動悸の音が激しくなるー待ちわびて興奮しているのか。

互いの息が顔に当たるーほんの少し前に動かせば触れてしまいそうなほどの距離。

そこで、自分の後ろに豊姫の手が回され抱きしめられるー恥ずかしいのか、それとも早くして欲しいのだろうか。

その催促のサインを受け取った俺は、まるで惜しむかのように至極ゆっくりと、その時間を楽しむかのようにして顔を近づけさせる。

顔が、鼻が、まつ毛、肌が、匂いが、何もかもが、すべての距離が零にへと変わっていく。

背中に回されてた手に、さらに力が加わるのが分かった。

慰めるように頬を撫で、唇と唇が触れあいかけて

そしてー

ドドドドドドドツ、バコツ！！
（怒髪天を貫いた依姫が、俺の顔を蹴り上げる音）

ベキイツ！ ゴキユ！ ボコツ！
（その衝撃と威力で俺の顎、顔面、首の骨が一気に碎け散る音）

ゴロゴロゴロゴロゴロ！！！！
（あまりの激痛に地面を無様に転がる主人公）

「ぐっ、いつ、一体何がー」

何があったかよくわからないまま、俺は転げまわって砂まみれになった体を持ち上げる。

今の謎の衝撃で俺の脳がギュインギュイン、まるで頭がシェイクされたように揺れている。

誰だーこの国宝級イケメンな俺の顔を蹴った奴は？

明らかに音がやばかったぞ、しちやいけない音だったぞ。

分かってんのか？

「一体何をやってるんですか、貴方はっ！！」

と、瀕死で重症な俺の目の前に怒気を混じらしながら依姫と思わしき人物（涙で目がよく見えないため）が近寄ってくる。

でも、声やぼやけた髪の色を見るとやっぱり依姫なのだろうが、今はこの状況を何とかしなければならぬ。

「よっ、依姫ちゃん？　なんで俺の顔面を蹴り上げたのかな？」

とりあえず、俺は至極当然な質問をした。

「なんでって、そんな事も分からないんですか？」

俺の疑問に対して般若のような声を出しながら投げ返してくる依姫。

そこで俺は一旦深く模索するように声をうならせー原因が判明した。

「OKOK、分かったよ依姫ちゃん。嫉妬するのはわかる。でもさ順番ってのがあるからさ……。大丈夫、豊姫をおいしく頂い

た後にちゃんと満足するまで相手をしてあげるから、な？」

「違います!! 一体どんな思考回路をしているんですか?!」

俺の回答にまたまた怒髪天を衝く依姫。

その反応を見た俺は、やれやれといった感じで肩をすくめ反論を投げかける。

「おいおい、今日が何の日かわかってんのか？ 13日の金曜日なんだぜ？ フレディでさえエルム街に恐怖を叩き付けた日なんだぞ？ そんな日にはこの胸から溢れんばかりのほとばしる熱いパトスを開放しなきゃならないんだよ。日々聖人君子で禁欲的な仙人である俺も今日ばかりは<性欲>と言う欲望をぶちまけたいんだよ。カニで言うなら解禁日なんだよ。俺の股間に住み着いているリイヴァイアさんが荒れに荒れて今か今かと出陣を待ちわびてんだよ」

「な……………っ、人様の姉を押し倒しといてぬけぬけとー」

「いや、あれは双方の同意のもとで行われた神聖な儀式なんだよ。俺は神父だから職務を全うしていたんだよ」

俺は《探究者の秘宝》から銀の十字架を取出し、恭
うやうや
しく掲げる。

「思いつきり胸を揉んでたじゃありませんか！！ 聖職者（偽物）のすることではありませんよー！！」

どちらかと言うと、彼は性職者の方だろう。

「男にはよ、僧職系男子からガッツリ肉食系男子に変貌したい時があるんだよ？ どんな奴だったまには劣情を曝け出してハッスルするする時が欲しんだよ。 女の前で自分の息子をさらけ出して武勇を上げたいんだよ。 いい加減、俺の股間に装着されているビツクリドツキリメカでハイパー兵器でもある《超過電子粒子砲》が充電し過ぎて暴発しちまいかけているんだよ？」

やれやれと言った感じで肩をすくめる。

最後にやったのが確か、三日前の本屋の店員だったからな。

小柄で青髪な可愛い美少女で甘い言葉で口説いて押し倒し結構やっただはずなんだがーどうやら俺の性剣の性能がテラチートすぎたよ
うだ。

流石、エクスカリバー（S級宝具）と同レベルの性剣。

冷却期間の短さがハンぱねえ。

「貴方にはモラルというのは無いんですか！？」

「無い。その代わりに性欲なら倍近くある」

「ただの欲求不満だけじゃないですか!?!」

「ふざけんなっ!! 俺はただ、欲望に忠実すぎるだけなんだ!」

またまた激怒する依姫。よく見ると後ろで纏めてある髪が猫のよう
うに逆立っていた。

「って、こんなどうでもいいような事を話してる場合ではないんですよっ!?!」

「人の頭蓋骨と顎骨と首の骨を粉碎さしといて、いい根性してやがんなあ、おい」

「自業自得じゃないですかっ!?!」

金剛力士像みたいな表情のまま返す依姫。

案外、彼女は永琳と同じく色々とすっぱ抜けてる性格なのかもしれない。

人を日本刀で滅多刺しにするような人種だしな。

そう恐ろしく思った俺は、とりあえず話題を変えることにした。

「依姫ちゃん、ドナルドとケンタッキーおじさん、君ならどっちのほうが強いのと思うかい？」

「話の換え方が下手すぎなんですよっ！！」

「あ、ごめん。食い倒れ人形も入れるべきだったか？」

「ああっ、もう、そうゆう問題じゃありませんっ！！」

キッ、と三白眼で睨まれる。

ん？今の会話のどこに不備があっただんだ？

「はあ、もういいですって。真さんの会話力の無さにがっかりしました」

「失礼な、俺のカリスマは999だぞ」

「だからっ！！ そんな事よりも八意様のほうが大変なんです！」

「粉碎骨折してる俺のほうが大変な気がするんだが……………」

「だからふざけたのとか抜きにしてほんとに八意様やばいんですよ、もお……………」

さっきのやり取りと、今の状況を顧みてなんだか腹ただしいのか、頭をかきむしっている依姫。

表情もなんだか焦燥に駆られており、頭をかかえている。

なんだか、かなりヤバそうなことが起きたのか？

「ああん？ 永琳に何かあったのか？」

「はい、実は……………」

そう言うと、依姫は真剣な表情をしながらも事の内容とやらを話し始めた。

後編に続きます？)。。(？)

バトルロワイヤルなんかに参加したくない 前編（後書き）

読み切ってくださいってありがとうございます。

後篇は近日投稿しますので、その時にお会いしましょう。

では、私はゲームをしてきますので。

アイザックかつこいいよアイザック。

……あ、このネタが分かった人。あなたは私の盟友だ。

一緒に石村に乗り込もうじゃないか！！

工具こそが最強だ！ そしてエンジニアこそが最強なんだ！

「こいよ依姫、コンクリなんか捨ててかかってこい……あ、俺の方に投げるんじやないか。タイトルが前回地違うことに違和感を感じた方はすいません。こうしたかったんです。 すいません。」

一か月ぶりに投稿。

あいからずの駄文。

そしてほかの話も修正したことを今ここで知らせる作者

見てくれるだけでありがたいです

ではどうぞ

「こいよ依姫、コンクリなんか捨ててかかってこい……あ、俺の方に投げろんじ
前回までのあらすじ

かけた
豊姫を押し倒したら依姫ちゃんにぶち殺され

話は、真が逃走した所まで遡る。

「やあ、八意さん。 久しぶりだね」

扉の前にいるであろう豊姫を押しつけ部屋に入ってきたのは、そこそこの年を取った中年の男三人だった。

見ると皆一様に高級感漂うスーツを身に纏っているが、そのポツコリと突き出た中年腹がスーツの気品や美さをどん底にへと叩き落としているのが一目で見取れた。

豚に真珠とはまさにこの事か。と、場違いながらも思わず依姫はそう思っていた。

「あら、あらあら。お久しぶりですね皆さん」

いきなりの訪問にも対して驚かず、永琳はいつものイー本当に笑っているのか、それとも愛想笑いなのかよく分からないイー微笑を浮かべながら彼らの方へと向き、会話を転がす。

「八意様？ この人達は一体イー」

「しっ、私の後ろにいなさい。イーところで、皆さんは何故に私のところへ？」

この人達は一体誰ですか？ と質問しようと思っ前に出た依姫を自らの背に回し、再度振り返る永琳。

「いやいや、先ほど会場で貴方の姿がお見受けしなかったものから……つい」

「いやあー、心配しましたよ？ てつきり今さらになって逃げたのかと……」

「ええ、ええ。私もそう思いましたよ。まさかとは思いますが、「賭け」の事……忘れてはいませんか？」

男たちが永琳へと一斉に、それこそ矢次早次のように言葉を投げかける。

そんな心を不快にさせるような言葉にも、永琳は笑みを崩さないまま肯定の言葉を返す。

「ええ、もちろん。忘れるわけじゃないじゃないですか」

肯定。

その言葉を聞いた瞬間、男達の表情が一気に変わる。

ニタニタと口角を釣り上げ、なんとも不快ないやらしい笑みを貼り付け、粘っこく脂ぎった視線で永琳の身体を舐め回すかのように見て、そしてまたもや下劣な表情を浮かべる。

気持ち悪い。

その男達の顔を見て、その表情を見て、依姫は無意識で自分の腕を抱いた。

自分の目の前にいる永琳を、まるで見世物かと思わんばかりに、隅から隅まで吟味しながら視線を動かす男達。

その光景を間近で見て、心の中から沸々と嫌悪感が湧き出てくる。

「いやあ、それにしても貴女からこんな話が来るとは……夢にも思いませんでしたよ」

「ええ、ほんとほんと。しかも賭けの内容もなんとも……ぐふふっ」

「ここまで旨い話、そう滅多にありませんからなあ」

中年三人組が互いに確認し合うようにして、その「賭け」とやらのことを話している。

だが、その賭けとやらの詳細がわからない依姫にして見れば、その三人の取る言動一挙一動、全てが嫌悪感を発しているように見え、思わずだが目が釣り上がってしまう。

別に依姫が男嫌いなどという性格ではない。ないのだが、思わずそうしてしまうぐらいにその男達が不自然なのだ。

そんなことを考えていると、手前にいた一人の男が永琳に近ずきポン、となんともし親しげに肩にへと手を置く。

「確認のためにもう一度尋ねますが、賭けの内容……忘れていませんかよねえ？」

「ええ、もちろん。此方から持ちかけた話ですもの、忘れるわけがないじゃないですか」

三人組を挑発するように片手で銀髪をなびかせ、微笑を浮かべる。

その挑発に多少腹が立ったのか、男達は少しだけ表情をムツとさせるが、すぐさま冷静さを取り戻し会話を続ける。

「では内容についても再度確認をしてもよろしいですか？」

「ええ、どうぞ」

「それでは……今日の12:00から始まるゲーム。ああ、ゲームについての詳しい説明は……」

「殆どの事は事前に知っておりますので大丈夫です」

「ふむ、それは重々。なら続きを……そのゲームに参加する2チームのうちどちらか1つを選ぶ。そして、もし自分の選択したチームが勝利したら」

「そのチーム選んだ人の勝ちとなり、「賭け」の報酬が得られる。ですよね？」

「その通り。何も問題はありません」

肩に当てられた手など微塵も気にせず、そのまま会話を続ける永琳。

「それで、私達が勝ったなら……」

そう間を開けると同時に、突然男の視線が下に――つまり永琳の胸へと移る。

そして今まで肩にあてられていた手が、滑るようにして緩やかに移動し――

「……え？」

「ッ！」

――永琳のその豊満な胸を、掴みあげたのだ。

「あっ、貴方達っ！！ 一体何をして――」

「依姫、心配しないで。大丈夫よ」

今の衝撃な行動に、思わず怒りが火山のように沸き上がり怒声を上げた依姫。

が、次の瞬間にはいつの間にか一歩後ろへと後退していた永琳が手を依姫の前にへと突き出し、制止させていた。

早くていまいち確認できなかったが、どうやら見事なぐらいの体裁きで男の手を振り払い、そのままステップを踏むようにして後退したらしい。

「おや、このぐらいのスキンシップは嫌だったか？」

「ええ、勿論。ホント、くだらないご冗談はよしてください」

両者少し離れたところから睨むようにして静止する。

牽制するようにして、お互い動かず、無言になる。

部屋全体に嫌な空気が流れ始め、膠着状態が続きそうになった。

と、

「…………ふう、まあいいでしょう。お楽しみは次回に取っておくとしましょ」

「そうですね。それに、そろそろゲームの開始時刻ですし。積もる話は会場で……」

一人の男の言葉を口切りにして、男達三人が部屋から出ようとし始める。

どうやら時間を押して来ていたようで、若干焦っているようにも見えたと。

張り詰めていた空気が一気に無くなっていき、普段からこんな空気に慣れていない依姫は思わずホッと一息付いてしまう。

そこで、リーダー格の男性がこちらに振り返り、別れの言葉を投げかけてくる。

「では、八意さん。我々はこれで失礼しますので……」

「会場でお待ちしておりますぞ……ぐふふふっ」

「……賭けの報酬、楽しみにしていますよ」

「ええ、別に構いませんよ。どの道勝つのは私ですから」

いつもどおりのような口調で、極至当然、当たり前のように答える
永琳。

「……随分と自信があるご様子で」

「あら、だって……当然のことじゃないですか」

男の言葉を遮り、手を口に当てながらくすくすと笑う永琳。

さっきの意趣返しもあるのか、わざと目につくような仕草で嘲笑うようにして手を口に当てる。

「ふっ、ふん。　だが私たちが絶対有利なのは変わらない」

「あら？　そうとは限りませんよ。　物事に”絶対”は無いですから」

「ふむ……なら貴女が勝つことも”絶対”ではないのでは？」

自分たちが押されていると分かったのか、状況を打開しようと永琳の言葉の足を取るような発言で返す男。

それに同調するようにして周りに取り巻く男二人も頷く。

「そっ、そうですね。　此方の勝利が”絶対”でなくても、結局の所と賭けに勝てばいいこと」

「ゲームの後のこと、楽しみに待っていてくださいね？　体にたっ

ぶり教えて差し上げますよ」

「貴方たちには無くても私にはあるのですよ。まったく……そんな事も分らないんですか？」

「……調子に乗るなよ、女のくせに」

「そっちこそ調子に乗らないでちょうだい。貴男と私じゃ生きた年数が遥かに違うのよ、格の差を知りなさい」

「ーッ！」

永琳に睨まれた男は微かに悲鳴を上げると、手を微動だに震わせ縮み上がっていた。

シミ一つ無い肌、童顔とも絶世の美女とも取れるパーツすべてが完璧な顔、その若く瑞々しい身体からは見てもとれないような月日を彼女は過ごしたのだ。

風格の重みとも取れるその眼光は、常人に対しては普段絶対に味わう事の出来ないものだった。

「……っ、それでは、会場で」

「ええ、会場でお会いしましょう？ ふふふっ、楽しみにして例のモノを待っていますね」

男たちの虚勢を見透かしたのか、くすくすと笑いつずける永琳。

それを見て気分を害したのか、それともさっきの恐怖から逃れたか
ったのか、ぞろぞろと入ってきた扉から帰っていく男達の背はなん
とも滑稽なものだった。

早く帰れ、そう思いながら出ていく男たちの背中を厳しい目つきで
睨む依姫。

と、

男たちが階段を下りる音が遠くから聞こえると、さっきの扉からま
た別の人影が現れる。

「もう、一体なんだったのよう」

扉からひょっこりと現れたのは、依姫の姉である豊姫だった。

さっきの男たちに押しつけられて転んだのか、涙目で服についた土
埃をパンパンと払いながら依姫と永琳の近くまで寄ってくる。

「うとう、久しぶりに真に会えたのは凄く嬉しいけど、あんなポツ
コリ中年につき飛ばされるなんて……今日は厄日だわ」

「朝っぱらから車で拉致される事自体から既に厄日ですよ、お姉様」

自らの姉の愚痴にツッコミを入れながらも、周りが静かになった依姫は自分の身の回りに起こった事柄をその頭で必死に整理していた。今日の朝からついの一秒前の出来事まで、その幼き顔とは別格の頭脳で、男たちの暴行で熱くなった気持ちを静ませ、自分で納得のいく答えを導こうとする。

だが、判断するには事柄が不可解すぎるし、今まで経験したことの無い出来事。

「八意様。そろそろよろしいのではないのでしょうか？」

故に答えを求める。 今回の主犯と一番思わしき人物にへと。

「あら、それは一体何のことかしら」

「今回のこと全てですよ。 私達を攫った事や真さんをここに連れてきたことも、何もかも全て含めたこと。 いい加減答えてもらっても罰は当たらないと思いますか？」

先程までの苦労顔を感じさせないような鋭い声色で、今回の真相を求めようと質問を臆せず突きつける。

今は引くべき場所ではないと心で自らを奮え上がらせながら。

「……………」

「……………」

「ん？ どうして二人とも黙ってるの？」

少しの、三人……いや、二人の間に沈黙が下りる。

何か考えているのか、いまいち分からない表情のまま眼を細め依姫を見つめる。

「…………ふう、分かった。いいでしょう、教えてあげましょう」

「ふえ？」

折れたのは、なんと彼女のほうだった。

唐突にさっきまでの威圧するような表情を崩し、いつもの笑みに戻る。

それに対し、依姫のほうは少し拍子抜けしてしまった。

てつきり何か山があるのではと、予想してたのに、こんなにも簡単に教えてくれるとは思っていなかったのだ。

「それじゃあ、まず豊姫！」

「！ はっ、はい!?!」

「どうして私がここに連れてきたか、貴女ならわかるかしら？ 制限時間は30秒」

「えっ、私?! そして30秒!?! え、えーっと、どうしてって言われてもなあ、でも、いや、うーん……」

永琳からの思いもよらない質問に、帽子に手をかけうーん、うーんと可愛らしい唸り声を上げながら考える。

すると、答えを導き出したのかいきなり顔を上げ自信満々の表情で考えを告げた。

「分かった！ 私と真を合わせたかったからね！」

「……馬鹿ですか、お姉様は」

「ひっ、酷いっ!?! 実の姉に対して取る態度じゃないわ!?!」

豊姫のお気楽な回答に思わず呆れ顔のままストレートに思った言葉が出てくる依姫。

が、それとは真逆に質問した永琳は一瞬目を細める。

「……そう。じゃあ次は依姫。あなたはどうか考えるかしら？
制限時間はさっきと同じよ」

「わ、私ですか……」

告げられた質問に、思わずうう、と唸ってしまう依姫。

もしかしたら永琳の質問には何か裏があるのではないのか、そう深く考えるようにして自らが納得の行くの答えを必至にに模索する。

「……私とお姉様に何か見せたいものがあつたのか、ですか？」

恐る恐る質問の回答を返す。

恐れているわけは、自分の回答に自信がないだけだが、それよりも何故？ といった疑問の感情のせいもある。

「……そうあなたは考えるわけね、なるほど」

二人の回答を受け取って再度、何か思考しているのか、目を閉じじつと立ち止まる永琳。

その行動にどうしていいのかわからなく姉妹二人して頭に？を浮かばせながら戸惑うこと数分。

閉じられていた瞳が静かに持ち上がり、その口からようやく言葉が発せられた。

「50点ね」

「？」 50点？」

発せられたのは、50点という単純な二桁の数字だった

「100満点中50点。二人の回答を足して、そして私の求めている模範解答と厳選して比較した点数よ」

「模範解答なんかあったのね。 なんだかテストみたい」

「……それって、低くないですか？」

最高お気楽思考な姉とは違い、その点数とやらを聞いた依姫は思わずそう返してしまう。

不満に思っているわけは、どうやら自分たちの点数の低さにだった。

何を隠そう、学生であるこの姉妹は二人そろって学校での成績はか

なり上の方、つまるところ優等生なのだのだ。

普段から真面目で勤勉である依姫は、毎回毎回授業の予習復習を欠かさずしており、中間、期末考査の成績は10位から5位を彷徨っているぐらいであるし、豊姫に関しては持ち前の幸運と勘が毎回のように発動し、前日に山を張った場所が大当たりだったり、マークシート系に関してはすべてランダムにやっても全問正解をたたき出すほどである。

だが、二人の回答を合わせてもようやくやく半分なのだ。

少なからずプライドというものがあるのか、そう返してしまうのは当たり前だった。

だが、その返事に対し永琳は心外だと言わんばかりに目を開き、言葉返す。

「低いなんて、その逆よ逆。むしろ高得点よ。凄くない」

「そうなの？ わあい！褒められちゃった!」

「う、うーん。嬉しいやら、虚しいやら……。素直に喜べないんですが」

豊姫はぴょんぴょん飛び跳ね、依姫はバツが悪そうに眉を吊り下げている。

姉妹で正反対なりアクション取る二人。

その微笑ましい二人の姿を見つめながら永琳は会話を続ける。

「そうね……なんで連れてきたのかは話せないけど、その代わりと言ってはなんだけどご褒美として私が何を賭けたのならば、教えてあげるわよ」

「ここに来た理由は教えてくれないんですね……」

その言葉に不満を漏らす、会話の主導権イチチアシフを握られてしまったてはそれを聞くことも叶わない。

そう判断した依姫は、せめてそれだけを聞こうとさっきから喜んでくるくる回っている姉を無視し、その賭けとやらをの詳細を聞くことにした。

「で、八意様は一体何を賭けたのですか？」

「私が賭けたのはね、それは――」

「……………私よ。」

「……………は？」

永琳の言葉を聞いた瞬間、依姫は思わず間拔けた声を上げてしまった。

私？ 私って……………八意様？ ん？ どう言う事？

その言葉の意味がいまいち分からず、一体どんな意味での私なのかまったくもって理解できずにいた。

意味不状態になっていた依姫を見て、理解できてないことを把握したのか朗らかに笑いながら依姫にへと補足の言葉を投げかける。

「あら、私が言った意味が分からないの？」

「えっ、ええ……………。賭けの内容が私って、一体どういうー」

「だから、そのまんまの意味よ」

は？

そのまんまの意味って、それは……

その意味を考えた瞬間、心臓が潰されたように違和感を覚え、無意識に手に汗が出る。

嘘……でしょ。

自分の思い浮かべた最悪の答えが、まるで心から滲むようにして体全体の動きをぎこちなくする。

「私は自分自身の身体に心。そして生存権、抵抗権、人権、そのすべてを今回の賭けの内容にしたのよ」

「それって……じん、し」

人身売買のようではないか。

出そうとした言葉が、何故かうまく口から出ずに、喉の中で埋まっていた。

「？ 人身売買って言いたいのかしら？ そうね、言い方によってはそう言い代える事も出来るわね。でもそれにはお金が発生しないから半分正解ってところね」

人差し指を立てて、朗らかに笑いながら間違いを指摘する。

どうして？

意味が分からなかった。

いや、この言葉は間違いだろう。

依姫自身は確かにその意味は理解はしていた。

つまり、この女性は賭けのレートとして自らの持てる全てを差し出したのだ。

ただ単純なことではないか。

だが理解できない。

脳が理解していることを理性と常識が否定する。

「でっ、でも、それって、犯罪じゃないですか……」

震えている、声を、絞り出しながら、考えが纏まらない思考を回して、原因を見つけ出そうとする。

犯罪だ。

まじうことなき犯罪。

この都市にだって、市民たちを守る法が、依姫たちを縛る規則がある。

それに照らし合わせてみたとすれば、間違いなくそれは犯罪だ。

もしそのことがばれて、つかまりでもしたら間違いなく第一級犯罪者として重罪、罪罰社会であるから、それこそ終身刑が待ち受けているだろう。

「そうね、これは確かに、いいえ間違いなく絶対に裁かれるべき悪事になるでしょうね」

うんうん、と頷きながら口を回す永琳。

なら、何故？

なぜこの女性は自らを差し出しているのだろうか？

なぜこの女性は自分の命を懸けているのに、そんな平然な顔をしているのだろうか。

「でもね依姫。あなたが言ってる《犯罪》というのはね、とても簡単に隠せるのよ。それこそテストで悪い点数を取った子供が答案用紙をどこか親の知らないような所にしまっつけてしまっように、ね。悪事は灯台もと暗し、この世にある正義は全て真っ白じゃなくて、微量に黒を含んだ白。半端な灰色。正義をふるう側には必ず背信者がいるわ」

「……で、でも、八意様ほど有名ならそんな事ー」

「そんな事出来ない。出来はずが無い。そう言いたいんでしょ？でもね依姫、貴女は知らないかも……いえ、知らないだけでそんな事、案外簡単にできるわよ？私がやろうと考えれば準備も含めて4日で貴女をこの都市から完璧に、誰にも知らせないで抹消できるもの。それに、なにも彼らも私が素直に従うわけないと疑ってるしね。必ず私を服従させるため準備しているはずよ」

「ーあ、う」

「知能と権力はそこそこだから何かしらの策があるはずよね。多分、正常な判断を奪う薬や感情を一時的に失くす薬なんかが常套手段でしょうね。あるとすれば、エピニスミン（麻薬）やPuin（精神混乱投与薬）、あとは白夜（中毒性強アルコール）かしら？この辺は弟に聞かなきゃ分からないわね。あ！でも彼らの殆どの目的は私のこの体が目当てでしょうし、私の生体機関に害のある薬はないわね。やるとしたら……そうね、どこか声の届かない独房とかに私を監禁。媚薬なり神経薬でも注射、そして入れ替わりで朝昼晩構わずひたすら犯し続けてそのまま快樂漬け……かし

らね？　そして自分たちの性欲を満たすだけの愛玩道具にでもするつもりじゃないかしら？」

「――」

「ひねくれた彼らの性格から考えると、ビデオカメラとか記録装置で私の痴態を一秒も余すことなく撮るでしょうし、もしかしたら服も何も着せずに首輪だけで都市を徘徊させる……なんてこともあり得るわ。　あ、でもそれだと政治生活に影響があるから最初は無理ね。　やるなら私を使って権力を絶対的なモノにさせてかしらね？　枕営業、^{まくらひんぎ}だつたかしら？　それとか、私を服従させてから根回しさせるなんか有効ね。　今考えてみると反吐が出るわね。　好きでもない男に抱かれるなんて……。　こうゆうのって何て言うのかしら？　レイプ？　寝取られ？　痴女？　露出狂？　調教？　それにしてもどうして世の男性ってこうゆうのが好きなのかしらね？　私には全然、これっぽっちも理解できないわ。　真はこうゆう嗜好のほうが好きなのかしら？　そうだったら少し残念ね。　彼を愛しているから押し倒されても素直に受け入れちゃうし、裸で連れ回されてもたぶん、悦んじやうわあ。　調教も……あらやだ、想像してみたら少し体が火照っちゃうわあ」

なぜこの女性は、なんで、

こんなことを、平然と、言えるのだろうか。

「本当ならこっちのチームに真を入れることでそれなりの勝算があったのに、これじゃ絶対勝てないわね。　……まあ、逃げちゃったのなら仕方ないわ」

残念ね、

まるで他人事のように、自分とは関係ないことだと錯覚するような、色を感じさせない淡泊な返事。

「……………あ」

「ん？ どうしたの？」

かすれた声を聴くようにして、耳を傾ける。

「それじゃあ、八意様は、賭けに負ける、ってこと……………ですか？」

私の言葉を聞いた瞬間——何が嬉しかったのか？ 一体どうしたのか分からないが——突然、八意様はにかむように優しく微笑んで、

「そうよ。私は無残にもこの賭けに負けて、そして賭けのレートとしてあの男達に好きなように犯され汚され、遊ばれ、幾度となく辱しめを受けて、なすすべなく恥辱を受け入れて、そして最終的には哀れになるほど快楽を求めてよがり狂う性奴隷になるでしょうね」

ダンッ！！

さっきまでしっかりと閉まっていた扉が、激しい音と共に荒々しく開かれた。

その言葉を聞いた瞬間、私はお姉様の手を強引に引きながら建物の外にへと出ていた。

「ちよ、依姫っ！？ そんなに慌てて一体ー」

「探さないと……はやく、はやくっ!!」

自分の姉である豊姫がいきなりの事態に狼狽ろうたいしているが、今はそんなのは関係ない。

焦燥感に駆られて、足が自然に一歩先に出る。その場に止まる時間さえ惜しくなり走りながら言葉をつなぐ。

「早く、探してっ!!」

「ふえ、なにになに何何?? い、一体何をどうしてー」

走りながら、体を酷使しながら思考を回転させる。

八意様は「真を入れることにより勝機があつたのに」と言っていた。つまり、この言葉は裏を返せば真さんがいれば勝てるかもしれないということだ。

なら、八意様を助けるには今すぐ、彼が必要なのだ。

とりあえずは、何よりも先に彼が必要なのだ!

「真さんっ、を！！ いいからっ！！ 早くっ！！」

「え？ どうして真を？ ていうなにがー」

「もうっ、能力でも勘でも何でもいいからとっとな探してよッ！！」

「わっ、分かったわよ。 真を探せばいいんでしょ！！」

何が何やら理解できずにいたが、依姫の慌て具合を見て何か理解したのか前を見て集中し始める豊姫。

どうか、どうか、最悪の事態になりませんように。

そうすがる思いで祈りながら、姉を頼りに真さんのところまで急ぐ。

「と、いう訳なんです!」

手振り身振りな説明をしたせいで汗だくな依姫。

何とも焦りまくっていた依姫から、話を聞くこと数分。

俺はさっき殴って倒れた警備員の上にドスンと座りながら焦り焦った話の全容を聞いていた。

「ふん。俺がない間にそんなことがねえ」

話の内容を聞き、頭の中で纏めて行く。

纏めれば、賭けに負ければ永琳が犯されるってか。

単純解明、簡単すぎてむしろビックリ。

にしても回想がなんだかややこしいなあ、おい。

もっと上手く纏められなかったの？

もし俺が先生なら評価は最低のCだよ？

そしてそのまま補習と言って人気のないところまで女子生徒を……
おおっと、いかんいかん。

つい今、俺が女性にしたいこと？1な欲望を語ってしまった。

「ですから、今すぐ真さんに手伝ってほしいんです!!」

ぐい、っと腕が引つ張られる。

その華奢な体のどこにそんな力が隠されているのだろうか？ 今流
行の細マツチヨですか？

依姫ちゃんがさあ行かん、とばかりに俺をせかしているが、なんだ
ろう。

おかしいよね？

おかしすぎるよね???

今の話を聞いて不思議に思った人、挙手しなさい！！

「時間がないんですから急いでください！！ 早くっ！！」

「ぐえっ！？ ちょ、腕もげ、ひぎい！！ 取れる！！ 腕が取れ
ちゃうー！！」

手を掴まれ、そのまま引きずられそうになる。

が、その前に腕に力を入れて少し腕を上げて強引に拘束を振り払う。

駄目だな。 焦っているの事もあるが、永琳の話術にまんまと模範
なお手本ぐらいに引つかかっていやがる。

冷静さを欠いているせいで、常識が考えられないらしい。

「依姫ちゃん、少し落ち着いて考えようぜ」

手を突き出し、落ち着けという事を示して、依姫を止める。

「落ち着けて、落ち着けるわけじゃないですかっ！！ 早く

しないと八意様が……」

「時間なら気にしないでいいぜ、ああいう奴には必ず事前紹介やら秘密締約なんかの書類サインがあるから」

何度かそういつた事を開いてきたから、何をすべきかはだいたい分かる。

「まず最初に俺の言いたいことを言わせてくれ、なんで俺が参加しなきゃならないんだよ」

「……え？」

予想外だったのか、口をぽかんと開け、眼を真ん丸として俺を見てくる依姫。

「え？じゃなくてさ。おかしいだろう？　どっからどう考えてもよお。誰が好き好んで弾丸飛び交う戦場に行きたがんだよ。戦争中毒者じゃないんだぞ」

「それは、そうですけど。　けどっ……！」

「けど……！　じゃねえぞ。　言っておくけどそれに参加したら俺が死ぬ可能性があんだぞ？　しかも不利なチームのほうに入るってことだけで死亡確率がぐんと跳ね上がるし。　知ってつか？　銃は当たり前所が良ければ1発でくたばっちまうし、悪けりゃあジワジワと

出血による恐怖と体が冷たくなっていく感覚にさいまなれて死ぬんだ。分からねえだろ？ そりゃ、当たり前だよな。銃を向けられるどころか銃そのものを見た事無いんだからなあ」

「……うう、ですがー」

「誰だって生きていたいし、自ら死地に飛び込もうなんて考えないだろ？ もちろん俺だってそうさ。痛いのは嫌だし、死ぬのなんてまっぴらごめんだね。依姫ちゃんだってそうだろ？ だが、それがどうだ。なんと自分から進んで他人を死地に送ろうとしてるんだぜ？ 少し考えてみればわかる事だろ」

息を吸い、呼吸を落ち着かせる。

依姫はなんだが顔を暗くして下を向いているが、気にせず話を続けよう。

「自分では人助けだと思っているだろうけど、それは自分自身、つまり依姫ちゃんの勝手な考えだ。助けられる本人はいいだろうが、それを助けるためだけに巻き込まれた人は命を掛けなきゃならない。それは一見聞こえがいいかもしれないが、絶対に褒められたことじゃない。自己満足な勝手、エゴだよ」

「ー」

「と、まあ今まで言ってきたことは全て一般的な思考から見たごく普通の正論だ。ここまでの会話を聞けば否定的かもしれないが、俺は常人とは考え方が全くもって違う。自分の自己満足のために

戦争だって起こす。だからーぐえつぶー!!」

参加してやるうじゃないか。

そうカツコよく決めようとした言葉が、なんとも変な言葉に変わると同時に視界がチカチカして、それに遅れて顔面に鈍い激痛が走る。仰け反った体を戻し、攻撃が来たと思わしき方向、つまりは正面を見る。

と、そこには

「……………、いい……………」

「え？ 何？ 今のもしかして依姫ちゃー」

「もっつ、いいですっ!!」

「いや？ 何がいいのかわからぎやばう!!」

依姫が大声を出し、意味が分からず首をかしげた瞬間、さっきとまったく同じ衝撃が顔を走る。

それで分かった。

殴ってきているのだ。

焦燥感や怒りやなんやらで気持ちの整理が追い付かなくなったせいで分からず涙を流しながら殴ってきているのだ。

全力で、思いつきり握りしめた拳で、俺の顔面だけを、有らん限りの力で、連打していた。

「もういいですっ!! 貴女を頼りにした私が悪かったです!! 真さんみたいな薄情で臆病者なチキンボーイなんかには頼みませんっ!!」

「ちょ、言い方がひどっ、ぐぼはあ!!」

「知りませんでしたよ、そこまで人を考えられなかったなんてっ!! 人助けをしようとも考えられないあなたなんかには用はありませんよっ!!」

「いや、俺の話を最後まで聞けっつてがぼふう!! 無し!! 顔はやめてっ!! 顔面だけはあふうう!!」

「最低ですっ!! もう知りません!! 貴男なんかには頼まなくても私一人で何とかしてみますよっ!! ふーんだっ!! この童貞!! 粗チン!! 早漏!! 玉無し野郎っ!!」

「おいおいおいおい!!? 今のは聞き捨てなんねえぞ!! 誰が童貞チエリーボーイだー!ぐえぽっ!! わ、分かった!

巨大な岩が、俺の顔面めがけて抱きついてきた。

コンクリってこんなにも硬かったのね。

顔面で受け止めて改めてそう感じたよ。

「ひでえ、少しカツコつけようとしただけなのに……幾らなんでもここまでする必要ないじゃん。痛い、特に顔面が痛いけど、何故かわからないけど心も痛いよおう」

依姫が泣きながら去って行った少し後、俺は涙目で起き上がった。

心が痛いのはなぜだろう？ おかしいな？ 別におかしな事言われたわけじゃないのに。

「くうう、大丈夫か？ このダビテ像以上の美しさを誇る俺のパーフエクトフェイスが崩れたりしてないよな？」

「ううん。全然大丈夫だよ？ いつものカツコいい真だよ」

「そうかそうか、ありがとさん。……ああん？」

一人で喋っていたはずなのに、いつの間にか誰かが話しかけていた。

鼻を押さえながら声の方向を向くと、そこには豊姫がいた。

「あれ？ お前何時の間に居たの？」

「ずーっと隣にいたじゃない。真に押し倒されて、胸を揉まれて、キスしようとして、そこからずーっと」

あれ？ そうだっけか？

思い返してみるとーああ、居たね。 思いつきり居たわ。

「でもちよっと赤いわね。 大丈夫かな？」

「んー、別にどうってことはねえよ。 気にしなくていいさ」

「そう？ でも心配よ？ 本当に？」

「なら癒してくれ。 あゝ、痛いな。 顔面が痛いな。 これは今すぐ誰かが治療するべきだなあ。 あっ！！ なんだか誰かの大きな胸で挟まれたら治りそうなきがするな」

「えっ、ええっ！？」

俺のさりげなく頼んだごく普通の治療要求に気付いたのか、瞬時に紅くなり、帽子で顔を隠す。

「……うう、恥ずかしい。でも、真が望むなら……」

「まあまあ、今は気にすんな。その内ベットの上でもっと激しくて気持ちいい事してもらおうから」

「……あうあうあう」

ベットでの事の内容が思い浮かんだのか、今度は首筋から耳まで真紅に染める。

いいね、この反応は処女だ。こりゃその日が楽しみだぜ。

「そんな事よりさ、豊姫は依姫ちゃんの話聞いてただろ？」

「……うん。ちゃんと聞いてたわよ。八意様の話も」

「そうか、じゃあこの話の裏、何処まで分かった？」

「そつね……うん、私の予想通りなら8割ほどね」

おお、と思わず感嘆の声を漏らす。

「そこまで分かったか。驚いた、依姫ちゃんは全然わかってなかったのに」

「あの子はすぐ人の話を信じちゃうから……。姉である私がしっかりしないとね」

だからこのぐらい簡単よ。

朗らかに笑いながら、そう返された。

ああ、なるほど、こいつは一杯食わされた。

そう感じ、思わず顔に手を当ててしまう。

「？ どうしたの？」

「……いや、何でもねえよ。ただ頭がいい子は俺は好きだな、抱きたいって思ってたただだよ」

「うっう、そんな遠回しに恥ずかしいこと言わないでよお」

恥ずかしがって言葉が尻つぼみになる豊姫。

可愛いなあ、抱けたら今すぐ抱きたい。それこそ全身を舐めつくすまで激しくな。

が、今はそんな事よりもやらなきゃならないことがある。後回しだ。

「さて、と。行くとするか」

「ん、やっぱり行くんだ」

「ああん？ 勿論だろ？」

差し迫って驚かず、当たり前のように問いかける豊姫。

首を回し、肩を慣らして、これから行われるであろう運動に備える。

「ねえ、一つだけ教えてもらっていい？」

「なんだ、何が？」

「その殺し合いに参加する理由。参加するだろうとな〜とは思ってたけど、参加する理由がいまいち分からないの」

だから、ね？

首を可愛くかしげながら尋ねてくる。

嘘だ。

にまにましながらこっちを見てくる豊姫の目は明らかに理由を知っている。

いや、予想はしているがはっきりと自分の予想した答えを聞きたい、つてところかな？

いいねえ、こっぴう女はもっと好きだぜ。惚れたぜ。

「よし、豊姫。お前のその可愛さに免じて、いい事を教えてやる
う」

「うう、恥ずかしいけど嬉しいわ」

「おつさ、そつゆつのは素直に喜んでけ。んで、参加する理由なんだがー」

豊姫の正面に立ち、ピシッと2本、右手の人差し指と中指を立てる。

「いいか、こっぴう状況に立たされたとき、その選択権を持った男には二つの道がある」

中指を畳み、一つだけ立たす。

「一つ目は《常識的に考えて、自ら地雷を踏みに行かず、命を大切にし、安全を確保する》だ。」

「……………」

「こいつはさっきの依姫ちゃんにも言った事だが、まず普通で、絶対的な考えだ。当たり前だ。自ら死地に行こうなんて奴はいないさ。勇敢に戦場に飛び込んで行って、無事に悪を倒し、正義がなされる。そんなのは映画の中だけの話。フィクションさ」

「で、二つ目は？」

「二つ目はこれの真逆さ。《常識を投げ捨て、自ら地雷原に突っ込み、命を軽視し、正義感を得る》
おそらく漫画の主人公が代表的な例だろうな。他人が不幸だから、可哀想だから、ほっとけない。見過ごせない。実に下らねえ。
妄想に甘すぎて反吐が出るぜ」

中指を立て、二本になった右手をふらふらと、呆れた風に力なく揺らす。

この世に絶対の正義なんかいねえ。

勇者なんか、正義のヒーローは存在することない。いや、存在が許されないのだ。

この身で、この心で経験したのだ。

英雄^{キロウ}なんて、居てはいけないのだと。

「で、真はどつちななの？ このままで考えると二つ目に分類されるけど」

「ああん？ ふざけんなよ。尻尾を抱えて逃げることもねえし、どつかのヒーローよろしく正義ごっこなんかもってのほかだ。どつちにも入る分けねえだろ」

豊姫がなんとも馬鹿なことを言ってきたので一蹴する。

いや、これも絶対分かってて言ってるんだらうけどさ。

「俺が選ぶのは臆病者の二つ目でも、英雄気取りの二つ目でもねえ」

立てていた指を全て下ろし叫ぶように顔の前に持っていき、ググッと骨が軋^{きし}む程の力で硬く、荒々しく握りしめる。

「自分を好きな女が他人に犯されるのを黙ってみてる？ ハッ、ふざけんじゃねえ！ そんなのはカマ野郎のすることだ！！」

不思議と口角が吊り上っているーいつもの邪悪で不敵な笑みになる。

「誰かを助けたいという正義感？ そんなくだらねえのなんか一片も持ち合わせちゃいねえ！ 甘ったるい奴なんかと一緒にすんな！！」

視線が射抜くようにギラついて鋭くなるーいつもの悪魔のような眼になる。

胸の中から熱いものが込み上げてくる。興奮しているのか頭が急速に冴えてくる。

「俺が選ぶのは俺の信じた道。 たったそれ一つだ。 《この世の誰よりも己の信念を貫き、世界を巻き込んででも障害を破壊し、生

命を完全に燃やし尽くしてでも、自分のモノを絶対に奪い生き抜く
》ただそれだけだっ!!「

「……………うんっ!!」

一瞬呆けた表情をしたが、すぐさま満面の笑みになり頷く。

さあ、生きるか死ぬかの楽しい楽しい戦争の始まりだ

心ゆくまで楽しむとするか。

なあ？

「こいよ依姫、コンクリなんか捨ててかかってこい……あ、俺の方に投げろんじはあい、駄文を読んでくれてありがとうございます。」

次回からはバトルに入れるようになりたいです。

あ、次回から超能力バトルをきたいしてw k t kした人はごめんなさい。

次回のバトル回は銃火器をしようしたFPSみたいな感じになっちゃいます。

すみません。
すみません。

この超古代編のコンセプトは「人間と妖怪の平等なぎりぎりの全面戦争」なので

詳しいことは、このバトル回が終わったあとにやる世界観、主人公疑問回答編でやります

それでは、あでゅー……!!

依姫の葛藤、永琳の思惑……時々俺（前書き）

警告

この小説には牛歩更新、無駄な長文、ちよつと意味分らない、etc……と言った内容が含まれております。それでも良いよと言っ方はそのまま下にスクロールしてください。
俺には無理だと言っ方は、頑張つて耐えてください。
では……

簡単なキャラ紹介

藤堂真：本作の外道主人公。能力は無し、ただし技能はあり。無類の女好き。本当の名前はアルカトラス

八意永琳「あらゆる薬を作り出す程度の能力」：天才薬師。なにかと真に付きまとう謎の女性。彼を好きだそうが……

綿月豊姫「山と海を繋ぐ程度の能力」：この国の重要政治家である綿月の娘。無類の桃好き。真の女好きによる最初の被害者。おっぱい

綿月依姫：豊姫の妹。おっちょこちょい、うぶな純情。そして突っ

込み役。能力はまだ無い。姉に負けないほどのおっぱい

ルシフェル：赤眼の水先案内人。天界から彼のサポートなんかを任
されているのだが……全くと言っていいほど出番がない。仕事しろ

情報提供者：主人公の知り合い。彼の仕事提供や一緒に仕事をして
いる。この都市には珍しい黒肌白髪のパンチパーマ。酒好き

依姫の葛藤、永琳の思惑……時々俺

馬鹿だ。

恐らくだが、今の自分の状況を知った全ての人がそう呟くだろう。愛してるわけでもない女性のために死地に飛び込む。

一般人には到底、理解できない行為だった。

もし自分を客観的に見えたら間違いないと思うだろう、なんて馬鹿なんだと。

大馬鹿だ。

特に大切でも気にかけるほど心配な訳でもない、これと言って特筆するほど仲が良いわけでもない。

むしろ邪険だろう。本気じゃないかもしれないが命の危険も何度かあった。

だが、嫌いな訳でもない。ただ、一度だけ告白紛いな事をされた。手錠付きで。

どうでもよかった。ただ、それだけだった。

救いようがない。

当にこの上なく自分が愚かに感じた。何処を見てもメリットが見当たらなかった。

利益もない、目的もない。正義もなければ、見当たらなかった。全てが無かった。

自分を貶して喜ぶ性癖じゃないが、今回ばかりはそう思った。

自分は何処まで愚かなんだと。

やるしかなかった。

常識より、利益よりも。そんなのよりも自分が掲げ、尊重する思想を選んだ。

無駄に命を捨てたつもりは無い。必ず勝利する。それ以外の選択肢はなかった。

徹退は自分が許さない。前進しか道は無い。だから、後は進むだけだ。

何故、思想を選んだのか？

そんなのは言わずもがな、決まっていた。とある人に成りたかったからだ。

自分のお手本のような生き方で、何より憧れで、誰よりもその人に近づきたかったから。

何に、成りたかったのか？

誰になりたい。そんなの、あの一人しか居なかった。

生き様どころか、今ではその存在全てが輝かしく観えた。

あの人の軌跡をなぞるようにして、自分の存在があった。

その人に少しでも、近づく為に自分は……。

俺は……誰の為に銃を握ってただろうか。

《都市 西側 旧貧民街》

俺がテンプレ主人公らしい格言を豊姫の前で堂々と宣言した少し後。

豊姫にこれからどうするのかと尋ねた。すると、以外にも返事はすぐに帰ってきた。

「私、とりあえずは依姫を連れ戻してくるわね。自分で何とかするとか言ってたけど、きつと迷子になってるでしょうし。その後で八意様に会いに行くわ」

熱くなると後先考えずに暴走しちゃうからね、あの子。

豊姫はそんな事を呟くと自らの能力を使い音もなく消えてしまった。

その去り姿を見ながら、こんな便利な者を持てるこの世界の生物は羨ましいことだ。と、妬むように思いながらも自分の目的を果たそうと、これから率いる部隊の隊員がいるであろう建物へと急ぎ足で向かっていった。

放置され人気のなく寂れた家々の間を土埃が風と共に通り過ぎていく。当たっていく風が独特の冷たさを頬に残しては去って往く。

そこでふとだが、今の季節は一体なんなのだろうか？ そんな事を考えてしまった。

乾燥した風がやんわりと辺りに音を鳴らし、じんわりとした痛みと共に喉のどを痛めていく。

この喉の痛みと今の寒さから考えれば、恐らくだが季節的には秋になるだろう。

ならば、この世界では秋に月見は出来るだろうか？ そいうい風習があるかは知らないが美女を隣にお月様を眺めながら一杯やるのも、なかなか乙なものだ。

馬鹿か俺は。

今の妄想を忘れるように頭を振る。今から人と殺し合つというのに……、自分は頭が狂ってるとしか思えないぐらいに悠長な事を考えてた。

しっかりしろ、自分は今から戦争をしに行くんだぞ？ 気を抜くな。

そう心に思いながら崩れた家の壁を潜り、廃墟の中を縫うようにして進んでいく。

「それにしても、これまた随分と損傷が酷いな此処は。都市から見捨てられたつてのは永琳の話で知ってたけど、ここまでとはな」

周りの建物の光景に目をやる。その損傷の酷さに、思わず心の中で思った言葉が漏れる。

「……………ん？ あれは」

崩れた建物を進んでいく途中、不意に目に入った窓の景色を眺めているとそこに違和感を感じた。

腐りかけた木枠の窓から向かいの家が見えた。風雨になんの処理もされずに長い間晒されたガラスは茶色へと変色していた。その汚れたガラスから切り取られた向かいの家は、なんとも不可解なことに至る所が崩れ落ちていた。

その光景を見て思わず急いでいた足を止めてしまふ。良く見える位置まで近づく。

周りの建物と比べてみるとその建物は半壊 いや、ほぼ全壊と

言った方が正しいか。

コンクリートが剥がれ落ち、むき出しになり捻り曲がった鉄骨だけが壁という形を何とか取り留めていた。

崩壊した天井、そのコンクリートの重みに耐えきれなかった床が陥没していた。

家具もバラバラに破壊されていて、とてもだが人が住んでいたとは思えないぐらいに原形を留めては無かった。

ここに来る途中の幾つかでこんな光景を見かけたが、これは更に酷い部類に入る物だった。

「ここは都市の住民から放置された場所。誰も近寄りほしくないし、誰も居ない……って永琳は言ってたよな」

先ほどの永琳の会話を思い出す。見捨てられた土地。昔の都市の面影を残す唯一の忘れられた場所。

よくある事だが、風化とか浸食なんかで基礎工事が疎かな建物が、その損傷に耐えきれず崩れることがある。だが、これは明らかに違かった。

辺り一帯に散らばった白っぽいコンクリートの破片。それが地上に放物線を描くようにして白いアーチを残す。

真新しかった、見ただけで分かった。一年とか三年とかそういう

のではない、かなり最近のモノだった

その光景に見入ってた俺は、ゲーム開始の時間が無いのにもかかわらずその不可解な事について考察をしてみよう。

自然的なモノで壊れたか？

違う、それはさっきの見解でハッキリした事だ。

人為的な誰かがやったのか？

否定はできないが、可能性は低い。ここには誰も近づかないし、第一にやる意味もメリットもない。しかし選択肢とするならこれが一番納得いくものだった。

「明らかに自然の物じゃねえ。だから人為的な物だ。だけど、一体何が……」

崩れたとか壊れたっていうよりも……。そう、なにか、こう……とてつもなく大きな力で壊されたって感じが

ピピピピピピピピピ、ピピ

崩れかかった壁を見ていたその時、何処からか規則的な電子音が

鳴りだす。それが俺の考えを一瞬にして無意識の海に返す。俺のポケットが震えている。携帯の着信音だった。

小刻みに振動し持ち主に電話が来ていることを知らせるそれをポケットから取り出し相手を確認してみた。液晶に映し出された文字は『情報提供者』。

その文字には見覚えがあり、迷わず通話ボタンを押す。すぐにスピーカーから騒音ノイズと共に別の騒音が流れる。

『よお、元気か相棒！俺の見ないうちに随分とまあ、面倒な事に巻き込まれてるなあ？』

何の用だ。そう言おうとしたが、それを遮る程の大声が耳を劈つんざく。

どこか楽しそうな、陽気なリズムに乗っている若い男の声がスピーカーの向こうから聞こえてくる。

『殺し合いだなんて、実に真らしいけどよ。でもよ？そういう時にこそ、俺のサポートが要るんじゃないかねえのか？』

「……なんてでめえがその事知ってたよ」

俺の名前を親しく呼ぶその電話の相手。こいつは俺の《情報提供者》。

『言ったはずだぜ？ 俺はいつでもお前を見ているってな！』

この都市で生きてく俺に情報を売ってくれる商売相手でもあり、この都市で唯一ともいえる俺と交流のある人物。

「俺は男に好かれるのは嫌いなんだがな、ドレビン」

ドレビン、あだ名みたいなものだ。俺が勝手に付けた名前。

本当の名前も知らない、俺の親友だった。

《都市 西側 会場近くの建物》

話は変わって、真が連れてかれた建物の前。

「ねえ、依姫」

「……はい」

彼と別れた綿月豊姫は真剣な面立ちで、どこか含みのある声で、自分の妹である綿月依姫と話していた。

「どうして私が怒ってるか……あなたは分かる？」

「……わかっているつもりです」

腕を組み、依姫を見下ろしながら口を開く。隠してはいるが棘のある口調が滲み出ている。それに対して依姫はと言うと、眉を八字にして地面に正座し豊姫の言葉を噛み締めていた。

「もちろん真の言い方にも多少の非はあったわよ？ でも……」

「……」

「でもね、いくらなんでも……他人を殴ったりしちゃダメでしょーがっー!!」

「う、ごめんなさいーっ」

忙しそうに太陽が照りつく旧貧民街。そこに豊姫の怒声が響いた

「まったく、今回ののはダメでしょ。いくら早とちりだからって済まされることじゃないわよ!」

「うう……」

「依姫、貴女は真面目なのはいいけど他人より少し度が過ぎるわよ？　今回は多少、真にも非はあるかもしれないけど絶対あなたが悪いわよ。もうちょっと他人の話を聞かないとまた今回みたいに勘違いで暴力振るうでしょ?」

「それは……そうですね。でも」

「でももへったくれもありませんっ!　少しは反省なさい!」

「……はい、反省します……」

ぶんぶん、と言わんばかりに頬を膨らませて『私、怒ってますよとアピールする豊姫。』

今現在、豊姫は永琳と別れた建物の前で依姫にお説教をしていた。

何時もの彼女ならぼわんとした笑みを浮かべ、桃なりなんなり口に出しているのだが、今の彼女の表情からは若干だが怒りを読み取れるほどであった。

真に極悪超人レスラーも真つ青のスーパーリンチを決めたあと、コンクリ投げつけて泣きながら走り去るという珍行を行った依姫の捕獲に成功した豊姫。

確かに依姫を攻めるような事を話の前半に持っていくという真の話し方にも問題はあったが、無実の人に顔面殴打した拳句にコンクリの破片を投げつけるという常識を逸した行いに対して、若干危機感を持ったのか。

何はともあれ、この行為を問題視した豊姫は姉として、家族として、一番身近な存在として。こういった行いを二度とさせないよう注意していたのだった。

説教が始まり五分ほど経った頃。

「……ふう、とりあえず、人の話は最後まで聞くこと。分かった？」

「はい、わかりました……」

「ちゃんと反省してる?」

「反省してます……」

「本当に?」

「本当ですよ……」

「うんうん、ちゃんと反省したわね。ならよし」

人差し指を立てながら何度もたずね、反省したことを確認する。そして確認が終わった後はいつものように、にっこりと微笑む。

申し訳なさそうに正座させていた依姫を立たせると、土汚れを払い彼女の手を引きながらそのまま永琳と別れた建物の中へと入っていく。

「とりあえず真が参加する事を八意様の伝えなきやいけないしね」

「え? あ、はい……そうですね」

そう言うとその後を依姫は素直に従いとぼとぼ歩いて行く。さっきの説教を少し気にかけているのか、下を向き俯いたままだった。

「……本当にすいませんでした、お姉様」

「んー? 私は別に気にしていないからいいわよ。ただ真の代わりに

怒っただけだしね」

「そ、そうですか……?」

「うんっ、それに真も大して気にしてなかったしね。とりあえずだけど、その言葉は真に会ってからもう一度言いなさい。無駄かもしれないけど、そっちの方が筋が通ってるでしょ?」

「はい……」

依姫からの謝罪の言葉を素直に受け取り、そしてさりげなくフォローを入れるのは流石姉と言っべきか。

だが、そのフォローをしても依姫の表情は浅く曇りがかったままだった。

「お姉様」

「ん? なにかしら?」

二階へと通じる階段の一步手前で足を止め、後ろを振り返る豊姫。

声をかけた依姫は何か言いにくそうに言葉をよどし、口を閉じようつとする。が、豊姫の視線を確認するように見てためらいながらも再度口を開く。

「あの……ですね。真さんの事なんですけど……」

「真？ 真について、なに？」

促すように言葉を投げかけるが、バツが悪そうに依姫はまたもや口閉ざしてしまふ。

なにが言いたいのかわからない。無意識のうちに苛立ってしまい、そのせいで若干だが言葉に角が立ってしまふ。

「真についてどうしたのよ？」

「あの、ですから……その。なんと言いますか」

「？ だからどうしたのよ？」

「……真さんは何か言ってなかったでしょうか？」

「だから、そのなにかってのは一体」

なんなのよ。そう言おうとして、何を言いたいのか理解した。

姉妹だからなのか、血の繋がった家族なのだからか。どういう根拠でなにかはわからないが、その戸惑う妹の表情を見て姉は理解したのだ。

この少女は気に病んでいるのだ。自らの偽善心のせいで彼を危険な目に遭わせてしまったことを。

殴ってしまい怪我を負わせたという事ではなく、自分のせいで本当は関わらなくてよかったであろう人物を、自分とは全くもって無関係な争いに巻き込ませてしまったのではないかと。

自分のせいで、姉の思い人である男を死の危険に晒させてしまったのではないかと。

綿月依姫は真面目である。

学校では先生に言われたことは何でも全身全霊で手加減なく取り組むし、掃除だろうがなんだろうとどんな事にも一切手を抜かないほど真面目だ。

そして、なにか一つでも失敗を起こすと必要以上に気に病むのも、彼女の性格とも言えるだろう。

その生真面目な性格だからこそ、何でも全力でやろうという彼女らしさを表しており、その性格が故になんでも自分一人のため込んでしまうのだ。

「それって、真の事でしょ？ それで言いたいことは、私のせいで真さんが危険な目に……って感じかしら？」

「……………」

無言で「くり」と頷く。

「八意様を守るためには仕方なかった。でも、そうした自分の押しつけのせいで真を命を危うくしている。それが自分でも許せないし、それで彼が自分に対してどんな感情を抱いているのか考えるのも怖い」

「……はい」

恐らく彼女が今考えているであろう事を大体だが、予測し口に出してみせる。

その内容が一致したのか豊姫の言葉を聞いた依姫の反応は分かりやすく、下を向いていた顔の表情がさらに影がかかっていく。手も力の有らん限りで握りしめている。

純情であり、純情でありすぎる。

我が妹の誇るべき場所でもあり、一番厄介な事。

たぶん、いや絶対。今の彼女をこのまま放っておいたら、このまま一人で抱え込んでしまうだろう。そしていつかは溜まっていた全ての感情と共に爆発してしまうだろう。

感情を溜めやすい人ほど、感情の抑え目がつかなくなった時の激しさは凄まじいものだ。

だから、この場合は何とかして依姫の悩みを解消してやるうと考
える。

暫く黙り込む。なにが最善かをその頭を動かし思考し、どのよう
な言葉が最適かを脳を回転させ模索する。

少し時間がたって、考えがまとまった。今はこれが一番だろうと
想えることを見つけ出す。

そして、

「んー、別にいいんじゃない？」

「……え？」

閉ざしていた口から出たのは、依姫の心境とはなんとも真逆で明
るく朗らかな声だった。

「だから、別にいいんじゃない？ そんな事を気にしなくても」

いつもどごりの陽気な声で、どごでもいいような口調でのんびり
返す豊姫。

「どごでもいい事……なんですか？」

「うん、本当にどうでもいいと思うよ。私は」

真の真似をするようにして肩をすくめる豊姫。その言葉に呆気にとられる依姫に構わず、補足するようにして豊姫は口を開く。

「あのね、学校の友達とか私たちのお手伝いさんとか。普通に居るような人ならともかく、ハッキリ言っちゃうと真に対して全部ムダなんだよね。その気持ちって」

「……は？」

「どついう事かと言うとね、ムダな理由なのがねえ。……真って変ってるんだよね。言い代えるなら変人？ たいした時間も一緒に過ごしてない私が言えたことじゃないけど、少なくともこの一言なら言えるよ」

「変って、真さんがですか？」

「うん。そうそう、そのとおり！」

さっきからオウム返しな依姫だが、それにかまわず豊姫はじっくり説明するように、ゆっくり言い聞かせてく。

「さっき言ってた変って言う事なんだけど 真ったら可笑しいのよ？ 今の今まで鼻押さえて涙目で痛がってたかと思うと、急に元気になってね。そしたら私に対してセクハラしてくるわ、不謹慎な

挑発をしだすわ……。でもね、そのまま馬鹿なことやってると思ったらいきなり真剣な顔で真面目になって熱く語りだすのよ」

眼を閉じ先の光景を思い出す。

あの驚を彷彿とさせるようなギラリと輝く眼。普通では感じさせないぐらいの熱く男らしい野性味と、何処か卓越した知的感を感じさせる冷たい笑い。両方を併せ持ったあの表情。

そして迷いもなく言い放ったあの言葉。

「理屈とか常識とか道理とか、そういうのは二の次で。何よりも自分の欲望や思想を現実にするのを最優先にしちゃうのよ？ 俺の道を邪魔する奴はどんな手段使っても排除だーっ！ とか言っちゃってね。アニメで出てくる三流の悪役みたいな台詞を真剣な顔でよ？ もっ、ほんと。可笑しくてね」

落ち着いて考えてみると、なんとも滑稽だった。それこそ今から腹を抱えて大笑いしてしまうほどだ。だがそれは真じゃなかったらの話。

あの時の彼はとても男らしくて、激しい情熱を感じさせて、あの姿が羨ましくて 凄くかっこよかった。

胸の動悸が苦しいぐらいに激しい。火傷したのかと錯覚するぐらいに頬が赤く染まる。それを考えるだけで、さっきまで何もなかった心の中を、別の何かが満たしていくのが分かった。

「本当ですか？ 本当になんか事言ってたんですか……」

「うん、本当。だからハッキリ言っただけその気持ちは関係ないのよ。例えばね依姫。真がもし貴女に何かしらの出来事に嵌められたとするじゃない」

「はっ、はい」

「もしそれが真の事を百回殺すような出来事でも、自分の信念が通っている事ならなんにも気にしないで笑ってるわ。人を馬鹿にしたような言葉を並べて、いつものような馬鹿な事を平然とやってるの」

「……そうでしょうか」

さすがに疑問を感じたのか、思わず言葉を返してしまう。だがその表情には曇りは無く、ただ単純に、本当かどうか疑問に思っているだけだった。

「そうよ、真なら間違いなくそうなるわ。……でね、真ならきつとね」「あー？ 別に気にしてないからいいよ。……なあ、そんな事より俺と一緒に夜のアバンチュールな時間を過ごさないか？ ああ、大丈夫。俺は初めてだろうが気にしないから」「とかなんとか言っただけ。貴女を口説き落とそうとするわよ？」

妙に似ている声で、詰めかかるようにして依姫を見る。

「な、なにを言ってるんですかつ！ させませんよそんな事っ！」

自分がそう口説かれていたの場面を想像したのか、瞬時に顔を真っ赤にし大声で反対の言葉を投げかけた。

「いやあ、でも私の初めてのキスを奪ったからねえ。否定しきれないわよ？ 真なら嫌がる依姫をそのまま強引にでも布団に押し倒して、いやいやと涙目な表情を舐めるように楽しみながら、無理やり服や下着を引きはがして憐れもない姿のあなたを上から包み込むようにして きゃっ！ 激しいっ！！」

「じっ、自分の妹で変な妄想しないでくださあー！ っ！！」

茹でダコのように顔を朱くして豊姫の口を塞ごうとする。が、塞ごうとした手は無様にもひらりひらりと豊姫の肩をかすめるばかりだった。

「そしてそして！ 強引な初夜を迎えた二人だけ一緒に時間を過ごしていくうちにあら不思議。最初は嫌いだっただその気持ちは段々と好意に変わり始めて、惹かれあう私と真。様々な苦難を乗り越えながらも、私たちは周りに祝福されながら教会で式を

「ちょ、ちょっと！ 途中からお姉様の願望に変わっていますよ！

「？」

「えへへへ………はっ！　いつ、いやー冗談。冗談わよ？」

途中で自らの世界に入り浸っていた豊姫は依姫に肩を揺さぶられ目覚める。甘い妄想で思考が鈍っていたのか。口からこぼれ出た涎を自らの袖で拭き、再度会話を進める。

「ごほんっ！　ね？　想像した通りで今さら真にそんなこと思っても全然気にしないでしょ？」

「それはそうですね。いまの甘ったるい将来図は必要だったのですか？」

「むー、なによ。いいじゃない別に。想像は自由よ」

「それは想像ではなく妄想ですよ」

指摘され恥ずかしかつたのか、逆に今度は豊姫が顔を赤く染めていた。

「まったく、これですからお姉様は……」

だが今の豊姫の行動に多少気持ちが解れたのか。さっきまでの憂いの色は無くなり、いつもの表情に戻っていた。

「それじゃあ話を戻して……。今話したことをよく考えてみて？
もしこれを踏まえた上で貴女がその心のもやもやを気に掛けるとい
うなら、真ともう一回会って話してみればいいんじゃない？」

「……そうですね、はい。次会いましたらそうしましょう！」

完全に吹っ切れたのか頷いた次の瞬間にはいつもの弾けるような
笑顔が戻っており、その表情を見た豊姫は安心するようにして目を
細め、階段へと振り返る。

「それじゃ、そろそろいきましょ？ 八意様が待つてわよ」

「はい、お姉様っ！」

一時的にかもしれないかもしれないが、悩みが解消されたその足
取りは側から見ても随分軽いものだった。二人して二階にへとつな
がっている階段を上り、八意がいるであろう目的の部屋の前で足を
止めた。

「こっちは大したことは無いわ。ええ、それよりあなたの方は？」

『――。――、――』

扉一枚隔てた向こうから若い女性の喋り声が聞こえてくる。豊姫は一瞬扉を開けるかどうか迷ったが、すぐに考えを纏めて気にせず扉を開ける。

「あの一、八意様？　いますかー？」

「あつ、お姉様！　人様の部屋に入るときはノックしなければと何度言えばー」

二人の声が変わり、さつきまで静かだった部屋に騒音を作り出す。とてもではないが目上の人の部屋に入る態度ではなかった。

「ええ、問題ないわね。なら　少し待ってて、彼女たちが帰ってきたわ」

見ると、部屋の中では赤青の星座をあしらった服に身を包んだ銀髪の女性　天才薬師こと八意永琳が、右手に持った携帯で誰かと話をしていた。

だが、部屋に入ってきた二人に気付いた八意は素早く電話をポケットにしまうと、豊姫たちの方を振り向きにっこりとほほ笑んだ。

「あら、依姫と豊姫じゃない。急いで真を探してたみただけど…
…彼は見つかったのかしら？」

「え、ええ。お姉様のおかげで何とか見つけれました」

「私頑張りましたよー！」

「そう、それは良かったわ」

目蓋を閉じ、何かを思考するかのよう。いや、ほんとは何も考えては無くただの無意識かもしれないが、腕を組み手を顎に当てる。

豊姫がわーいと手を振り自らをアピールする。が、その直後にはしたないと依姫から注意を受ける。

「彼が見つかったのは良いわ。それで、真は何て言ってたかしら？」

「あ、はい。そのことで実は」

え？

さっき起こったことを話そうと、口を開いた。それが途中で詰まった。

永琳の言葉を聞いた依姫は、何故かは分からないが、この言葉に違和感を感じた。

考え直してみる。別にどこもおかしい事は無い。なんの変哲もな
いただいたの疑問詞である。

だが、その言葉には何らかの不自然さを感じ取った依姫は言葉の返答に間が空いてしまった。

「あら、どうしたのかしら依姫？」

「……いえ、なんでもありません」

言葉ではそう言う。が、心の中に突っかった疑問は中々消える事はなく。依姫の心の中を彷徨っては雲を掴むようにして消えてしまふ。

「そう、ならいいわ。それで真についてなんだけども」

「あつ、はい。真さんについてでしたね、すみません。実はあの後「真は参加するそうですよ、そのゲームに」……あの、今話してるのは私なんですけど」

依姫の言葉を遮るように豊姫が割って入る。思わずジト目で睨んでしまふが、そんなのどこ吹く風。豊姫は一步前に進み出て、永琳に先ほどの会話の補足をする。

「へえ、私の前ではあんなに嫌がってたのね。あなた達が話すと参加するって……女として妬いちゃうわね」

「……そうですね、でも。彼の性格を考えると納得しませんか？」

「そうね真だもの。それで、確認のためにもう一度聞くけど……ほんとに彼はそう言ってたのかしら？」

「ええ、参加するって。確かにそういつてましたよ」

「ふうん、そう……」

豊姫の言葉を噛み締めるかのようにして間を開ける。なにを考えているのか全く分からせない表情のまままた口を開いた。

「とりあえず、あなた達には礼を言わなきゃならないわね」

「え？ いや、そんな礼を言われるようなことは何一つやってませんよ?!」

「いいえ、本来なら私が処理すべき問題を解決したのよ？ 過程がどうあれ私は結果論を尊重するの。それで結果、私はあなた達に助けてもらったのは変わらないわ。だから礼を言わせて頂戴、依姫と豊姫。ありがとう」

そう言うと、丁寧に頭を下げられ感謝の言葉を述べる永琳。

礼を言われた二人は、自分より遥かに身分の高い人物が頭を下げているのを目の当たりにして普通の人らしく、どんな対応をしているのか分からず恐縮していた。

「それでね、あなた達二人にちよつと話があるのよ」

「私達にですか？」

「そうよ。本当は豊姫依姫の二人には違う目的があつて来て貰つただけけれど……さっきの男達の事も考えるとちよつと雲行きが怪しくなつてきてね。今回は招いという申し訳ないけど、あなた達二人には先に帰ってもらつわね」

永琳の口から出された言葉。それは帰つていいと言う旨^{むね}だった。

「招かれたつていうよりは、拉致されたつて言つた方が正しくないねえ？」

「え……、いいんですか？」

上から疑問を口出す豊姫、それを華麗にスルーする依姫の順で永琳に返す。

「ええ、良いの悪いの云々。元はと言えば私が無理やり連れきちやつたもの。本来なら主たる私が責任もつて送るのが礼儀なのだけど……ちよつと今は席を外せなくてね。些^{いさ}か無礼^{みだり}だけど、私の護衛を何人が付けるわ。あなた達を安全に責任もつて送るよう指示しておいたから」

八意がそう言うと同時に扉の方から足音が鳴る。振り向くと、依姫が入ってきた扉から真を連れてきた黒服サングラスの男達が数人、部屋の中へと入ってきていた。

まるで準備していたかのような手際の良さに豊姫は思わずおお、と驚きの声を上げてしまう。

「それじゃあ、この子たちの事を頼んだわよ」

「はッ!」「」

八意の合図で黒服の男達は一齐に依姫たちへと詰めかかる。そしてそのか細い腰に手を回すと一気に肩に担ぎ上げる。

「わっ……わわっ!!」

「うわー、こんな人に送られるなんて……なんだかお姫様みたい!」

「そんなのんきな事言ってる場合じゃありませんよ〜っ!」

姉妹それぞれ違った台詞セリフを言いながらも黒服の人たちに担ぎ込まれ、外へと連れてかれる二人。

八意はその光景を見ながらも何時もの綺麗すぎる笑顔で手を振って、

「さよなら豊姫、依姫。会えるかどうかは分からないけど、近いうちにもまた会いましょう?」

そう言い放ったのだ。

再び自分一人になったその部屋で、永琳は頭に手を当て溜息を吐く。

少しの間何もせず動かない。そのままの体勢で少し時間が経つと、手慣れた手付きでスカートの右ポケットから携帯を取り出す。画面を開き、決められたボタンを押して番号を打ち込み、通話ボタン。

プププッ、という電子的な呼び出し音が5秒もしないで、電話からは男の声が響く。

『どう、そつちの用事は済んだ？』

「ええ、大した事は無かったわ。それと……御免なさい、少し待たせてしまったかしら？」

『いや、そんなに待ってないし大丈夫だよ』

それに、電話が切れる事なんていつもの事でしょ？　それが日常茶飯事みたいにスピカーから雑音と声が漏れる。

それもそうね、言葉には出さず心の中でそう永琳は考える。その時、考えると同時に激しい立ち眩みが彼女を襲う。

その立ち眩みの酷さに少しの間、額に手を当て黙ってしまふ。頭が痛い、足に力が入らず、壁に寄りかかって何とか体制を保とうとす

る。

今日で6回目の頭痛と立ち眩みだった。いや、8回だったか。

この所、頭痛や立ち眩みが酷くなってきた。昔は少しすれば自然と痛みも引き、治っていったが最近は自分が調合した薬を服用しなければ収まらない程にだ。

すると、電話の男は永琳の異常に気付いたのか体を気遣うような心配そうな声が聞こえてくる。

『大丈夫かい？ いきなり黙り込むなんて……。もしかして寝てないんじゃない？』

「心配しないで、ほんと、大丈夫よ。何でもないの」

心配の声を否定する。が、その言葉は何ともか細く、途切れ途切れで他人から見ればとてもじゃないが心配するなと言う方が無理だった。

『ねえ、一応聞くけど……。昨日は何時間寝たの？』

「……………結構寝たわよ？ ええ、それはいつもより多めに1時間も」

『はあ、1時間?! またそんだけしか寝てないのかい! あれほど睡眠時間は多く取れって……。一体何度言えば分かるんだよ、ったく』

電話の向こうからはやれやれと呆れたと言っよりも諦めに近い感じだった。

永琳自身もそれが体に悪いことは医者としても重々承知しているつもりだった。だが、彼女には時間が無いのだ。ある目的を現実にするのには、全くと言っていい程に時間が無い。

一分一秒でも時間を有効に使いたいと思ってしまい、ついつい徹夜をしてしまうのが最近、いやほぼ毎日と言っていい程に続いていた。

男は口に出すのが無駄だと分かったのか、溜息を付きながらも何か別なのにしようと話題を変えた。

『そういえば、さっき部屋に来てたのは誰だい？ 声からして女性だと思っただけど……』

「部屋？ あー、豊姫達の事かしら？ ほら昨日家で言ってた女の子の事よ。覚えてない？」

そう言つと、男から納得の聲が拳がる。

「ああ、昨日言ってた子達か。……それで、その子達はどっしたの？」

「ん？ 彼女達なら必要な目的は果たしてもらったから迅速に家に

「帰したわよ」

『帰したって……女の子二人だけでかい？』

「それなら安心して。少し強引だけど護衛達に送っていくよう指示したから大丈夫よ。道中変なのに巻き込まれる事は無いわ」

『そう、それなら安心だね』

永琳の言葉を聞いた男は安心したように返事を返す。電話をしている永琳の顔も若干にだが安堵が見受けられ、電話の相手はそこそこ気心の知れた人物なのか。

そんなことはどうでもよく、今まで壁に寄りかかっていた彼女がすっ、と立ち上がった。顔色はまだ悪いが、普通の行動には支障をきたす事は無くなったのだろう。

「それじゃ、もうすぐこっちではゲームが開始されるけど、あなたは大丈夫？」

『うん、準備は既に済んでるからね。後はその時を待つだけだよ』

「そう。ならいつでも行けるように待機しておいてね。内容は事前に指示した通りよ」

『わかってるよ。……まあ、待機はしておくけど、医者としてはなるべくそうならない事を期待してるんだけどね』

「あら、勿論私だってそうならない事を祈ってるわよ？　ただ、念には念を。何事にも対応できるぐらい慎重に準備をしておく。それに越したことは無いわ」

『そうだね。そういう所は本当、あなたらしいよ』

電話しながら永琳は扉を開け部屋から出る。建物の廊下に備え付けられた窓からは少し遠い場所で人が集まっているのが分かった。

「…………そろそろ行くわね。後は手筈通りをお願い」

『うん、後はまかせてよ』

「そう、頑張つてね」

そう言つて通話終了ボタンを押す。通話の終了を知らせる画面を見ながら携帯をポケットにしまう。そのまま、階段を下りこの建物で唯一外にへと通じる扉から外にへと出る。

「…………時間が無いのよ、私には」

さつき言われた言葉を確認するように頭に思い出す。思わずぼそりと呟いてしまったのか、自分の口から愚痴にも似た声が漏れる。

時間が無い、一刻も早く計画を完成させなければ。急ぐ必要がある

った。

「ただど……その為にはもう一つの計画も絶対に必要なのだ。」

「もしもの為の保険として。これも絶対欠かしてはいけない計画。」

「その計画の要員として、彼が必要なのだ。」

「藤堂真。貴方が私の計画に足る人材かどうか、じっくり調べさせてもらおうわ」

ふふっ、小さくだが思わず笑ってしまう。

その笑い声に似たのを聞いた瞬間、自分でも肩を竦めてしまう程に不気味で冷たかった。笑うという行為なのに感情を一切感じさせない底知れ無く恐ろしい声色。

だが、その微笑は廃れ果てた街を弄なぶっていく埃風に掻き消され、誰にも聞こえる事は無かった。

運命の齒車は確実に回っている。

着実に、微量ながらも確かに全身をゆっくりと回す。確かに廻る。

アルカトラスに悪い方向にへと、誰にも分からず暗闇でひっそりと廻っている。

依姫の葛藤、永琳の思惑……時々俺（後書き）

はい、このような駄目文を長時間にわたり見てもらい感謝感激雨あられです。

あらずじは無しで、今回は別なのを挿入しました。

今回は「都市での出来事」で出てきた情報提供者について少しと、依姫の真への葛藤。そして永琳について伏線を張らしていただきました。

普通の女性が他人を死地にへと連れて行ってしまったら、少しは悩みますよね？

最近自分の文章力の無さに全世界が脱帽している中、少しシリアスを入れてみようと頑張りました、ええ、それはもう。頑張り過ぎて目がノトパに張り付いてしまっぐらいに。

色々に入れ込んだ結果、1万字全てを消して書き直し、まだ不十分だったのでまた消して書き直しの結果でできたのが今回の話です。

今回の章は筆者が考える超古代編の3つの山場の内、一つ目なのでじっくり子供ビール片手にかきあげました。

まだまだ幼稚な文章ですが、完結まで見届けてくれれば幸いです。

もしよかったら、感想や指摘等をよろしくお願いします。

よおし、戦闘準備完了（前書き）

今回の話は5時間で書き上げたモノです。かなりグだつてるので勘弁してください。

いやですね、他の作者さん見たく連続更新なんて無理です私には、ええはい。

どうしてもグだつてしまふ。

はやくでれえーりんとか綿月姉妹井とかエロい話が描きたくて書きたくてしょうがないんだけど、自分の文才の無さがどうしようもなく恨めしい。

クリスマスプレゼントに誰か文才をくれないかな……ほんと、いや、まじでお願いしますよ。

ほんの1？でもいいんで、もう……

よし、戦闘準備完了

前回までのあらすじ

いい加減に女の子を抱きたい（迫真）
by 藤堂真

ドレビンから電話が掛かって来てから30分が過ぎた後。

電話の際にこの辺り一帯の地図を送ってもらい周辺を偵察をしていた俺は、あらかじめ決めておいた合流地点の建物に居た。

合流地点でもある廃墟の中に居る俺は、ちゃんと戦争に行く男らしく《探究者の秘宝》から取り出した今流行の夢の国の住人である黒ネズミがプリントされたアサルトベスト個人装備携帯用ベストに身を包みながら、頭を抱え雲一つない空を見上げていた。

「どうして人間は争うんだろうな。人と人同士が殺しあう……なんて無益なんだ」

今の俺の気持ちは若干センチメンタルな気分だった。

一時間前の出来事を冷静に考えてみれば……自分はなんて馬鹿なのだろうか。

「くそっ！ マジないわー。いたいけな少女の前で「俺は自分の道を貫くぜっ！」とか本気になって叫んじまうとか自分でもありえねえぞ！」

思わず慈悲深く聖人君子で全国有名な俺が暴言を吐いてしまう。それと比例するかのように幽鬱さは増していった。

「やばい……今になって本当に恥ずかしくなってきたぞ。まさかとは思うが豊姫の奴、学校とかの友達に電話なんかで「ねえねえ皆聞いてえ？ 私の知り合いにさ結構いい年した人が居るんだけどおー？ なんかそいつがあ、私に向かって俺は自分のプライドを貫くぜっ！ とかマジで言っちゃってるんだよお？ 超キモくなあーい？ マジウケるんですけどおー！ キヤハハハハハハッ！」とか言っちゃってたりしないよな？ 大丈夫だよな？」

どうしよう。今になってかなり気になってきたぞ、おい。もしそうだったら悶死しちゃうぞ俺

今すぐ口封じをしたいけど、あのお気楽桃娘が依姫とかにべらべら言ったらどうしよう。間違はなく腹抱えて一生笑われるよ。

俺のプレパラートのような純情ピュアハートがマッハで削れてく、

とにかく恥ずかしかった。美人な女とやろつとせばんつ脱いだら俺のナウい息子が何故か頭にパーカーを着用してた時ぐらいに恥ずかしかった。

あの時ほど今まで一生蓮托、一心団体である自分の息子が嫌いになったことは無い。

恥ずかしさに耐えきれず、俺は頭を抱えて地面をゴロゴロと転げまわる。

「ああっ、くそっ！ ばっくれてえ！ プライドとか外見とか捨てて今すぐどこか人の知らない遠い場所まで逃げてえ！！ そして誰か知らないけど巨乳の姉ちゃんが俺を癒してくれーっ！！」

どうしよう、こうなったら恥も外見も投げ捨ててルシフェルに土下座でもして時間を巻き戻してもらっしか他ないか？

そんな事を真剣に考えていると、不意に自分の後ろから石を踏む音がした。反射的にすぐそばに掛けてあったSCAR-Hを音の方向に構える。

視線の先、音の方向には白髪黒肌の男が此方を怪しい人物を見るような表情で突っ立っていた。

「よう真。その様子を見ると……ちょっと間が悪かったか？」

「いや、ドレビンこれは神聖たる正義神魔王ゼルベバブをこの世に

降臨するための儀式だ。だから気にしないでくれ」

「とりあえず突っ込むところが多すぎるが、正義神が魔王って可笑しくないか？」

「いや、本当に何でもないから気にしないでお願い……それより頼んでいた事はどうだった？」

「お、おう。すごい無理矢理だけど、まあ、いいか」

なんとか気を反らすことに成功した。危なかった、これ以上俺の失態を他の人に見られる訳にはいかなかった。

額に流れていた冷や汗を拭きながら、指で俺を呼ぶドレビン。

扉の近くに居たドレビンの元まで歩み寄る。と、その奥に複数の人の気配があった。

確かめるために扉の奥を覗き込むと、廊下には戦闘服の上に俺と同じく個人装備携帯用アサルトベスト……まあ、俺みたいにミツキーウスが描かれてるわけじゃねえが。それで身を固めた兵士達が戸惑った表情で俺を見ていた。

その内の半分が新兵なのだろう。一番汚れるはずのベストが新品同様だったし、銃の構え方が全然違ってなく、子供っぽかった。

ドレビンの方へ振り返り、話を続ける。

「よし、こいつらで全員か？」

「ああ、真が率いる部隊全員だな。結構大変だったぜ？ 電話したらいきなりこの辺の地図をくれて言うから送ってやった瞬間に場所だけ伝えてそこに部隊を連れて来いって言うんだもんよ。人使いが荒いぜ……ったく」

「お前が自分から手助けをしたいって言うてきたんだろ？ それに、ただ誘導するだけであってこれぐらい簡単じゃねえか？」

「場所の言い方がアバウトすぎんだよ。なにが「地図のこの辺に崩れた二階建ての建物があつから今すぐ俺の部隊がいる場所まで行ってそいつらを説得して連れてきてくんね？」だよ！ なんて何からなんでも全て俺にやらせてんだよ！」

「俺は色々と歩き回って忙しかったんだよ。ってか場所まで人を連れてくることも満足にできないのかお前は？」

「場所の説明が足らねえんだよ！ なにが崩れた建物だよ、この辺の建物全部崩れてんじゃねえかよ！？ せめて色とか言えよ、こっちが探すのにどれだけ苦労した事が分かってんのか！！」

「文句の多い奴だな。そのぐらい親友のよしみで何とか許せよ」

「どうして手助けしてもらってるのにそんな偉そうなんだよ……！」

ドレビンが額をピクピクさせながら此方を睨んでいた。……若干だがこれでさっきの気晴らしにはなった。そのおかげで頭が少しずつ冷静になってくる。

俺は隣で吠えてるドレビンを宥めながらも扉の奥に居た兵士どもをこっちに来るように指示する。

部屋の中に入れると中心を開けるようにして全員を並ばせる。一応は大人しく従ってくれるようで、特に目立った反抗もなく並び終える。

さっきまで俺しかいなかった部屋に、完全武装の兵士が10人、それと上半身スーツ下半身迷彩服の男が一人とかなりごったかえした構図になったが、まあいい。

「あーあー、うし。よーしてめえら耳の穴かつぽじってよく聞け。既に戦闘は始まっているから手短に行くが、俺がこの隊を率いる隊長の藤堂だ。そんで隣に居るのはドレビン。参謀、もしくは副隊長かなんかだと思ってくれ」

「ドレビンだ、一応はよろしく」

全員が俺とドレビンの事を交互に見ては不思議そうな顔をしている。なんでだろうか？

その疑問を感じ取ったのか、ドレビンが補足するようにして俺に小声で説明をしてくれる。

（真、こいつらは全員この国の正式な軍隊だ。なのに自分達を指揮する人物が一般人ってのが不思議に思えてんだらうよ）

(あー、そうゆう事か。なるほど理解した)

補足を受けた俺は、別段態度を変えることなく話を続ける。

「言っておくが俺は軍人でも何でも無い。ただのしが無い一般市民だ。だがお前らよりも銃の扱いには長けているし、この場の誰よりも部隊を上手く指示する自信がある。もしこの中に自分の方が隊長に相応ふさわしいと思う奴は手を挙げてみる。そいつのど頭撃ちぬいた後に一考してやる。おら、誰か立候補はいねえのか？」

そう言い放って全員を見る。今の言葉が効いたのか怯えて誰も手を上げようとしなかった。その反応を見てつまんねえな、と思いなからも話を進めていくことにした。

「とりあえず諸君はそのドレビンから何らかの説明は受けて知っているかもしれないが、俺達は今金持ちどもの糞くだらしない道楽の道具としてこの場に集められた。それはいいか？」

全員が微かにだが頷く。この辺は事前に説明済みだったのか、少しは手間が省けたな。

「ここからが重要な所だよく聞け。……俺達がここに集められた理由は今から俺達と同じく集められた敵と戦って、殺す。ただそれだけだ。その光景はこの辺り一帯に付けられた監視カメラによって

見られてるからな。逃げようとしたら即捕まるぞ？ だから逃げようと考えんなよ」

一応だが釘を刺しておく。こういう時に一人でも逃げだしたら全体が崩壊する。それだけは何とかして阻止したい。

「俺達が生き延びるにはそいつらを一人残さず殺さなければならぬ。そうすれば恐らくだがここから解放されるだろう。ここまでは大体は予想してたかもしれないが、問題なのは敵の人数だ」

一息入れるようにして間を開ける。兵士達は俺の説明を聞いて再度事態を理解したのか顔が強張っていた。

「敵の数は全部で36人。あっちも軍隊だな。それに対してこっちは12……ドレビンを含めると13人か。なんだろうと戦力に圧倒的差があるのは変わらねえな」

さらに説明をしようとしたところで、兵士の中から一人が手を挙げた。質問したそうな感じで恐る恐る俺の方を見ている。どうでもいいけどチワワみたいだな、いや本当にどうでもいいけど。

「質問があるみたいだな、なんだ」

「あっ、あの不躰ぶしつけな質問ですけど……我々は勝てるんですか？」

拳動不審な感じで声を上げた。それを表すかのように視線もしよつちゅう何処かに行くし、上げた手も若干震えていた。

その質問に対して俺は気怠そうな声で返す。

「おい、名前は何だ？」

「は？ 誰の名前ですか？」

「てめえだよ。ってか今の流れでお前以外誰がいんだよ」

「はっ、はい！ すいませんでした！ 自分は九条シンジ二等兵です！」

「よしカーマイン。てめえに良い事を教えてやる」

「は？ 自分の名前はシンジなのですが……？」

「いいかカーマイン。戦争の基本はなんだと思う？ 言ってみろ」

「え？ いえ、だから自分の名前はシンジですと……」

「その通りだカーマイン。戦争の基本は数だ」

その瞬間、全員からえー……と言った感じの視線がビシビシ伝わってくる。

それをぎろりと睨む事により黙殺する。怖いから視線をそらす
全員が何とも言えない顔になる。

んだよ、いいじゃねえかよ。シンジもカーマインも大して変わん
ねえじゃねえかよ。なあ？

「いや、ンしか共通点が無いぞ真」

君は人の心を読まないでほしいな、ドレビン。

コホンと咳払いをすると、話を続ける。

「今の状態では俺達の方が数で圧倒的に負けてる。普通にやったら
間違いなく俺達が負けんな」

「そつ、そんなあ……」

負ける、そう言った瞬間カーマインが何とも情けない声を出しな
がら泣きそうな表情で俺を見ていた。

「たくよ、戦う前からそんな弱腰でどうすんだよ。こついう時は
胸張ってもつと堂々と行くべきだろうが。」

全体に敗戦ムードが漂う中、俺はアサルトベストのポーチの中か
ら丸い球場の機械を取り出す。

空間映像投影機だったか、この前この国の軍備品をかつぱらに行った時に物珍しいと拝借したものだ。

それをスイッチを押し部屋の中央に投げ置く。すると、球状の機械から空中に立体ビジョンでこの辺りの地図が鮮明に映し出された。

3Dっていつのか、どちらにしる凄いモノだった。

「おー、こいつはすげーな。やっぱりこの世界の科学の進歩には驚くぜ」

「おい！ これってサーモナイザーじゃねえか！！ 真、お前こんなのをどこで手に入れたんだよ？」

ドレビンや兵士達もこれに驚いているのか、物珍しい顔付でこれを見ていた。ていうかこれってサーモナイザーって言うんだね、初めて知ったよ。

「とりあえず、今映ってる……つと、そうここ。この廃墟に居るのが俺達だ。んで、此処から少し離れた場所にあるこの建物が敵が拠点としている建物だな」

空中に浮いている立体地図のある建物を指で示す。その建物と今俺達がいる場所は二階に上がれば目視出来るほどの近さだ。

「真、さっきからほんと不思議に思っただが……一体その情報はどこから出てくんだ？」

「どこからって、それは俺が調べてきたんだよ。地図を頼りにわざわざ隠密行動しながらこの辺を調べ廻ってな」

スカウト^{追跡}技術ならお手の物だ。たいした労働でもなかったしね。

「ああ、だから俺に部隊を運ばせたのか……」

納得がいった表情でドレビンが呟く。だが、そんな事などどうでも良く俺の前に居たカーマインとは別の兵士Bが不安の表情のまま質問してくる。

「あの、藤堂隊長？ これを出して一体何が……」

「俺の予想だと今から敵の拠点に隕石が落下するんだよね。多分」

「え……ほっ、本当ですか？」

カーマインが苦笑いを浮かべながら尋ねる。

んな訳ねーだろ馬鹿。隕石なんか降ってきたら俺達も死んじゃうだろうが。

「っとそんな事はどうでもいいんだつたな。よし、ここで俺が
りがたい話をしてやっからよく聞けよ。敵が数で勝っている場合ど
うすれば自分達が勝てるか。大きく分けてその方法は2つある。1
つは兵としての質センスだな……だが俺達は他の奴の顔なんて見た事センス
のない即興の混合部隊。そういう場合に質センスなんかは必要ないし、明らか
に新兵なお前らには一片も無いからな。必然的に2つ目になる」

「はあ……」

「2つ目は作戦だ。その必要に応じた作戦があれば10倍差の戦力
があるのが打ち勝つことができるし、100倍でもだ。その位に作
戦するのは素晴らしいものだ」

桶狭間の戦い。織田信長が大軍を率いて進行してきた今川義元の
軍勢を、十分の一に満たない手勢で打ち勝ったことで日本では有名
な戦だろう。その時信長がとった作戦が奇襲だった。つまり作戦さ
え良けりゃ十分勝機はある。

信長は自らが率いる精鋭2000人だけで本陣に突入して今川義
元を打ち取ったのだ。信長にできて俺に出来ないわけがない。

生憎な事にこの部隊に精鋭何て言えるのは居ないが、俺が一騎当
千すればいい話。三國無双全シリーズを修羅でクリアした俺に不可
能はないだろう。

「今回俺達が取る作戦は奇襲だ。二手に分かれて同時に攻撃を仕掛

ける……これが一番シンプルだが、その単純さ故に練度の低いお前らでも望める効果は大きいからな」

「この人数で奇襲ですか？」

「そうだカーマイン。奇襲には人数なんて関係ない。求められるのはいかに素早く敵を血祭りにあげれるかだ」

「ですから自分の名前は九条シンジですと……」

「今からこの部隊を二つに分けるぞ。そうだな……俺が率いる6人。それと残りの7人はドレビンに任せよう。頼むぞ」

「オーケーオーケ、了解」

手を挙げ同意の意を示すドレビン。この中じゃこいつに部隊を任した方が効率がいいだろう。

「敵はこの建物の中に12人、外に展開している24人の3部隊に分かれてる。恐らく建物の方に居る部隊は全体を指揮する部隊、それで建物外の部隊は直接攻撃してくる戦闘部隊だ。それを逆手にとって俺達はまず建物の中に籠ってる部隊を叩く。そこで指揮系統を乱した所で一旦合流。その後に残りの残存戦力を1つずつ潰していく。作戦は以上だ」

ぱっぱと説明し、さくつと戦闘に移ろうとする……またしても兵士の中から手が拳がった。

「あのー、どうして敵が3つに分かれると分かるんですか？ 敵が分かれなくて36人のまま行動していることだって考えられるんじゃない……」

兵士Eが不思議そうに尋ねてくる。なるほど、何で俺が敵の部隊編成を詳しく知ってるか疑問に思ったわけか。

「自分たちが数で勝ってるという利点を敵が利用しないわけないだろ？ 敵だってお前らほど馬鹿じゃない。少しでも戦局を有利に進めたいなら頭を使ってその位の事をするだろうし、俺が敵の指揮官ならまずそうする。そして何よりも大きい根拠が俺の勘がそう囁いてるからだ」

「勘……ですか？」

「そつだ勘だよ。言ってくけど勘ってのは凄えぞ？ 勘さえ鋭ければ1？先の狙撃だつて避けれるからな」

「ははははっ、じよ、冗談ですよね？」

「冗談だと思うか？ やっぱり？」

「そ、そうですね、冗談ですよね？」

「……本当だ、俺がそうしたからな」

「……………え」

カーメインが信じられないって顔しながらこっちを見ていた。まあ、普通なら出来んよ、普通なら。

「よし、そうと決めたらすぐに行動するぞ。各自装備と武器を確認しろ。準備が整い次第、最低五分後には作戦を開始するぞ」

カーメインが他にも何か言いたげそうな表情をしてたが、それを睨んで黙殺し、とつとと戦闘準備をするよう伝える。俺も自分の持ち物を確認してとつとと殺しに行きますか。

そう思ってさっき投げたサーモなんちゃらを回収して手に持ったSCAR-Hの動作確認をする。

「おい真」

何処から持ってきたかは分からないがドレビンが小銃を構えて俺を呼ぶ。それに対して俺は返事もせずSCAR-Hの薬室を覗き弾が入ってないことを確認する。

「この間の仕事も面白かったけどよお、やっぱお前と一緒に居る方がウン10倍と楽しいなこりゃ！ 違法薬物売るよりもこっちの方がスカツとするぜえ！」

「俺的には面倒なだけなんだけどな……。まあ、俺は根っからの戦^グ争労働者だし頭を働かすより刺激があつて脳にはいいかもな」

一歩間違えたら頭が吹き飛んじやうけどね。その言葉は口に出さず心の中にしまつておく。弾倉のスプリングを確認する、続いてチャンバーも見ておく。どれも目立つような損傷は無かった。

「さてと、兵士達にはあんなこと言つてたけどよ。大丈夫なのか？」

「問題なんか何一つねえよ。きちんと作戦も立てた、兵どもの士気は万全とはいえねえが何人かぶつ殺せばそこは後々解決すんだろ。後はそいつら自身の問題だからな」

本当なら素直に従わない奴がいたら即座に頭撃ちぬいて恐怖で従わせるつもりで準備してたんだが、杞憂だったようだ。

少し残念だった。俺は鬼軍曹に憧れていたからああゆづのを一回やってみたかったのに。本当に残念でならなかった。

「いや、俺が心配してんのは真の事なんだがな」

「そんなもつと心配いらねえよ、俺はいつだって絶好調だ」

弾倉を遊底に叩き込む、コッキングレバーを引いて薬室に弾丸を送る。そのままS C A R - Hを担ぎ立ち上がる。これからの事に顔が邪悪に歪む。

慈悲なんてくれてやらねえ。一人残らず殺してやる。

どうしてかは分からなかったが、何故か激しい昂揚感に包まれていた。心の底から血肉が湧き上がる感じだった。

「さあて、と。自分達が勝利すると本気で思ってるお間抜けな奴らを銃殺しに行きますか」

不思議だったが、顔が笑っていた。これからの事を考えると、とても気分が良かった。

ただ一つ、心残りがあるとするなら。なんとも妙な胸騒ぎがするってことだけだった

よおし、戦闘準備完了（後書き）

本当にぐだった文を見てくださいませありがとうございます。

最後のアルカトラスの言葉が伏線に成ったりしちゃうのかなんていう気もしないんだけどな。

出来れば年内にもう一度投稿できるよう頑張ってみたいので、これからもよろしくお願いします。

……どうして綿月姉妹は人気無いんだろうね。可笑しいね、笑っちゃうね。

もし感想、御指摘などがあればお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家なるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6914t/>

東方転生旅人録

2011年12月27日00時50分発行